# 鈴の夏

花橘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鈴の夏

【Ｎコード】
Ｎ１０８８Ｗ

【作者名】
花橘

【あらすじ】
１５歳。夏祭りの夜。
帰り道の途中で、鈴は暴漢に襲われてしまう。
“もう助からない――――・・・！”絶望した鈴を恐怖の底から救ったのは、とある二人組みだった。
暗がりで柔らかく抱きとめてくれた、それはそれは綺麗なヒト。
けれど、“彼女”だと思っていたその人が、実は“彼”だと分か

って・・・？

《女子高校生と、女性と見紛うほど美しい訳あり退役軍人の、めくるめく恋愛模様》

## ＊花火と雨の夏祭り（1）（前書き）

※初めまして！この物語は、作中に刑法や諸組織・武器などの専門的知識が（ちょこっと）登場することもありますが、作者はいずれについても不知案内なので、そのまま真実と鵜呑みにされぬよう宜しくお願いいたします。間違っている点があらば、是非に指摘していただきたいです。

## ＊花火と雨の夏祭り（1）

「たぁ～まやー！」

真っ暗な空いっぱいに火の粉が広がり、遅れて打ち揚げの音が耳を打つ。それに負けじと張り上げた声で、ここぞという時の常套句を放った。熱気に満ちる夜の空気を、胸に大きく吸い込んで――――ではもう一度。

「たぁ～～～まやぁーー！」

あははは、と隣に立つ友人たちが可笑しそうに笑いながら、七色に移ろう周囲の景色を眺める。尺玉５０００発。そう銘打たれたこの夜のメインイベントに、誰もが目を奪われて足を止めていた。

不思議な高揚感だった。

鈴は満足げに笑む。そして、次々と咲く大輪の花を仰ぎ続けた。

ずっと、ずっと。

首が痛くなっても、彩られる空を目に焼き付けていたかった。咲いては儚く散り、夜空を落ちる火花が、消えてなくなるさまを。

【鈴の夏】

――――夏。

虫が鳴き、蛙が鳴き、どこかの風鈴が涼しく音を添える、茹だる暑さは昼も夜も変わらぬ八月某日のこと。日没も三時間と四半ほど

過ぎた夜間に、昼間以上の喧騒が響き渡っていた。
毎年この時期に催される恒例の夏祭り。地元の人間がこぞって集まり、暑さも忘れ一夜の馬鹿騒ぎに興じる日である。
“祭”の字がでかでかと書かれた提灯が連なり、立ち並ぶ屋台はたこ焼き、林檎飴、金魚掬い、綿飴など定番ものばかり。人ごみに埋められた大通りの中央では法被姿の老若男女が盆踊りを披露して、賑わいに拍車を掛ける。誰かの笑い声が木霊すれば、他方で迷子の放送が流れ、酒宴に盛り上がる団体が迷惑行為をせぬようにと交通規制の警官も借り出される、つい半時前まではそんな光景が夜の町を飾りに飾っていた。

現在、この日のメインイベントたる花火の打ち揚げが見事成功のうちに幕を引いたことで、各々店仕舞いと帰宅準備に取り掛かっているところ。

「ねー！たまやーって、どういう意味なのかなー」
「えぇっ鈴、知らないのに叫んでたの！」
「あっはっは！なにそれ駄目じゃん！」
「じゃあみんなは知ってるのー？」
「知らなーい」
「知らなーい」
「もー！なにそれー！」

人の波に流されるように河原の土手を歩く一行から、他愛もない会話が聞こえてくる。色取り取りの浴衣に身を包み、カランコロンと履き慣れぬ下駄で帰り道をゆく少女たちだった。それぞれの手にあるのは団扇、跳ね揺れる水風船、縮緬の愛らしい巾着など様々。道の傍らでは射的の屋台が片付けられており、売り子の表情から祭りの盛況ぶりが窺える。

鈴は、小一時間半ほど前に買った林檎飴をちびちびと齧りながら、未だ覚めやらぬ花火の興奮に浸っていた。

「綺麗だったねー」

「うん、綺麗だった」

毎年恒例とはいえ、やはりお祭りごととなれば、見るもの全てが特別で新鮮に感じる。夜空に打ち上がる花火の迫力は圧巻だった。真っ黒なスクリーンに咲く大輪の花。一発の命は短く、あっという間に終わってしまうのに、何故か心を惹かれてやまない。ともすれば耳障りな音さえも心地良く思えるのだから不思議である。咲いては散り、消えるその瞬間まできらきらと輝き続ける火花の美しさは、鈴を容易く感動させた。

いつまでも見ていたい。そんな願いとは裏腹に最後の特大尺玉が呆気なく散ってしまうと、無性に寂しく感じたけれど――そんな感傷さえも花火の醍醐味のうちだ。

「また来年もみんなで一緒に来ようね！」

文庫に結んだ帯の上からばしばしと叩き、隣に立つ友人が鈴に向かって笑う。林檎飴を嚥下しかけていた鈴は思わぬ衝撃で若干噎せ、仕返しとばかりに相手の背中を叩いた。

「もっちろんよ！彼氏なんかと行くような奴は許しませんからー」

「あははは っ。それ案外鈴だったりしてー」

「なにー！抜け駆けは御法度だぞ鈴ー！」

「もー！」

お祭り騒ぎの空気が尾を引いて、まだまだ夜が静まる気配はなかった。普段土手を歩いていれば聞こえてくる、町を横に貫く大きな

川のせせらぎも、人のざわめきに掻き消されて今は耳に届かない。
鈴たちの前を行く男性たちからは酒と煙草の臭いが微かに漂って、ちょっと不快だ。食べても食べても何故か一向に減っている気がしない林檎飴に苦戦しつつ、それでも気分は良かったのだけど。

「――――あっひゃっひゃっひゃ！！」

ふと、騒々しい中でも一際豪快かつけったいな笑い声が聞こえる。何かと思えば、河原で集まって立ち騒いでいた若者たちであった。手持ちの花火で遊んでいるようで、振り回した花火の火が尾を引いて、暗がりを明かるく点している。
笑い声の持ち主は女性らしかった。鈴の視線の先でけらけらと人目も気にせず子供のようにはしゃいでいる。

「はー、楽しそうだなあ・・・」

こちらは既に祭りもお開きで、後ろ髪を引かれながらも帰宅の途についているというのに、河原に炎の花を咲かせる彼らは・・・というより“彼女”は、まだまだ盛り上がりの只中とばかりの浮かれ具合であった。
男衆の酒焼けしたような野太くしゃがれた声に混じった、高く澄んで凛とした声は、不思議と鈴の耳によく届く。
何ともまあ楽しそうだ。正直羨ましい、とは鈴の本音であった。

「いい年した大人が煩いわねー」

同じく河原に視線を注いでいた友人が、呆れ半分にそう言った。
ふふ、と鈴は微笑と苦笑の入り混じった声で返す。

「でも、私だってまだ遊び足りないよ」

「右に同じく！」
「だよねえー。ただもう、くっそ暑いのは勘弁だけど」
「まあね。もーさあ、息苦しいのなんのって！」

不満を漏らす彼女らは、それでも笑顔を絶やさず会話を続けた。団扇で火照る首元を扇ぎつつも、賑わう夜を名残惜しむ。手放したくないこの楽しい時間が過ぎてゆくのを切なく感じて、鈴は再び河原へと顔を向け、眼を細めた。

するとどうだろう。目で追っていた女性がふと、こちらの視線に気が付いたかのように顔を上げて見返してきたのである。

思わぬことに小さく驚いた鈴は、まさかと一瞬固まってしまった。

「鈴、そこ危ないよー」
「・・・・・ちょっ、・・・鈴！」
「・・・え？と、わぁっ！」

だが人の流れに逆らい急に立ち止まってしまった彼女が悪いのである。後方を歩いていた友人の一人が咄嗟に名前を呼ぶも、そちらにばかり意識を奪われていた所為で反応が遅れ、背中からの力に押された鈴は、直前に注意を受けた道路の窪みに、簡単に足を取られてしまった。

躓いてつんのめった彼女はそのまま前方の男性の背中に頭突きをかましそうになって、慌てて踏ん張る。

「・・・いっ・・・たぁい！」

# ＊花火と雨の夏祭り（2）

時に馬鹿馬鹿しいことが理由ではあるのだが、この時鈴の足は密かに悲鳴を上げていた。今日は夏祭りである。浴衣を着付け大いにめかし込んだ。それは足元も然り、スニーカーやサンダルなどでは当然ない。花柄の鼻緒が愛らしい下駄なのだ。しかし新品ではあれど悲しいかな、その下駄は安物で、彼女のために誂えたものではなかった。多少窮屈に感じるサイズでも、無理をして鈴はこの日履き通していたのである。となれば成り行きとして靴擦れを起こすのは必然で、指の間の鼻緒に当たる部分には、歩き回った代償の立派な炎症が出来上がっていたのだ。

踏ん張った拍子に体重をかけたところは、残念ながら先ほどからじんじんとする痛みで鈴の頭を悩ませていた場所である。

「痛い痛いいたい・・・」

「もーあんたね、いきなり止まらないでよ。びっくりするから！」

「あ・・・危うくドミノ状態だった・・・」

「やめてよー！あんまり余所見ばっかしてると五体満足で帰れないぞ！」

「み・・・皆、私がこんなに痛がってることは無視なの・・・」

肝が縮んだせいでかいた冷や汗は、図らずも熱の篭ったうなじを涼しくさせた。口々に非難されてはどうしようもなく。「痛い」と「ごめん」を鈴は繰り返す。やや声を大にして騒いでしまったため周囲からも好奇の視線がちらちらと寄越されて、「ああ恥ずかしい」と思わずにはいられなかった。前方に頭突きをかまさずに済んだのは殊勲賞ものだと自画自賛したものの、おかげで余計な注目を浴びてしまったではないかと自分の注意散漫さに呆れた。

指の間の痛みは、確実に今の衝撃で酷くなっていた。

「あっほだねー。ほれ、肩貸してやるから」

「た、助かります瑠香ちゃん」

「あはは、女同士でって、なんか絵にならなーい。やっぱ彼氏は必要だな」

「もう、茶化さないでよー！今ほんと痛いんだからっ」

しょげた鈴は隣を歩く友人の肩に掴まって、ひょこひょこと土手を進んだ。履き慣れぬ下駄、そして着付け慣れぬ浴衣をもってしては、非常に体の動きが制限されるように感じて窮屈である。思い返せば、やぐらの下にいた踊り子たちは、盆踊りの音頭に合わせてよくもあれ程長時間動き続けていられたものだ。なんてことを思い出し、鈴は感心する。そうして、“ああ、こんなことならば、いっそ母親の勧めた一回りサイズの大きな下駄で我慢しておけばよかった”とも思わなくもない鈴であった。だがしかし、如何せん鼻緒の柄が趣味ではなかった。鈴の足にはやや小さめではあれど、新調した下駄の方が見目が良かったのである。

結果、迷うことなく選んでしまった下駄の、愛らしい花柄の鼻緒が、今は自らの足の指を痛めつけているのを見るにつけ、中々に苦々しい感情が渦巻いてしまうのだった。“皮でも剥けていたらどうしよう”と心配せざるを得ない。

「はぁー…」

嘆息しつつ自分の首に手を回し、張り付く髪を払う。大嫌いな猫っ毛をヘアピンに頼りせっかく結わえたお団子も、はらりと後れ毛を増やし、まるで彼女の心境を表すかのように力なく揺れていた。

「予報じゃ今夜雨降るって言ってたけど、見事外れたなぁ」
「でもよかったじゃん晴れて。花火中止にゃならなかったんだし」
「あーあ、また明日から暇だよ。ねーどっか行かない？海とか山とか川とか」
「夏休みの課題に手もつけてない奴が、なーに言ってんだか」
「うるさいなー！あんなのは大体３１日に踏み倒すもんでしょうが」

林檎飴を齧る鈴は、傍らのそんな会話を聞き流して、早く人の波がばらけないだろうかと前方を眺める。隙間から顔を覗かせていると、暗闇をぼんやりと照らす人工的な明かりがぽつぽつと見えてきた。ひしめいていた人々が徐々にその隙間を広げ、どうやら土手の一本道を歩き終えて町の通りに入ったようだということが分かった。ほっと一息つき、きょろきょろと視線を走らせると――――あった。コンビニだ。よかった、と胸を撫で下ろす。

「じゃあ、あたしたちこっちだから」
「あ、うん」
「また近いうちに遊ぼーね、メールする」
「分かった、肩貸してくれてありがとう瑠香ちゃん。みんなまたね」
「じゃあね、鈴」

機嫌よく腕を振りながら自分とは別の道を帰ってゆく友人たちを、鈴は笑顔で見送った。川の方から吹いてくる風が、申し訳程度に火照った首筋を冷やす。本当に毎日暑くて堪らない。そういえばどこかでカキ氷の屋台を見かけたが、こんな熱気に満ちた夜だ、さぞあそこは繁盛したことだろう。そう思った。

かり、とまた一口林檎飴を齧る。硬い。
買うんじゃなかった、と少し後悔しつつ、目当てのコンビニに入

っていった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

「ん、しょ・・・っと。・・・ってて」

悲鳴を上げる足に急かされて、鈴はベンチに腰を下ろした。そして片手に提げていたビニール袋を隣に置き、もう片方の手で持っていた林檎飴をどこに置こうか迷った挙句、置けそうな場所が見当たらなかったため止むを得ず口に銜えた。落とさぬように棒の部分に歯を立てる。

「・・・ふう」

コンビニにて絆創膏と消毒薬を購入した鈴は、その足で近くの公園に立ち寄った。なにせ一歩足を踏み出すたびに鼻緒と指が擦れて、それはそれは痛いのだ。行きも帰りも徒歩のため、悪化する前に絆創膏くらい貼らせてほしい。自業自得の感は否めないが、だからといって帰宅するまで我慢するのは嫌だった。まして車で迎えに来てほしい、などと家に連絡するなんて言語道断。母親の言葉を無視してこの下駄を履いてきた手前、そんな格好がつかないことはしたくなかった。

人気のない公園のベンチに腰掛け、祭りの余韻もそこそこに一人怪我の手当てをする。痛みに加え、虚しさが沸々とこみ上げた。

早く帰ろう。鈴はそう思いながら下駄を脱いだ。街灯だけでは足

の指の間が見えにくく、膝を折り曲げる形になる。膝の上まで浴衣が捲れ上がってしまって、慌てて回りに誰もいないか確認した。幸いにも人影はなかったので、ひと安心である。

首を捻って指と指の間を覗き込むと、案の定そこは真っ赤に炎症を起こしていた。皮が剥け、ぺらりと捲れている。痛くなるはずである。

「いたっ、あっ」

消毒し、思わず出た声。しまった、と思ったが、遅かった。銜えていた林檎飴は口からぽろっと離れ、一度膝にぶつかって地面に落ちた。一回二回転がり、べたりと飴の部分に砂が付く。

「・・・・・。もーっ！踏んだり蹴ったり！」

さっきまでの楽しい気分はどこへいったのか。鈴は唇を尖らせながら乱暴に二枚目、三枚目の絆創膏を貼った。ギプスを巻く要領で炎症を起こしている部分を何重にも覆い、反対の足も同じように手当してようやく曲げていた膝を下ろす。

浴衣の裾を整え、砂塗れになった林檎飴を見つめる鈴。買うんじゃなかった、とまた後悔した。

「ふぅ・・・」

しかし落ちてしまったものは仕方ない。拾い食いをする勇気もないし、残念ながらゴミ箱行き決定だ。無残な姿と成り果てたそれを見つめながら、鈴は暫しこの場で一休みし、足の痛みが引いてから帰宅することに決めた。

んーー、と背伸びをして。歩き疲れた身体をほぐす。足は勿論くたくただったけれど、肩や背中も参っていた。やっぱり慣れない格

好はしんどいなあ、と独り言ちつつ口を大きく開け、欠伸をした。
まるでどこかのご老体のよう。けれど鈴はこれでも青春真っ只中の十五歳で、高校生活初の夏休みを満喫し謳歌する普通の学生である。今日も中学以来の友人と地元の夏祭りに参加して、あっちへ歩きこっちへ歩きと忙しなく移動してはしゃいでいた。この疲労はそのツケだろう。靴擦れさえ起こさなければまだ元気だったかもしれないが、歩くたびに痛む足には流石に閉口してしまう。困ったものだ。

手持ち無沙汰になった鈴は、携帯を開いてメールを打った。先程別れた友人に宛て、簡単な文章を送る。

「・・・“今日は楽しかったね。また遊ぼう!”・・・んー、と、それから・・・“今度、夏休みの宿題一緒にやろうよ”。・・・よし、おっけー」

送信ー、と一人呟きボタンを押すと、画面が送信完了のそれに変わる。見届けて、やがてぱたんと閉じた。ハートのストラップがゆらゆらと揺れるのをぼんやり眺め、しかしすぐに厭きてしまったので、コンビニの買い物袋に突っ込んだ。

「・・・・・なんていうか、暇だなぁ」

裸足になった足をぶらぶらと揺らしながら、鈴は一人ぼっちで時間を潰す限界に早くも到達しかけていた。夜の公園をなんとなく見回し、けれど興味を引くものも特になくて、車道の方に視線を移す。そこも、時折自動車が通るだけ。どこを見ても退屈である。

「・・・・・・・・・」

まだ足は痛い。しかし暇だ。やっぱりもう帰ろうか。ここにずっ

と留まっていても、足の痛みが全て癒えるわけでもないし。どのみち帰るときには多少の我慢も必要だ。

そろり、と下駄に足を入れる。できるだけ刺激しないように鼻緒に指を通して、鈴は立ち上がった。

左手に、ビニール袋。そして足元に転がる林檎飴の成れの果てを複雑な心境で見遣り、手を伸ばした。公園なのだから、ゴミ箱くらいは設置されているだろう。

そう思って、鈴が身を屈めたときである。

## ＊花火と雨の夏祭り（3）

「ねえねえ、君・・・一人？」

歩道の方から聞こえてきた声に、鈴は反射的に顔を上げた。

「え？」

自分にかけられた言葉だろうか。判断しかねて、反応が遅れる。声の聞こえてきた方向を向くと、人影がひとつ。背後にある派手な看板のせいで、逆光になって誰だかよく分からないが、男の声だ。その後ろを車がまた一台通った。

鈴は目を細めて相手を見つめ、問いかける。

「私・・・ですか？」

「うん。一人？」

「・・・いえ、まあ・・・はい」

どっちつかずの返答で鈴は応じた。何だろう、この人。なんとなく危ない気がして、無意識に身構えた。そっか、一人か、と鈴が一人かどうかを繰り返し訊いてくる相手に、怪しさが募る。

「こんな所で何してんの？」

「・・・あなたに関係ありません。放っといてください」

鈴は警戒心から、冷たく突き放すような口調になった。早くここから離れた方がよさそうだ。さっさと帰ろう。相手に背を向け、鈴は別の入り口を目指し歩きはじめる。

「おっとっと」

だが直後、ぐっと掴まれた肩に足止めを食らった。

「ねえ、そんな拒否することないじゃん?」

「!ちょ、・・・っと!なに、」

するの、と、身体を強張らせる。浴衣と肌襦袢の布地越しに伝わる無骨な手の感触が、焦りと怒りを同時に呼び起こした。そうして、身を捻っても手を離そうとしない相手の顔を、鈴はようやく間近に見る。若い男だ。・・・とはいっても十五の鈴に比べればずっと年高だろうが、薄笑いを浮かべるその表情はなんとも気味が悪い。この男、危険だ。直感でそう思った。

「離して!大声出すよ!」

「は?やだなあ。ちょっと話しかけただけなのに。っていうか、俺と遊ばない?君お祭り帰りでしょ?浴衣姿可愛いね」

言葉とともに耳元へかかった吐息に、鈴はかっとなって手を振り上げた。しかし平手が男の頬を打つ直前、軽く避けられて失敗に終わる。空振りしたその腕まで掴まれてしまった。手から離れた買い物袋が、どさりと音を立てて落ちる。

「・・・・・・・・」

「ははっ、震えてんの?君、気が強い子かと思ったけど違うんだ。初心なんだね。可愛いなぁ」

「は、なして、ってば!」

鳥肌が全身に立った。“気持ち悪い、なにこいつ”と怖気が走る。次いで不意に顔を近づけた男の呼気から、強いアルコールの臭いが

した。相手が酔っ払いであることが分かり、鈴は更に焦る。この男、大方祭りに便乗して騒いだ酔漢だろう。

厄介な人間に絡まれたものだ。状況が状況なだけに下手をすれば警察沙汰になりかねない。嫌な予感がした。肩も腕も、強い力で依然と掴まれたまま。鈴は大声を出して助けを呼ぶべきか、やや躊躇して、しかし背に腹はかえられぬと、息を大きく吸い込んだ。誰かが異変に気付いてくれることを、祈って。

「誰かっ・・・!!助け、っ・・・んう・・・んん!!」

「あー・・・酷いなあ、せっかく褒めてあげたのにさぁ。人を呼ぶなんて駄目だよ」

「・・・・・・っ!!」

鈴が声をあげようとすると、見計らったかのように肩を掴んでいた手で男は口を覆ってきた。まさかそこまでされるとは思っていなかった鈴は驚きに目を瞠る。大声で助けを呼べば、男は怯んで鈴を離すだろうと思っていたのに。考えが甘かったらしく、助けを呼ぶ機を逸してしまった。心臓が鼓動を速める。拙い。これでは声が出せない。どころか満足に呼吸さえできない。

鈴は自由な方の手で必死に男の腕を離そうともがいた。けれども功を奏さず逆に両腕纏めて拘束される。くぐもった声が喉から漏れると、男は愉快そうに顔を歪めた。

“・・・・・うそ、どうしよう。誰か、助けて・・・!”

思ってもみなかった事態に湧き起こる恐怖。

さっきまでこの公園に人の影などなかったのに。少し休むだけだと油断してしまった。こんなことならもっと早くに帰っておけば。

どうしよう、どうしたら。

鈴は混乱する頭でなんとか逃げる方法を考える。このままじっと

していたら何をされるか分かったものじゃない。蒸し暑さからとは違う汗が伝った。

――――そして俄かに、雨が、降り始める。

ぽつ、と鈴の頬を撫でる雫。一滴、二滴。やがて無数に降り注ぎだしたそれは、辺りの全てを濡らしていく。通り雨か、量とともに段々と強さを増して降ってきた。

「あーあ、雨だよ。面倒くさいな。濡れちゃうからさぁ、ちょっとそこの公衆トイレの下まで行こうよ」

「・・・んん・・・っ!!」

男が公園の奥にあるトイレを顎で指して、鈴に移動を促した。引っ張っていこうとする男に、鈴は精一杯の抵抗を示す。

“嫌だ!”

個室の中に連れ込まれでもしたら、それこそ鈴に逃げ場はない。そんな所に誰が大人しく付いて行くものか。

“嫌だ、離して!誰か!”

全力で抗うものの、まばらに身体を濡らす雨に汗ばんでいた肌が体温を奪われる。同時に体力まで奪われているようで、もがく力が少しずつ弱くなっていた。息が上手くできない。苦しい。まともに働かない頭が酷くもどかしかった。

“助けて”と脳裏に浮かぶ父母の姿に縋る。目に溜まる涙が視界を曇らせ、溢れた一滴が雨に混じって頬を流れる。声にならぬ悲鳴に、余計に呼吸を乱され、引き摺られる身体の無力さを思い知った。

思い浮かぶのは、なぜ、どうして、という疑問符ばかりである。
鈴に一抹の諦念が過ぎったのは、そんな折だ。

「・・・・・・・・・っ」

途端、思い出したように痛みだす足の指が下半身の動きを鈍らせた。がくん、と腰から下の力が入らなくなった。
え、と自身さえ何が起こったのか分からないほどの、一瞬だった。自然その場に座り込む形となった鈴に、男は意表を突かれ、それまで始終薄笑いだった表情が矢庭に小さな驚きのそれへと変化した。そして、口を塞いでいた掌が、思いがけず、鈴の口元から離れる。

「・・・、っ!!」

今だ。と思った。

「・・・れか、誰かあっ!!誰か助けてっ!!!」

雨音に遮られぬように、鈴は１５年の人生を振り返っても二度とないほどの大声を、腹の底から張り上げた。自分にここまで叫び声が出せるのかと後に驚いたほどであったが、そうせざるを余儀なくされる事態に陥ったこともまた、この時が初めてであったので無理もない。ともかく一縷の望みとばかりに、誰かの耳に届くよう助けを求めたのだ。

その拍子にふっと腕を掴んでいた力も緩み、鈴に刹那の自由を与える。今だ、今しかない。その瞬間を見逃すことなく、鈴は痛みと恐怖にわななく身体を叱咤して、男の足元に体当たりした。うわ、と情けない声で相手は一歩二歩と後方によろめき、泥濘む地面に足を取られて尻餅をつく。

好機だった。早く、早く逃げなければ。助けを呼んだとはいえ誰かが来てくれる保障などない。そもそも人通り自体少ないこんな場所で、人が現れるのを待ってなどいられるわけがないのだ。だから、鈴が自力で男から逃げなければ。すぐにまた捕まってしまう。逃げなければ！

「・・・っ」

雨を吸った浴衣が動きを邪魔し、重くて仕方ない。濡れて滑る下駄はもはや履かない方がましだった。乱暴に脱ぎ捨て、もう痛いのかどうかも分からない足に力を入れる。まるで生まれたての小鹿のように震えながら立ち上がって、公園の出口を目指した。

「・・・っ、待てよ、この・・・くそ餓鬼が！！」

「っきゃ、あ！！嫌っ！！嫌だぁっ！！」

だが逃走を試みたのも束の間。再び男の手が鈴に伸びてきて衿を容赦なく引っ張る。あと僅かで逃げ果せたのに。またもや退路を断たれて鈴は今度こそ泣き叫んだ。

「い、やあっ！っやだ、やだ！！離して！！誰か、誰か助けてっ！！」

「煩えよっ！！黙れ！！」

最初とは打って変わって態度を一変した男が鈴に怒鳴りつける。ばしんっ。尚も叫び続けていると頬を熱い感触が襲った。口の中、舌が覚える僅かな血の味。殴られたのだと分かり、ついに声さえ出なくなる。

怖くてどうしようもなかった。後ろから衿を掴まれやや肌蹴た胸元に、涙なのか雨なのか、幾つもの雫が伝っていった。

“ああ、駄目だ”と思った。もう無理だ。逃げられない。先と同じように腕を拘束されて、漠然と感じる絶望感があった。抵抗しようにも、それ以上の腕力で押さえつけられるのだ。

公衆トイレのある場所へと引き摺られる。それが雨を凌ごうとしている為ではないことくらい、容易に想像が付いた。頭の上から聞こえてくる声は下卑ていて、鈴は肌蹴た胸元に絶えず視線を感じた。そこに無骨な手が伸びて肌を容赦なく弄るも、羞恥よりも恐怖が勝る。

そして、とうとう建物の屋根の下まで辿り着こう、というとき。

雨の中、全身を包む甘い香りに気が付いた。

## ＊花火と雨の夏祭り（4）

唐突に、それは唐突に。
刹那のうちに、状況は様変わりしていたのである。

「お、わっ！！ぐぁっ」

視線の先に、男が転がる。背中を強かに打ちつけ、地べたに倒れた。

“――倒れた？”

鈴は目の前の光景がすぐには理解できなかった。だって、今の今まで自分を拘束して、引き摺って、連れ込もうとしていた男が・・・・・倒れているのだ。男の背中が沈められた水溜りから、水滴が飛び散る。

「ひゅーっ。かっこいいねーノブちゃん」

揶揄の色を多分に含んだ声が、頭上から聞こえた。濡れた顔のまま上を向くと、人がいた。・・・いや、違う。正確に言えば、鈴は今、背中から抱き締められていた。

“――――だれに？”

ぽかんとした表情で見上げた先には、暗い夜の中、街路灯に照らされ浮かび上がる、美しい顔の女性がいた。
「だれ」と。呟いたつもりが、吐息だけしか出てこなかった。

「・・・けっ。うっせ。お前にだけは言われたくねぇよ」

他方から別の声が聞こえ、そちらに目をやれば、もう一人。鈴の視線は見知らぬ男性の姿を捉える。

「あははー、言えてるかもー。私のが腕っ節あるもんねぇ」
「言、う、な！」
「なははは」

何がそんなに可笑しいというのだろう。鈴の身体を抱き締めている女性は男性に向かってけたけたと笑っている。

・・・一体、何がどうなっているのか分からない。

分からない、けど。状況からみて、そこに転がっている男は、どうやらこの男性に伸されてしまったようだ。半信半疑に、でもじわじわと、湧いてくる実感。あまりにも突然すぎて、現実味がないけれど。

“・・・・・もしかして、私、助かったの・・・？”

自分とはまるで異なった、明るい雰囲気が流れる両者に、鈴は恐る恐る視線を送った。交互に見上げて、ふと女性と目が合う。

「あー！気分はどう？平気？」
「へ・・・？」

ぐい、と顔を覗き込まれた。大きな瞳が鈴を捉える。女性の向こうに雨を遮っている水色の傘が見えて、ああそういえばいつの間にか雨に打たれる感覚がなくなっていたな、と思った。鈴を抱えている片手とは反対の手で、彼女が差してくれていたのだ。

「あ・・・の、」

こういうとき、どう言えばいいのだろうか。気分はどう、と訊かれても。困ってしまう。正直に言ってしまえば、気分最悪なのだけど。・・・自分は、助かったのだろうか、本当に。

「アホか。平気なわけないだろ。それくらい分かれよ」

すると鈴に代わって、男性が口を挟んできた。溜め息をつきながら、そう言うと、女性の方は可愛らしく口を尖らせる。

「あら失礼しちゃう。分かってるっつの。こういうときの決まり文句ってやつよ。ほら!あんたはその痴漢野郎をとっとと警察署に突き出しなさい」

「へーへー」

女性に指示を出された男性は、ああなんで俺がこんなこと・・・とぶつぶつ呟きつつ、ジーンズのポケットから携帯電話を取り出し、カチカチカチとボタンを押した。耳に当てると電話が繋がり、会話が始まる。

「あートシ。お前ちょっと桜瀬(おうせごう)川近くの公園まで来い。今すぐだ。・・・なに?ちげーよ仕事だ仕事。あとお前アレだ、タオルとか毛布とかそこにあんだろ。それも持って来いよ。じゃあな」

手短に述べて通話ボタンを切ると、地面で伸びている男を横目に、もう一度溜め息。そして、近くに放り投げていた開いたままのビニール傘を手に取った。軽く水滴を掃ってから頭上に差した傘の下で、男性は首を左右に捻り、独り言のように面倒くせぇなあ、と零した。

・・・かと思えば、徐に振り返る。未だ事態を飲み込めぬ鈴と、

態度とは裏腹に思いの外優しさの篭った双眸が交差する。

「おう、嬢ちゃん」
「は、い・・・？」
「よかったな、助かって。ゆっくり休めよ」
「・・・・・・・ぁ、」

鈴は言葉をなくす。呼吸を忘れ、瞬きさえも忘れて止まった。
――ああ、自分は助かったのだ。
鈴はやっと、確信を持って身の安全を得たことを理解できた。
――助かった。もう大丈夫なのだ。この人たちに、助けられたのだ。

“・・・・・・よかった”

張り詰めていたものが、ふっと緩んだ。

「・・・・・・ふ、うぇ・・・っ」

いつの間にか止まっていた涙。けれどぶっきら棒なその一言で身の安全を確信し、また溢れてきた。嗚咽が漏れる。今度は恐怖からではなく、安堵から。
“お礼を言わなければ”と思うのに、言葉が上手く出てこない。もどかしくて、身体に回っている腕を掴んで、女性の袖をぎゅっと握った。鈴の声にならない思いに応えるように、回された腕に強く力が篭った。

「あーノブちゃんのせいで泣き出しちゃったじゃない。この女泣かせー」
「お、ま、え、な」

「嫌ぁね。冗談よ、じょーだん。これだから堅苦しい男は。・・・あー、よしよし。怖かったわね、もう大丈夫よ。安心してね」

そして女性は、よしよし、よしよしとなかなか泣き止まない鈴の背中や頭を撫でる。濡れて崩れた鈴の髪の毛を細い指が梳いてゆく。寒いでしょうに。そう言って、自分の服が濡れることも厭わず、少しでも冷えないように身体を擦ってくれた。

「いやぁ、ほんと危なかったわね。ノブちゃんと近くを通ってたら、君の悲鳴が聞こえてきたのよ。何事かと思って来てみればこの有様だし・・・驚いたのなんのって」

「・・・っも、誰も、来ないと思ってた・・・ありがとう、ございますっ」

「いえいえどういたしましてえ」

穏やかな声が鈴の耳に届く。どんなに感謝してもし足りない。偶然通りかかった人がいたなんて。運がよかった。鈴は途切れ途切れに、それでも一生懸命、ありがとうと繰り返し伝えた。擦る掌が温かくて、安心して、嬉しくて、止めようと思うのに、意思に反してまた涙が溢れた。

「んもーそんなに言われると照れちゃうじゃないの。あぁほらそんな格好じゃ風邪引いちゃうわよ。――ちょっとノブちゃん！利良（としよし）はすぐ来るんでしょうね！」

近くに転がっていた下駄を鈴に履かせながら、女性は男性に向かって急かす。

「さーてなぁ。今すぐ来いとは言ったがな。まぁどうせ暇してんだろ。そのうち来るって・・・・・ほら来た」

間延びした声で、男性は公園の出入り口を親指で指した。そこには、雨の中やや慌しげに角を曲がって来た一台のパトロールカーがあった。丁度正面の辺りで停車したそれから、同様に慌しげな警官が飛び出す。

「槻尾(つきお)さんっ！一体何が――」

「おおトシ待ってたぞ。毛布とタオルは持ってきたか」

「えっ？あ、あぁ、ここに。けど、なんでまた」

「ほら利良！さっさとそれ頂戴！この子風邪引いちゃうでしょ！」

「あ、粟飯原(あいはら)さん。ご無沙汰しています。で、何があったんで・・・」

「ご苦労。それじゃあこの男よろしく頼むぞ。暴行罪および強制わいせつ罪の現行犯だ。逮捕しろ逮捕」

「・・・す、すみません槻尾さん。ええと・・・何がなんだか、訳が分かりません」

到着するなり矢継ぎ早な会話を強いられた利良と呼ばれる警官。戸惑いを隠せないまま、きょろきょろと視線を走らせるその容貌からは、若さと、そして職務に不慣れな印象が窺われる。“新米”。その言葉が実に似合う。青くも実直そうな青年だった。

## ＊花火と雨の夏祭り（5）

「馬っ鹿ねー。事情聴取なんてこんな格好で出来る訳ないでしょうが！怪我も大したことないみたいだし、とりあえず私ん家連れてって。保護するから。ここから近いしね」

パトカーの後部座席に押し込まれ薄い毛布を肩から羽織らされた鈴の、雨に濡れた猫っ毛をわしわしとタオルで拭いていく粟飯原という女性。軽く乱暴に扱われて、鈴の頭が前後左右に揺れる。留めていたヘアピンも髪にぶら下がって揺れていた。

「そそそそんな、保護するなら署でお願いしますよ粟飯原さん！自分一応勤務中ですから、聴取も保護も出来ないなんて責任問題に・・・！」

粗方の事情を聞いた利良が、運転席から振り向き慌てたように粟飯原へ言うと、首を左右に振って彼女は答える。

「いーえ、とにかく今はこのずぶ濡れ状態を何とかするのが最優先よ。いいじゃない別に。ノブちゃんがいるんだし、責任は全部取ってくれるわよ」

「槻尾さんは今はもう管轄が違いますよ！」

未だ伸びている暴漢の襟首を掴んで車外にて待機している槻尾。その背中を指差し、利良は反論した。

「あーもう、はいはい利良くん。もう一台応援呼んでさっさとあの暴漢連行しなさい。ほら、あんたの手柄にしちゃえばいいじゃない。

・・・ノブちゃーん、フォローよろしく頼んだわよ」
「あー？・・・へいへい。仕方ねぇなぁ・・・」
「・・・・・・・・・」

鈴は頭上で飛び交う会話を、まるで壁を隔てた空間で聞いているかのようにぼんやりと耳に入れていた。粟飯原という女性の掌が容赦なく頭部をタオルドライするので、中身も一緒にぐるぐると回る。冷えた体が感覚を鈍らせていて、反応が遅い。視界に入るのは女性のシャツだけ。泣き腫らした両目は重く、まだ自分の身に降りかかった現実を受け入れるだけの冷静さはなかった。
“保護”？“聴取”？制服を着ているこの警官だけでなく、どうやら私服の二人も警察関係の人間らしい。鈴は尚更、助けてもらった自分の運の良さを思い知った。

「大丈夫、君？」
「は、はい・・・」

一頻り頭髪の水分を拭われた後、粟飯原は鈴の放心顔を覗き込んだ。毛布越しに肩と背中を撫で擦り額をこつんと合わせると、熱はまだないようね、と確認する。端整な顔を間近にし、ぼうっとしていた鈴は束の間、目を見開き息を飲み込んだ。

「――――さて、じゃあ」

行きますか、と。後部座席のドアを開き、槻尾から傘を奪う粟飯原はそう言った。

「ちょちょ、粟飯原さん！せめて彼女の名前と連絡先くらい聞かせてくださいよ」

「・・・・それもそうね。君、名前は？」

名前。鈴は訊かれて、やや逡巡した後、答えた。

「・・・尾本鈴です」

「鈴ちゃん、可愛い名前ね。じゃあ、住所と電話番号を教えてくれる？」

「・・・でも、わたし」

周りの流れに付いていけない。その戸惑いから揺れる瞳が、粟飯原の柔らかなそれとかち合うと、相分かった、とでも言うかのように彼女は微笑んだ。

「そうね、こんな目に遭って、今はまだ何が何だか分からないわよね。大丈夫よ、私はともかく、こいつら二人は警察の人間だから、安心して任せて？信用できる奴らだし、絶対に君を悪いようにはしないから」

そう言って、粟飯原は利良に指図した。はっとした顔で彼が取り出して見せたのは警察手帳。開かれると、その上面に本人の写真と九龍利良の名前、巡査と書かれた階級、下面にはＰＯＬＩＣＥと文字の入った徽章（きしょう）があった。

「す、すいません、最初に呈示しとくべきだったのに・・・でもこの通り、僕は怪しい者ではないので！まだ新米ですが、れっきとした警官です」

胸を張って誇らしげに、そして鈴に安心させるように語る利良を見て、粟飯原は口角を僅かに上げる。

「ほらね？大丈夫よ、鈴ちゃん。ああ、もう一人の胡散臭そうな奴はノブちゃんっていってね、あんなツラでも一応利良の元上司で、まぁ、人格には問題ありで間々憎たらしいけどね、職業柄こういう時に信用できることは保証するわ」

「・・・おい。問題ありとは何だ。問題ありなのも憎たらしいのもお前のことだろ変態野郎」

「あーあー聞こえなーい」

「てめ・・・」

喧嘩へと発展する二人に、利良は申し訳なさそうな顔で鈴を見た。それにどう反応すればよいのか分からず戸惑ったが、自分の心境を無視した賑やかな応酬が不思議と鈴はうるさく感じられない。胸に色濃く残る嫌な思いを払拭するかのような明るい空気に、束の間抱いた警戒心も自然と解けた。

“ああ、本当にこの人たちに助けられて良かった”

利良に連絡先を教えながら、人知れず再度ほっと安息のため息をついた鈴であった。

## ＊花火と雨の夏祭り（6）

そうして鈴は、近くにあるという粟飯原の自宅にて一時保護されることになる。と、一言で言ってしまえば簡単だが、被害者の保護も立派な仕事のうちの一つである利良は必死に粟飯原を止め、未成年だから保護者への連絡がどうの、僕の責任問題がどうのとまたも捲くし立てた。

しかし正直、この時の鈴は両親に連絡したいとは思えず、粟飯原の提案がありがたく思えてしまった。自分の気持ちの整理もつかぬうちに家族に会って、なんと説明したらよいのか分からなかったのである。心配をかけたくないという思いも、鈴の逃げ腰に拍車をかけてしまった。

結局、利良の主張は一蹴され、鈴の希望もあって、粟飯原の案が採用されることとなった。利良の半泣きの表情が鈴に罪悪感を抱かせたが、槻尾という男性が彼の上司――正確には元、らしいが――とのことなので、彼に害が及ばぬようにと粟飯原が「ノブちゃん、後始末よろしくねー」と何だか鈴には難しくてよく分からないことを頼んでいた。一番の面倒ごとを都合よく押し付けられていた本人は、大層不愉快そうな顔でぶつぶつと文句を言っていたが。

「それじゃあ悪いけど、後は頼んだわよ」
「・・・・・ちっ。しゃーねぇなぁ。・・・一回貸しだぞ」
「ふふ、さーんきゅ。やっぱ持つべきものは権力のある友達よね」

にっこり屈託のない笑顔で粟飯原はそう言い、纏めた長い艶やかな黒髪の後れ毛が肩を滑るのを片手で払うと、くるりと鈴の方を向いて、穏やかな笑顔はそのまま、掌を上に向けて差し出してきた。

「ほんじゃ、ま、そういうことで。我が家まで、お手をどうぞ、お嬢さん」

首を傾け、彼女は言う。まるでダンスでも申し込むかのような物腰に、鈴は束の間きょとんとして反応が遅れたが、その後おずおずと手を伸ばした。

「・・・はい、良い子ね」

遠慮がちに乗せた鈴の小さな手を、粟飯原は確りと掴んで車外へと促す。包まれた片掌の温もりを心地良く感じながら、鈴は下駄を履いた足を静かに濡れたアスファルトの上に降ろした。

「あの、これ、ありがとうございました」

肩から掛けていた毛布を座席の上に置き、ぺこりと一礼する鈴。

「そんなこと気にしなくていーのよ」と明るい声が頭上から聞こえれば、「お前が言うな変態野郎」と鋭い突っ込みが横から入った。

「あ、その痴漢男にゃ厳罰下すのよー。女の敵なんだから！」

傘からはみ出さぬように鈴の手を引き、すたすたと歩きはじめた粟飯原は快活にそう言葉を残してその場を去って行く。後方から何とも言えぬ大きな溜め息と文句が聞こえた。尾を引かれてちらと視線だけを向ければ、ぞんざいな扱いで暴漢を車へ放り込む槻尾の後姿と、項垂れた利良の姿が鈴の目に映った。そしてエンジンがかけられ、パトカーがゆっくり発進すると、暗闇の中で光っていた赤色灯も段々と遠ざかってゆくにつれて見えなくなってしまった。

視線を元に戻して自分の足元を見る鈴。炎症を起こしていた部分

はやっぱりまだ痛くて。一歩踏み出して鼻緒に擦れるたび眉間に皺が寄る。雨を擦った浴衣は重く動きにくいし、肌に張り付いて不快だ。引かれる片手に支えられて、なんとか前に進めているようなものだった。繋がれた手を視界の真ん中に置くと、細くて繊細な指が安心させるように鈴の手を包んでいた。それでも何か心細く感じて、ぎゅ、と握り返すと、粟飯原はこちらに気付き明るく笑った。思いきや、繋いだ手を解き、鈴の肩に腕を回してぽんぽんと軽く叩く。

「だーいじょうぶよ！何も心配しなくてオッケーだから、ね？」

見上げる先に、頼もしく微笑む綺麗な顔。冷えた体の芯まで沁み込むような声は、さも彼女の人格を表しているかのように深く柔らかだ。背は小柄な鈴よりもうんと高く、すらりとした体躯もまるでモデルのよう。長い髪は後頭部で無造作に束ねられており、湿度を増した空気をも寄せ付けないかのようにさらさらだった。涼しげな白いシャツは長い袖を肘の辺りまで捲られて、若干草臥れたような皺になっている。そして薄い、けれども夜の闇に色を濃くしたジーンズが、飾り気のない彼女の長い足を引き立たせていた。特別なものは何も身に付けてないのに、目を惹かれる。きっとこんな状況でなければ、羨ましいなぁ、なんて息を吐きながら見とれていることだろうに・・・。

――――傘を叩く雨音。からんころんという下駄の音。夜も更けてきたためか、周囲にはやはり人影もなく、自分たちの他には道路の反対側の軒下を野良猫が歩いている以外、動くものはない。鼻歌を歌ってなんとも上機嫌そうに歩く粟飯原に、ひょこひょこと痛む足付いて行く鈴。段々と弱まっていく雨脚を傘の下から眺めた。やっぱり通り雨だったようだ。道路に溜まった雨水が流れ、側溝の網に吸い込まれていっている。

振り返ると、街路灯にぼんやり照らされる公園が見えた。夜空を落ちる花火の火の粉のように、しとしとと雨が降っては、真夏の蒸し暑い夜を冷やしていた。

## ＊花火と雨の夏祭り（7）

家がすぐそこだという粟飯原の言葉は本当で、歩いて五分とかからぬ内に二人は目的の場所に到着した。

そこは小さなアパートだった。彼女が言うには、自分と大家以外は誰も住んでいないのだとか。「だから人目を気にしなくて結構快適なのよ」と続けて話してくれた。錆びた鉄骨の階段を上って、三部屋並ぶ二階の、一番手前に位置する部屋の前に立つ。鍵を開けると、軋むドアが二人を中に迎えた。

「どーぞ。自由に寛いでー・・・っじゃなくて、その姿をなんとかしないとね」

畳んだ傘を傘立てに挿して、ずぶ濡れの鈴へ向き直る。間髪置かず、彼女はお風呂に入りなさい、と命令してきた。

「え、ぁ・・・でも・・・着替えだけさせて貰えれば、それで充分・・・」

なんだけど、と鈴。けれどもその主張は一蹴される。

「だめだめだめ。何言ってんの。一時でも私が預かる以上は、君に熱一つ出させるわけにはいかないからね」

妹を叱り付ける姉のように彼女は鈴を諭した。とはいえ人様の、況してついさっき会ったばかりの人の家の浴室まで使うのは、なか

なか気が引ける。言われるままにここまで付いて来てしまって今更だが、本当に来てよかったのだろうか。少し場違いな気がして鈴が了承を渋っていると、ほらほらさっさとする、と言われ両脇に腕が伸びてきた。

「ひゃ、」

「はい暴れないでねー大人しくしてるのよー」

ひょいと軽々抱き上げられた鈴は、下駄を脱がされそのまま浴室まで連れて行かされると、淡い照明に照らされたユニットバスの床に立たされた。靴擦れになっている足の指の間が痛い。公園のベンチで手当てしたときよりも、恐らく悪化しているに違いない。入浴するとなるとそれは大層沁みることだろう。想像して、少しげんなりした鈴に、声がかかる。

「足は後で消毒したげるから。ちょっと沁みるだろうけど我慢我慢」

知っていたのか、と軽く驚きながら渋々頷く鈴の傍らで、彼女は蛇口を捻り、小さな浴槽に湯を張る。その場に鈴を残して着替えやらバスタオルやらを取りにいった。そうして再び戻ってくると、シャンプーとかは適当に使っていいから、と言い残して自らは浴室を後にする。

「ではではぁ、ごゆっくりー」

ぱたん。と、ドアが閉まった。

「・・・・・・・・・」

鈴の耳を打つのは、蛇口から流れる湯の音のみ。改めて浴室を一

周、見回して。ほう、と溜め息をつく。

“ここまでしてもらうなんて、何だか申し訳ないけど・・・”

でも、と立ち込める湯気とその温もりに誘惑される。強がってはみても、湿った身体はやはり不快で。本当に風邪を引いてしまえば、それこそ彼女に迷惑をかける・・・と考えて。観念した。足は痛いだろうけど、我慢するしかない。

ぴったりと張り付く浴衣を、脱ぎにかかる。濡れているせいで帯が解きにくく、悪戦苦闘した。浴衣、肌襦袢、下着の順に脱ぎ終わると、肌に浴槽からの温かい空気が触れる。いかに今の身体が冷え切っているかを自覚し、再度彼女に感謝した。温かい。それが心地良い。

無造作に畳んだ衣類を見て、これは帯も浴衣も襦袢も全部一式クリーニングに出さなければ、と鈴はそんなことを思いつつ、少しびくびくとしながら、まだ中途半端にしかお湯の溜まっていない浴槽に浸かった。ちゃぷん。湯気に包まれて、小さな音が響いた。

「・・・・・あったかい」

身を沈め、素直な感想をひとり述べる。ぴりぴりと傷は痛むけれど、それ以上にあったかい。ああお風呂だ、とよく分からない感嘆の声を漏らし、目を閉じた。眠ってしまいそうだ。温もりにたゆたいながら、ぼんやりと薄れゆく意識を感じていた。

いけないとは思いつつも、鈴はうつらうつらと夢と現の境を彷徨った。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

うっかり湯船の中で眠っていた鈴を起こしたのは、浴室のドアの向こうからかかった心配そうな声だった。はっとしてぱしゃんと跳ねた湯の中から起き上がった鈴。慌てて返事をすると、そのまま浴槽から出て、洗髪もそこそこに終わらせてドア越しの苦笑する声を聞きながら身体を拭いた。着替え――半そでのトレーナーとスウェットパンツだったが、足の長さが随分と違ったので裾を三回ほど折り返す破目になった――を済ませ、浴室を後にした。居眠りをしていたのがばれてしまい、すっかり温まって薄紅く染まった身体が、恥ずかしさから少しだけ色を濃くしていた。

「寝るのは構わないけど、まぁお風呂は気をつけてね？心配しちゃうからさ」

「ご、ごめんなさい・・・」

八畳ほどの広めの部屋で大人しくベッドに腰掛けて差し出す鈴の足に、粟飯原は消毒を施していく。頬を僅かに染めて視線を彷徨わせば、さも可笑しそうに笑われた。じんじんと疼く傷に一つずつ絆創膏が張られ、手当て完了。ありがとう。そうお礼を口にすると、濡れた頭が撫でられ、結局、髪まで乾してもらった。至れり尽くせりの鈴である。

「・・・はぁ、これ美味しい」

「でしょう？」

美容と健康にいいのよ。と言って渡されたのは、梅茶の入った湯飲み茶碗。ほのかに甘く、ほのかに梅の香りが漂う薄紅色のお茶だ。口に含むとじんわり味が広がる。それを両手に、鈴は部屋を一周ぐ

るりと見回した。
小ざっぱりとした簡素な部屋だった。ものがない。ベッドとテレビと脚の短いテーブルと、あと隅にある難しそうな書籍ばかり並べられた本棚。必要最低限の家具だけ。そのせいか、実際の広さ以上にうら寂しい気がした。おそらく彼女は一人暮らしなのだろう。生活感を感じるものがあるとしたら、ベッドの端に放られているネクタイくらい――恋人のものだろうか、と考えて、鈴はもしかしたらさっきの槻尾という人がそうなのかもしれない、と思い至った。

“・・・あまりじろじろと眺めるのもよくない、よね”

鈴は部屋の観察も程ほどに、グレーのカーテンがかかった窓に視線を止める。
すっかり雨も止んでしまったのか。その向こうからは、水の滴る音ひとつ聞こえてこない。少し前まで人ごみに花火にと賑やかな環境に囲まれていたのだが、今は打って変わって静かな夜だ。
――ああ、どこかで蛙が鳴き始めた。

## ＊花火と雨の夏祭り（8）

おおよそ気持ちも落ち着いてきた鈴は、少しずつ胃に収めていた梅茶の湯飲みをテーブルに置き、粟飯原に向き直り姿勢を正した。

「・・・あの、ありがとうございました」

「ん？」

「その、警察署、じゃなくて、ここにお邪魔させてもらって・・・」

自分の家に連れて行くという粟飯原の提案がなければ、今頃鈴は警察署だ。彼女がああして申し出てくれたことに感謝した。おかげで気持ちを落ち着ける余裕が少しずつ増えてきているのである。入浴させてくれたことに始まり、今もこうやって彼女の生活スペースに温かく迎え入れてもらっているのは、普通ではありえないことだと、ちゃんと理解して感謝しなければならない。ひとえに、粟飯原という女性の人柄が故なのだ。

「すぐにお礼言わなくてごめんなさい、それにこんな迷惑かけて・・・私、厚かましい、ですよ、ね」

へら、と弱々しく笑う鈴。猫っ毛をくしゃりと撫でて、ぎこちなく手を下ろす。厚かましい。そうだ、厚かましいのだ。自分で口にした途端、余計にずしりと圧し掛かってくる言葉。彼女に感謝するだけで、その厚意の上に胡坐をかいていて、果たして良いのだろうか。だって、これは、今ここに自分が居るのは、自分の我が儘でしかない。本来なら被害の当事者である自分がいるべき場所は、今ここではないのだ。粟飯原は嫌そうな素振りなど微塵も見せないが、もしかしたら、心の中では鈴のことを迷惑に思っているかもしれな

い。いや、きっとそうに違いない。だって、だって。

「だって、私がお父さんとお母さんに言うのが嫌だからって、それで、お姉さんにも、さっきの人達にも甘えて、迷惑、かけて・・・ごめんなさい。ほんとに、情けなくて・・・いくら、あん、あんな目に、遭ったからって――――っ」

膝を抱える。ぎゅうっと皮膚が白くなるまで両腕を掴んで、ぽろぽろと流れる涙を顔ごと隠した。――――駄目だ、落ち着けたと思ったけど、やっぱり駄目だ。光景を思い出せば同時に恐怖も蘇る。助かったけど、彼らに助けられたけど、嫌な記憶も都合よく消えてくれるなんてことはない。「もう大丈夫、平気。お邪魔しました」そう言って、さっさと帰るべきなのに。鈴に、強がる余裕はまだなかった。

「・・・・・・・・・・っ」

小さな子どもみたいで、みっともない。こんな風に泣いたって尚更彼女を困らせるだけ。公園であれだけ涙は流したじゃないか、もう、泣き止まなきゃ。鈴は、ぐしぐし堪えきれない涙と鼻水を無理矢理拭った。

「・・・・・・はぁ」

・・・不意に、目の前で溜め息をつくのが聞こえる。あぁ、やっぱり呆れられた。怒らせたんだ。肩をびくりと揺らして、何を言われるかと怯えるように縮こまる鈴。

居た堪れない気持ちで身構えていた彼女に伸びてきたのは、しかし、公園で抱き締めてくれた時と同じ温もりを持った腕だった。

「馬っ鹿ねぇ。子どものくせに、余計なこと考えるんじゃないの」

ふわり、正面から包み込まれる。背中と後頭部をぽんぽんと、また同じように叩かれて、腕で隠している鈴の顔を覗き込まれたのが、何となく、空気から伝わった。

「鈴ちゃん、何歳？」

「・・・じゅ、十五、さい・・・え、！」

答える鈴に、突如強い力が加わる。両頬を滑り込んできた掌で挟まれて、ぐいと強引に上を向かされた。

「・・・！？」

「あのね、十五やそこらの女の子が、強がって変に大人に気を遣うもんじゃないわよ。誰だって同じ目に遭えばそりゃ情緒不安定にもなるっつの。厚かましいとか考える前に、もっと周りに甘えなさい。悪いけど、女の子一人世話焼いたからって、迷惑に思うほど私は度量小さくはないわよ」

頬を包んだ掌が耳の方へ移動して、そっと髪を梳いてゆく。瞳を覗き込む端整な容貌が、にっと笑顔のそれに変わると、少しだけ尖った犬歯が奥に見えた。

「・・・あぁ、それとも鈴ちゃんは、私よりもあの無駄に顔だけは良い似非野郎ことノブちゃんの方に付いて行きたかったのかしら」

「・・・！え、ちちちが、違う！」

ぶんぶんと首を横に振ると、でしょう？と言われる。同姓の鈴でも絆されてしまいそうな美女の満面の笑み。間近にある迫力に、妙に焦ってしまう。付加疑問で返された言葉に、今度は縦に首をぶん

ぶんと振った。頭蓋内が揺れて、くらりと眩暈がしたのは言うまでもない。

「だから大人しく、君は世話焼かれてなさい。ついでに今日は泊まっていけばいいわ。ご両親には連絡するから」

「・・・で、でも」

“でも”も“だって”も禁止！このハルさんの家に居るうちは私の言うことは絶対よ。郷に入っては郷に従えって言うでしょう」

「あ、因みにハルっていうのは私の名前ねハルちゃんって呼んでね、宜しくね鈴ちゃん」と語尾が上がり調子で彼女はそう付け足した。

「・・・・・・う、うん・・・？」

“良いの、かな。ほんとに私、邪魔じゃないの・・・？”

随分と軽くなった気持ちを、それでもまだ残る罪悪感にも似た気持ちが押さえ込んでいるけれど。わしわしと頭を乱暴に撫でるハルの底の抜けたような朗らかな笑顔が、まるで真夏の太陽のように眩しく感じて。

「・・・ふ、ふふ、あははっ」

この時鈴はようやく、声を出して笑うことができた。涙混じりの、しょっぱい笑い声だった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

粟飯原――もといハルは、その後すぐに携帯を借りて鈴の両親に電話を入れた。もちろん、両親にはまだ本当のことを言いたくないという鈴の意思を、再度念を押して確認してからだが。電話口で鈴の友人の、母親の名を騙って、ハルは今夜は一晩友人宅に泊まらせる旨を知らせる。若く張りのある声のハルが友達の母親を名乗るなんて・・・バレやしないかとはらはらしたものの、会話を始めた彼女の声は思いのほか低く抑えられていたので鈴は安堵した。そして交代して、自らも直接電話の向こうの母親と連絡を取った。

「ごめんね、連絡遅くなって。そういうことだから、心配しないでね」

声が上擦りそうになったところを、努めて平静を装う。我ながらよく耐えたと思った。やはり帰りの遅い鈴を心配していたのか、母親のやや焦ったような、それでいて怒気を含んだ声に、何だか涙腺が緩みそうになったけれど。きゅっと口元を引き結んで唾を飲み込めば、後は比較的自然に明るい声で話せたと思う。

そうして、またハルに交代して、二言三言挨拶を済ませたのちに電話は通話を終えた。

「あ、ありがとう、ございます」

嘘をつかせてごめんなさい、という意味も込めて、鈴は“ありがとう”を言う。悪戯っ子のような顔でにやり、笑うハルは、これで根回しはバッチリね、と鈴の遠慮を無邪気に取っ払ってくれた。

――――と、思ったら。

## ＊花火と雨の夏祭り（9）

「あ、それと、敬語禁止ね」
「へ、」
「それから遠慮するのも禁止」
「ちょ、」
「我慢するのも禁止だから」
「な、なん・・・」

次々に禁止事項を足してゆくハルに鈴は目を白黒させた。いいこと、と人差し指を突き出して、ハルは言う。

「こんな普通の家に連れてきたから鈴ちゃんが気後れするのも分からなくもないけど。本来警察署に保護される筈だったのがうちの家に変っただけなのよ?警察に保護されて遠慮したり慎み深くなったりする被害者がいる?いないでしょ?私はぶっちゃけ警察とは無関係の人間だけど、ノブちゃんや利良の代わりに鈴ちゃんの面倒を見る責任はあいつらと同等にあるの」

分かるような、分からないような。でも敬語禁止は関係ないんじゃ・・・。鈴はそんな顔をして、しかし責任、と聞いてまた不安が首を擡げた。

「・・・それってやっぱり無理矢理私のこと、」
「無理矢理じゃない」

ハルはぴしゃりと切って捨てた。

「人の厚意はありがたく受け取りなさい。私の前で鈴ちゃんに不安そうな顔とか申し訳なさそうな顔とかさせたくないの。分かった？」

ぐにぃぃ、鼻っ面を豚のように押し上げられた鈴を、にたにた笑いながらハルは見つめる。「・・・・・ひゃ、ひゃい」という間抜けな返事が鈴には精一杯だった。だけど、訊かずにはいられなかったのだから仕方ない。迷惑かと訊いて迷惑だと言われればそりゃあショックに決まっている。でも怖かったのだ。この上なく怖い思いをして、そんな自分をハルたちは助けてくれて、少なくとも普通の精神状態ではいられていない自分を傍に置かせてくれて。両親には言えるような状況ではない。頼れる人も他にいない。ハルが自分を突き放したら一人ぼっちになってしまうんじゃないかという気さえしたのだから、仕方がなかった。それはまさに捨て犬の心境で、言葉の上だけでもいいから自分の存在が疎まれていないのだということを確かめたかったのである。鈴の言葉には怯えた気持ちが顕著に表れていた。

「んもー、緊張しちゃって鈴ちゃんってば可愛いんだから！」

未だ借りてきた猫のような居住まいの十五歳は、突如そんなことを言いだすハルの長い指によって、また髪の毛を鳥の巣のように仕立て上げられた。雨の中に始まり、パトカーの中、アパートに着いてさえ鈴はよくよく髪の毛に触れられているな、と思った。その時々で意図や目的が異なってはいるものの、今もこうして毛束を取っては指に絡められていることから、どうやら自分の猫っ毛はハルのお気に召されたようだと合点がいった。目も当てられないほどボサボサ頭に成り果てるのは正直困るけれど。柔らかーい、と言いつつ正面の麗しい美貌が目を細め自分のコンプレックスで遊んでいるのを見ると、どうも落ち着かない。

「そう言えば鈴ちゃん、浴衣着てたわよね？今日のお祭に着て行ってたんでしょう？すんごく可愛かったわよー。駄目よー？あんな可愛い格好のまま一人でいるなんて。それでなくても夏祭りってだけで碌でもないのが夜遅くもウロチョロしてるってのに」

可愛い可愛いと言うが、自分など足元にも及ばないような美人にそんなこと言われたって素直に喜べない。けれど一人で行動していて不注意だったことはハルの言う通りで、鈴は俯くと小さな声で謝った。襲われたこと自体には鈴には何の非もない。しかしそういう事態を招く要因を、鈴は自ら作ってしまっていた。防げたかもしれない悲劇だということを鈴は重々理解している。

「・・・ごめんなさい、ほんとに・・・」

「敬語禁止！」

「え、あ、う・・・うん」

「今度敬語喋ったらほっぺたむにぃーってするわよ」

と宣言しつつ、既に鈴の頬はむにむにと伸ばされたり揉まれたりしている。されるがままの鈴は、変形した顔でハルの名前を呼んだ。

「ハ、ハルひゃん」

「なぁに？」

「ありひゃほう」

「ふふ、どういたしまして。あーやっぱり若い女の子は可愛いわねぇ」

“美人のくせに、発言は所々オヤジくさいんだなぁ”と鈴は思った。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

ハルの過剰なスキンシップのお陰か、初対面ながらも鈴の彼女に対する距離は着実に縮まっていった。鈴には姉も兄もいなかったが、自分にもし“お姉ちゃん”がいたとすればこんな感じだったのだろうかと想像してみる。しっかり者で、妹を溺愛する姉。ハルはそんな第一印象を鈴に植え付けた。不安も緊張も徐々に解れて比例するように会話も弾んだ。お祭のこと、鈴自身のこと、学校のこと。基本はハルが鈴に質問を投げかけてそれに鈴が答えるという流れに則っていたが、楽しかった。鈴は一時、胸の内にある恐怖も不安も怯えも、それらを生み出す嫌な記憶も忘れて、親しく優しく接してくれるハルとの時間を楽しんだ。姉と呼ぶには離れた年齢――彼女曰く歳は二十五だという――であることなど、全く感じさせなかった。

いやはやしかし、外の暗がりではなく、明るい照明の下でじっと目に留めるハルは、改めて美人であった。

きめ細かく整った肌、すっきりとした輪郭、日本人離れした目鼻立ち、どれをとっても見惚れてしまう。これで混血ではなく純日本人だとのたまうのだから鈴は呆然とするしかない。自分と同じＤＮＡが組み込まれているなんて、絶対嘘だ。するとハルは大袈裟に目を見開いてずいと鈴に近寄ったかと思うと、両頬をぐにぐにと摘んで意地悪い笑顔を作った。

「とか言ってぇ、こぉんな真夏でも雪のように色白のもち肌柔肌の可愛い鈴ちゃんこそ、私にとっては羨ましい以外の何ものでもないんですけどぉ」

「いい、いひゃい！いひゃいよハルひゃん！！」

抗議の声とは裏腹に嫌な気分には僅かもならないのが不思議だった。・・・とは言え、自分の頬が伸びきったゴムのように弛むのではないかと鈴は気が気ではなかったが。

「あっひゃひゃひゃ」

そして不意に、聞き覚えのある笑い声が鈴の鼓膜を打った。変形した顔のまま、はたと見上げる先に、こちらを見て腹がよじれんばかりに笑っているハルの、それでも崩れない美貌があった。

「――――・・・え!?」

勝手に人の顔の肉で遊んでおきながら爆笑するとはなんたる無礼千万、という思いもあったが、それに先んじて鈴の脳裏にある記憶がフラッシュバックする。

思い出すのはまだ友人たちと談笑しつつ河原の土手を歩いていた時のこと。“花火綺麗だったね”とか、“来年もまた一緒に行こうね”とか、他愛もない会話の途中で、河原から聞こえてきた豪快かつけったいな笑い声である。

あの時大して気にも留めてなかった、あの声が、今目の前にいるハルのそれと綺麗に重なる、気がする。・・・いや、気がする、ではなく、重なる。

「・・・ね、ねえ、ハルちゃん。ハルちゃんも今日、お祭り行ったんだっけ?」

「ん?そうよー、さっきもそう言ったじゃない。鈴ちゃんの忘れんぼ!」

「そう・・・あの、もしかして、だけどね?・・・河原、桜瀬(おうせごう)川の河原で、花火持って遊んだり、」

「・・・え、えっ!?何、鈴ちゃん!なんで知ってんの!?私そこまで言ったっけ?」
「い、いや・・・」

どうしたものかと鈴は思った。あの楽しげにはしゃいでいた女性はハルだったのだ。まさかそんなと信じられなかったが、ハルに証言されてしまっては、二人が同一人物であると確定したも同じ。河原では暗くて人相や服装まではっきり見えなかったのが災いして、今の今まで気が付かなかった。だが確かに、外見は分からずとも、この妙に明るい態度はあの時の印象と合致する。あれは別にお祭り気分ではしゃいでいたのではなく、どうやらこのハルという人物の元来の気性らしい。

・・・と、鈴は更に思い出した。

名残惜しさに後ろ髪を引かれるように見つめていた鈴が、やおら顔を上げた彼女に見つめ返されたのを。

「ね、ねえ、もう一つ聞きたいんだけど・・・」
「あ、そうそう、そう言えばね!その花火で遊んでるときに、土手を歩いてた女の子たちがいてね。可愛らしい子たちがいるなーって思ってたら、そのうちの一人と偶然目が合って!で、その子びっくりしたみたいで、人の流れの中で固まったと思ったら、後ろから押されて転びかけちゃってねー。もう、“痛あ!”って大声あげてて、ちょうど今の鈴ちゃんみたいに、足引きずって・・・笑っちゃいけないとは分かってたけど、あんまり可愛いから」
「ちょっ・・・ちょーっとストップ!!」

けらけらと思い出し笑いをしながら話し続けるハルに、真っ赤になった鈴が慌てて声をあげた。

## ＊花火と雨の夏祭り（１０）

“こ・・・これ以上、恥かきたくないのに・・・！”

耳を塞いで穴に入りたい衝動に駆られる鈴を、きょとんとしたハルが見つめる。よもや目が合っただけでなく、そんな醜態をも目撃されていたなんて！

鈴は内心、羞恥に悶えた。

「どうしたの、鈴ちゃ・・・」

“それ”、私、なの」

「え？」

「だ、だから――・・・それ、わ、私なんだってば・・・」

「・・・・・・・・・」

正体を白状した直後、ひときわ大きなハルの笑い声が部屋に木霊したことは、言うまでもない。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

かくして何やかんやと言葉を交わすうちに、時刻は早くも深夜零時を回ろうという頃だった。従って二人は談笑も程ほどに就寝の準備にかかろうと動き出す。

「鈴ちゃんがベッド使っていいからね。今日は何も考えずにゆっく

り休みなさい。私は床で布団敷いて寝るから」
「・・・え、でも」

霞色に統一された寝具を見遣って、躊躇う。

「それはちょっと・・・」
「なに?嫌なの?私のベッドじゃ寝れないっていうのかしら?」
「やっ、ちち違うから!そうじゃなくて、だって・・・・・申し、訳、な・・・ぃ」

どんどんと声が小さくなったのは、ハルのじとりとした眼差しに、“遠慮禁止!”の警告を読み取ったからである。それ以上を言えなくなった鈴。けれどややしてハルは名案の浮かんだ表情をし、にこりと微笑んだ。

「んじゃ、私と一緒に寝る?」
「へ、いや、だから私が床で・・・」
「却下」
「・・・・・・一緒に、寝る」

渋々鈴はハルに同意した。

先にベッドに入らせてもらった鈴は、壁側に身を寄せてハルが入ってくるまで上体を起こして待っていた。一方、一旦部屋を出て浴室の方で着替えてきたハルは、洗顔や歯磨きもついでに済ませてきたようだった。フェイスタオルを首にかけて口元を拭いながら、結んでいた髪の毛を気だるげに解くと、少し癖がついていたそれを手櫛でかきあげる。

「・・・・・・・・・」

同性であるということを加味しても、いやに艶めいた仕草だ。鈴はぽかんと口を開けて、わけも分からず頬を染めてしまっていた。

「電気消すよー」とのハルの声に我に返ると、慌てて返事をした。

そしてハルはベッドサイドのテーブルに置かれたキャンドルライトを代わりに灯すと、その明かりを頼りに鈴の隣に入ってきた。

“き、緊張する・・・！”

鈴は座って掛け布団を握ったまま固まった。ベッドの広さはセミダブル程度。ああ寝相が悪かったらどうしよう。変な寝言を言ってしまったらどうしよう。歯軋りをしてしまったらどうしよう。こんな美人の横で！

「ちょっとごめんね」

間近からそんな断りの言葉が聞こえたと思えば、鈴の目の前をすっと腕が遮った。ヘッドボードの壁側に置いている目覚まし時計にハルは腕を伸ばしたのだが、もんもんと考え事をしていた鈴は必要以上にぎょっとした。「のあっ」だか、「ほあっ」だか判別のつかない声を出して、仰け反る。

仰け反ったのが拙かった。

勢いよく後ろに上体を倒した鈴は、鈍い音を立ててヘッドに面していた壁に頭部をぶつける。一瞬前の鈴と同じくぎょっとしたハルの顔が、ぼんやり視界に入った。

「い〝っ・・・・・」

「え!?ちょ、鈴ちゃんっ、だいじょう・・・・・・・・・ぶっ」

大丈夫の“夫”が堪え切れない笑いと重なって、美女にあるまじ

き声が出る。けれども痛みに悶える鈴に余裕はない。

「痛あぁい！ぶつ、ぶ、ぶつけた・・・！」

「っくく、あっひゃひゃひゃ！す、鈴ちゃん面白すぎ！なんでそこで頭、打つかなぁ、ははははっ」

ばしばしと布団を叩いて爆笑するハルを、鈴は涙目になりながらも恨めしく見上げた。別にハルに責任転嫁するつもりはないけれど。・・・ないけれども。

「うぅ、痛い・・・」

変にどぎまぎしてぎこちなくなっている自分が馬鹿馬鹿しくなった。ハルは笑い上戸なのだろうか。眦に滲ませた涙を指で拭って、それなのにまだ口元は笑いを我慢するかのようにぷるぷると震えていた。恥ずかしい。情けなさで赤くなった顔を誤魔化そうとして、後頭部を抑えて仰向けになった鈴は、一気に不貞腐れた。ハルが上から覗き込む。

「よしよし、大丈夫？腫れてないかな・・・冷やそうか？」

「へ、平気！もう痛くないから」

「そう？」

ハルの掌がふわりと撫でる。じんじんと痛みの燻る部分を、刺激を与えないようにそっと。

「・・・っ」

「まだ痛いくせに」

「い、痛くないもん！」

「鈴ちゃんの意地っ張りい」

見え透いた嘘だったが、「痛くない」と言い張る鈴にハルはくすくすと笑って聞き入れた。「はいはい、そういうことにしといてあげるわ」と、ベッドに沈む鈴に覆い被さるような体勢のまま、鈴の顔を見つめる。間接照明しかない薄暗い中でも、ハルの柔らかな微笑みが見て取れた。

「大丈夫？」

「だ、だから、大丈夫だってば・・・」

「そうじゃなくて、鈴ちゃんの、“ここ”」

指差されたのは胸の真ん中だった。

「気持ち、少しは落ち着けたかしら」

ハルの言わんとしていることが分かって、鈴は瞬きを数回繰り返す。「あ・・・、」と間抜けな声が出た。

「・・・・・うん。大丈夫、もう今は、だいぶ、平気」

これは、偽りではない。強がりでもない。ハルの目を真っ直ぐ見て、こくんと頷けた。

「本当？・・・よかった。さっきね、鈴ちゃんの笑った顔、すっごく可愛かった。だから、これからもっともーっと笑顔になってもらわなくちゃね」

そういうハルこそ、花が綻びるかのような笑顔だった。鈴の大丈夫、という言葉を受けて心底喜んでいるような、安心したかのような。

「・・・・・・・・」

どうして、と思う。出会ったばかりの自分を、なぜこれ程彼女は気にかけてくれるのだろう。純粋な疑問。でも疑うよりもずっと、頭で考えるよりもずっと、胸が締め付けられた。感謝。嬉しさと、切なさ、それに少しの寂しさ。この人は、とっても優しい人なのだと。

「っわ、」

「ありがとう！ほんとにほんとに、ありがとうっ」

鈴は腕を伸ばして、ハルの首に抱きついた。ぎゅうう、と力を込めてありったけの思いを伝える。たった数時間。たった一晩。それだけの繋がりかもしれない。でも関係ないそんなことなんて。何よりも必要としていた時に、必要としていたものを与えてくれた。ハルの気持ちが嬉しかった。抱き付いて深く息を吸えば、ほのかに甘い香りが鼻腔に届く。甘い匂い。公園で助けられたときも同じ香りがした。一瞬香っただけですぐ雨に掻き消されたため、すっかり忘れていたけれど、あれはハルだったのだ。助かった時の光景が再び蘇れど、同じ匂いに包まれていると思うと不思議と恐怖は蘇らなかった。

――ふと、ぎし、とベッドが軋んだ。鈴に抱きつかれたままハルが体勢を低くする。突っ張っていた腕を曲げて、鈴が起こした上半身をまた横たえられるように、肘を沈めた。

「あ、ごめんっ」

気付いた鈴は慌てて彼女を解放する。“無理な姿勢を取らせて辛

かったのだろう”と思ったけれど。ハルは鈴の腕が離れても動きはしなかった。

「・・・ハル、ちゃん？」

どこか痛めてしまっただろうか。心なしかこちらを見つめる瞳が揺らめいているような気がした。何かを言いかけるように唇が僅かに開く。しかし耳に声は届かない。首をやや傾げて見上げた先で・・・息を呑む気配がした。

さらり、と。額から後頭部へ、長い指が猫っ毛を梳かし撫でていく。その感触は酷く緩やかで、優しくて。何故か不安がロウソクの灯火みたいにゆらゆらと芽生えた。何だろうか。これは。

ハルの様子がおかしい。なのに、どうしたの？の一言が出てこない。喉と口内がカラカラに渇いている。鈴も唇は開くのに、声が出なくなってしまった。ただ目は離せなくて、まるで金縛りにあったかのようだ。肩から零れるハルの髪が幾許もないライトの光を遮る。

鈴の頭を撫でていた掌が、頬に滑り落ちた。端整なその顔が、鈴の知らない表情を宿して不意に近付く。

どくん、と心臓が大きく跳ねた。

「・・・・・っ！」

そして音がする。

きゅっと閉じた瞼の奥で、受けた衝撃に驚きを隠せなかった。加減はされたのだろう。けれども、正直痛かった。だって鈴は、さっき頭を打ったばっかりだったのだから。

「・・・ったぁ・・・」

額に受けた頭突きが、後頭部まで響いて痺れをもたらす。ごちん、と小気味いい音が尾を引かず鈴の耳に吸い込まれた時には、既にそれ以前の説明し難い空気は霧散していた。

「ははは・・・・・はぁー・・・」

乾いた笑い声が聞こえる。しかし直後に盛大な溜め息に変わった。のろのろと起き上がると膝立ちになり、そこでまた溜め息をついて固まるハル。目を伏せて髪をかきあげる様を、鈴は眉根を寄せて見上げていた。

「い、痛いよハルちゃん・・・！」
「あー・・・ごめんね」

一体なんだというのだろう。鈴は自らの治まらない動悸には気付かないまま・・・いや気付いていない振りをしたまま、ハルの奇妙な表情を怪しむ。暫しの沈黙を経て、感情の篭っていない声が鼓膜を震わせた。

「やっぱり私、床で寝るわ」

## ＊花火と雨の夏祭り（１１）

翌朝。

ドライヤーの機械音によって目覚めた鈴は、見覚えのない天井と周囲に些か混乱を来した。ここはどこ、と疑問の浮かぶ寝惚けた頭は、たっぷりと数十秒間鈴の動きを思考共々停止させる。直後、ドアノブを廻して部屋に入ってきた人物によってようやく記憶を繋がらせた。

「あら、おはよう鈴ちゃん。もしかして起こしちゃったかしら」

「・・・・・おはよう、ハルちゃん」

それはそれは腑抜けた面構えだったと思う、身体を起こし、瞬きを繰り返しながらぼーっと動く対象物を目で追い掛ける自分は。風呂上りだと思われるハルの半乾きの髪が、ぱらりと水気を含んで肩から背中へ滑るのが見えた。

「ハルちゃん、髪の毛まだ濡れてるよ」

「暑いからこのくらいが丁度いいのよー。ったく朝っぱらから今日もほんと蒸し暑くって・・・」

「・・・ふーん・・・」

“濡れたまま放置してると髪の毛傷んじゃうよ”と言おうとしたけれど鈴は止めた。恐らく洗顔後だろうに、スキンケアの一つとしてしようとせずテレビのニュースを見ているハルには、何を言っても無駄な気がした。

いつもこんな調子なのだろうか。だとしたら外見に見合わず美容に頓着しない性格のようだ。そういえば昨日だって化粧なんてしていなかったし、身に付けているものにも飾り気などなかったし、と

思い出して、やっぱり世の中は不公平だなんて愚痴を零した。こっそり、心の中で。

手入れ無用というわけか、彼女の目も眩むほどの美しさは。

「よく眠れた？」

テレビ画面に向いていた視線がつとこちらへ移った。朝っぱらから蒸し暑いと不満を言う割には小ざっぱりとした笑顔で見つめてくる。

「うん、おかげさまで。ごめんね、結局ベッド占領しちゃって・・・」

「いーのよぉ、気にしないで！よく眠れたなら何よりね。よかったよかった」

「ありがとう。・・・あの、私、寝言言ったりとかいびきかいたりとか・・・してなかったよね？」

「あはは、鈴ちゃんが？まさかぁ！」

「よかったぁー・・・」

ほっと胸を撫で下ろす鈴。心配だったことが杞憂に終わって、一先ず安心した。安心した途端、現金な胃袋が主張をする。

「・・・あ〃」

きゅう、なんて可愛い音ではなかったことだけは、確かだった。頬から耳までが赤く熟れた林檎のごとく染まった。

“あぁ、そうですね、朝っぱらから今日もほんと蒸し暑いですね。そうだ、急激に暑くなったのは、天気のせいにしてしまおう”

空腹の音を聞いて、ハルは鈴にくすりと微笑んだ。

「そうだね、お腹空いたよね。ご飯作ってるから、一緒に食べない？」

「えっ！いいの？」

ハルの提案に鈴は飛び付いた。言われてみればキッチンから何やら食欲をそそる香りがする。ぱっと明るくなった鈴の表情を見て、ハルも嬉しげに破顔一笑した。

「もちろん、鈴ちゃんのために作ったんだからね」

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

インターホンの音が来客を報せたため、南瓜の煮付けに箸を通していた手が止まった。

こんな時間に誰だろうか。壁にかかっている時計は丁度、数字の八を短針が指そうとしている頃だった。

「あ、来たきたー」

そう言って箸を置き立ち上がったのはハル。「ちょっとごめんね」と鈴に断って彼女は玄関へ向かった。二度目のピンポーン、という音がハルを急かす。そして三度目・・・四度目五度目。

「だぁあーっ！うっさいのよ！何度も何度も押しやがって！！」

のたのたと歩いていたハルが扉を開けたのは、六度目の音が鳴り響いている途中だった。鈴が耳を欹てるに、ハルは苛立った態度を隠しもしないで訪問客を迎え入れたようだ。一体誰なのか気になって首を伸ばす。ドアの隙間から顔を覗かせて窺うと、押し開かれた玄関の向こうから現れた影に、鈴は、「あ！」と声を漏らした。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

改めて紹介された彼は、槻尾浩信（つきおひろのぶ）という名前なのだそうだ。あの九龍利良という警官が彼を“槻尾さん”と呼んでいたので、それが苗字なのだろうなと推測はしていたものの、ハルが終始“ノブちゃん”とばかり呼ぶものだから、たった今教えられるまで下の名前は不明なままであった。

なにやら非常に高級そうな左ハンドルの車――ベントウ、だか何だかというブランドメーカー名を聞いたが、鈴には皆目ピンとこなかった――の後部座席にちょこんと座る鈴は、自宅まで送り届けてもらう道すがら、運転席に座る浩信から例の暴漢のその後を伝え聞いていた。

「現行犯逮捕だからな、被疑者の嫌疑は明白だ。まだ署に拘留中だが、じきに身元を割り出して処遇が決まる。前科があれば手っ取り早くケリがつくんだがな」

「そうですか・・・」

「つーかそんな話、傷心の鈴ちゃんにずけずけと話さないでくれる？昨日の今日でノブちゃんったらデリカシーなさすぎるわよ！」

助手席からの、ハルの唾を飛ばすかのような文句に辟易といった態度で顔をしかめる浩信。ルームミラーに映ったそれが、鈴にもはっきり分かって苦笑いである。ハルの心遣いが嬉しい反面、浩信に対する彼女の態度のあけすけさと、どう見ても怒りを蓄積させている浩信の表情にこちらがびくびくしてしまうのだ。きっと二人の間ではこれが普通であり自然体なのだろうが、自らのことが話題に上ると申し訳ない気持ちが大きくなる。

「わ、私は、大丈夫だから、ハルちゃん。気にしないで」
「そーやって鈴ちゃんが遠慮するから、付け上がんのよこの性悪男は。あーやだやだ、ぶっきら棒で愛想のかけらもないこんな奴、私が親なら育児失敗を嘆いてるわ」
「そっ、それは言い過ぎじゃ」
「よし、いい度胸だ今すぐこの車を飛び降りろ」

浩信は助手席のロックを解除すると、ドアの外を指差してハルにそう命じた。当然走行中なので、時速６０ｋの車窓から眺める風景は相応の速度で後ろへと流れている。そんなこと知ったこっちゃないと、さらりと涼しげな彼の目元は真に迫っていた。

ハルもハルでしれっと助手席にふんぞり返っている辺り、心配する必要はなかったのかもしれない。しかし昨日出会ったばかりの鈴にとってはその応酬も慣れたものではなかったので、ひやひやとしながら両者の仲裁をした。昨夜、ハルの部屋にあったネクタイを恋人の――浩信のものではと勘繰ったのだが、この様子からして彼女らは恋人同士ではなさそうである。世間には色んな人間がいるとはいえ、性悪男だの車から飛び降りろだのと刺々しい会話を日常的に繰り広げるカップルなど、鈴は見聞きしたことはない。

## ＊花火と雨の夏祭り（１２）

畳んで袋に詰められた浴衣をきゅ、と握り締め、窓の外をぼんやり見つめる。

現在鈴の身を包むのは、今朝、食事中に訪問してきた浩信が彼女のために持って来ていたワンピースである。綺麗に包装されていたので、購入したばかりのものに違いない、とすぐに気づいた。態々お金を払わせてしまったことにひどく恐縮した鈴であるが、勿体なくて受け取れないと言うと、「こんなもの突っ返されても困る、受け取れ」と彼はそっけなく言い放った。そうしてハルのヤジを受け流しつつ再開した食事を終えると、適当に外出する準備を済ませて浩信の車に乗り込んだのだ。車を所有していないハルに代わって鈴を自宅まで送り届ける、とこれまたそっけなくも親切に申し出てくれた浩信に続いて、当たり前のように助手席に乗り込んできたハルを目にした時は、彼も迷惑そうにしていた。

「だって、昨日あんな目に遭っておきながら、密室で胡散臭い男と二人きりだなんて！あまりに鈴ちゃんが不憫じゃない」

――――とは、ハルの主張だ。

彼女のその発言には色々と間違いもあったものの、正直一晩寝食を共にしたハルほど、浩信とは打ち解けてはいなかったので、鈴もこっそりと安堵していた。

確かに、この槻尾浩信という人はなんら悪意のある人間ではないのだろう。それどころか、無愛想な中でも他人を気遣う優しさがあって、本当に思い遣りのある人なのだと実感している。ハルとは毛色は異なれど、良い人なのだ。助けられた公園でかけてくれた言葉も、このワンピースも、鈴の心の棘を抜き取ってくれた。感謝の言

葉は言い尽くせぬ、という部分では、ハルも浩信も、そしてあの利良という警官もみな同じだ。同じだけれども、しかし。

「・・・鈴ちゃん、大丈夫？」

つと後部座席へ振り向いた、気遣わしげなハルの視線が鈴を捉えた。一晩明けた後もこうして時々、鈴が無言になったところを見計らって彼女は問いかけてくる。見た目はだいぶ落ち着いたとはいえ、心の中までそうとは限らない。拭いきれぬ恐怖が未だ存在していることなど、ハルには見抜かれているのだろう、と鈴は思う。嫌な記憶が蘇ったり、よからぬことを考えたりしているのではないか。そんな探るような、それでいて労わるような瞳が、鈴に向けられる。

“ああ”と思う。

本当に、つくづく、この人に助けられたことをありがたいと思わなければ。何度噛み締めたか分からないことを、ここでまた改めて鈴は感じた。

「うん、大丈夫。ありがとう、ハルちゃん」

ふわりと真綿に包まれるように嬉しさがこみ上げて、自然と笑顔が頬に浮かんだ。閉ざして押し込めてしまいたくなる昏くどろどろとした気持ちを、掬い上げてくれる。その視線も言葉も、仄か甘く香る匂いも、全て鈴に安心感をくれるのだ。恐怖は既に傍にないのだと、身を以って教えてくれるのだ。

単に一緒に過ごした時間の長さの違いだと言ってしまえばそこまでだが、やはり浩信に対するそれとは一線を画す安心感を、鈴はハルに対して抱いていた。雛鳥が親鳥に対して抱くものと、どこか似通っている。暴漢に襲われて右も左も分からない精神状態だった鈴を、ああして保護してくれたのだから、頼って懐いてしまうのも無

理からぬことである。

「・・・しっかしなぁ・・・お前」

「なによ、ノブちゃん」

おもむろに口を開いた浩信が、しみじみとした口調でハルに向けて喋りだす。

「まあ、別に構わんが・・・そのナリで“ハル・ちゃん”は、完全に誤解を生むだろ」

「うっ・・・」と、痛いところを突かれたかのように、突如ハルは身を硬くした。

ちらり、ルームミラー越しに鈴を見やる浩信の、意味深な視線。瞬きをして鈴はそれに応える。彼の意図するところが不明で、はて、と首をかしげた。

「お前のことは一切、信じて疑わねーような顔してるぞ。どうすんだ、黙秘したままなのか」

「だ・・・っ黙っててよ!今更どう言えっての!鈴ちゃんを傷つけたくなんかないでしょ、あんたも!」

密談のように、声を潜めてハルはそう言った。勿論こんな車内の至近距離にいるのだから丸聞こえであったが、何より会話の中身の意味が分からず鈴は眉を寄せた。

察するに、どうやらハルは鈴に何か隠し事をしているらしい。

「あ、あの・・・ハルちゃん?えっと、どういうこと・・・?」

躊躇しつつ、鈴は会話に割って入った。首を伸ばして覗き込んで

きた鈴に、ハルはぎくりと表情を強張らせる。次いで運転中にも拘らず、浩信のきっちりと締められたネクタイをぐいと引っ掴むと手前に引き、いよいよ以って鈴には聞こえぬ小声で何かを話し始めたのである。

「おまっ・・・運転中だろうが！死にてーならてめーで死ね！」
「るっさいわね！いーからちょっと！」

決して鈴には聞に入らせぬよう肩を狭め、あくまで浩信と二人だけで話そうとするハルを見て、困惑する。明らかに怪しげな反応。更に親密そうな二人。鈴はややして、思い直す。

いくら口が悪かろうと、こうして身を寄せ合えば美男美女である。何を言っているのか聞き取れない今、目に映る光景は、恋人同士が睦言を囁きあっている画そのものだ。気になるからといって、安易には近寄れない二人だけの雰囲気がある。

「・・・・・・・・・」

何てことだろう。もしかして、世間には互いを罵り合う彼氏彼女というのも存在しているのかもしれない。

やっぱり、あのベッドにあったネクタイは、この男性の——浩信のもので。

この二人は、恋人同士。

鈴の頭の中で、かちりと図式が当て嵌まった気がした。

「ご、ごめんね、鈴ちゃん。ちょっとノブちゃんが訳わかんないこと言って・・・」
「かっ・・・隠さなくていいのに！」

「へ？」

振り向いたハルの面持ちが間抜けなものへと変化する。言葉を遮った鈴は、勢いのまま捲くし立てた。

「わ、私別に、二人の邪魔したりしないよ？私のことは気にしなくていいから！それに、喧嘩もいいけど、もっと仲良くしたらいいと思うの！遠慮しないで、もっとほら、それらしい会話ってあるじゃんっ」

「ななな、なに？え？」

「私の目が気になるから、黙ってたんでしょう？ごめんね、無理させて・・・本当は、昨日だって浩信さんがハルちゃんの家に泊まるはずだったんじゃない？」

「は？？」と、返ってきた疑問は、見事に二人の声が重なっていた。鈴の言わんとすることを何となく予測して一気に険しくなる浩信の顔と、理解不能状態で固まるハル。

徹底的に白を切るつもりか。もどかしくなった鈴は、いっその事こちらから言った方が丸く収まるのではなかろうかと、こぶしを握った。

「だからっ！二人は、恋人同士なんでしょう？」

## ＊花火と雨の夏祭り（１３）

「・・・・・・・・・・・・」

続く、続く沈黙。

ぴしりと空気に亀裂が入ったのは蓋し錯覚ではない。スムーズに優雅に車道をゆく高級外車の中、まるで全ての動きが静止したかのような空気に息が詰まった。

あれ、と予想に違う反応が返ってきて、鈴は首をひねる。

返答を得ることには、三拍ほど間を要した。

「ぶはっ！！」

「ばっ・・・！馬鹿言うな！！んなわけねぇだろ！！」

「・・・え？」

堰を切ったように止まった時間が再び動き出す。全力で噴き出すハルと、全力で否定する浩信の息の合いようといったら。

鈴はますます困惑した。

「で、でも仲良さそうだし。それを、私に隠してたんじゃ」

「アホか！こいつとはただの腐れ縁だ！・・・っだいたい！俺にそんな趣味はねぇ！！」

「・・・え？」

“そんな趣味”という部分に引っ掛かって疑問符を浮かべた。どういうこと。視線で問えば、鏡越しの浩信はそれ見たことか、とうんざりした顔で天井を仰いだ。面倒くさそうに嘆息し、腹を抱えて

大爆笑している隣のハルを親指で差すと、「気付いてないようだから教えてやる、耳の穴かっぽじって、良く聞けよ！」と仰々しく前置きをして、言った。

「いいか！こいつは！男だ！！」

「・・・ちょっ！喋るなバカ！」

「・・・・・・・・・・はい？」

思考が、停止する。

――――さて、そのときの鈴の表情をどのように表現するべきだろうか。いや、驚きではない。驚くことができるほど彼の言葉を理解できてもいない。ほとんど能面のような、あるいはそれに近い呆けた表情だった。“男だ”という部分が脳内で反響し、ハルの、慌てて運転手の口を塞ごうとする様をコマ送りにする。

聞き間違いか。最初はそう思ったけれど、少し考えて鈴は分かった。そうだ、きっと彼は、こいつは（まるで）男（みたいな女）だ、と言いたかったのだ。そうに違いない。

謎が解け、ほっとする。

「あ、そ・・・そうですよね。男の人みたいにかっこよくて頼りになるし、私もほんと色々お世話になって・・・」

「ぶっ・・・あっひゃっひゃっひゃ！！」

「あぁー！！くそ！違う！余計な解釈をするな！言ってんだろ！こいつは正真正銘の男なんだよ、男！！現実を見ろ！！」

「・・・・・・・・・はい？」

ひいひい喘ぐは、ハルである。鈴の解釈に堪え切れなくなったらしく、途中まで切羽詰っていた顔色は一気に吹き飛んでいた。可笑しくて堪らないといった様子でべしべしと膝を叩く。その横で、苦虫を百ほど噛み潰したような顔色の浩信が、一人物騒な空気を醸し出していた。加えて、置いてきぼりを食らって話についていけない鈴。各々の心境はてんでばらばらだ。

鈴は完全に混乱していた。ただ機械のように瞬きだけを繰り返すのみ。今、彼は何と言ったのか。何故ハルは笑っているのか。

“――――男？目の前にいる、この綺麗な人が？・・・そんなまさか”

「・・・っく、ははっ、ご、ごめんね鈴ちゃん、隠してて。驚いた？」

振り返ったハルが顔を覗き込んでくる。いかにもこちらの反応を楽しんでいますと語っているような、一対の瞳。悪戯っ子の笑顔。それを呆然と見つめ返すことしかできない鈴の目の前で、掌がひらひらと振られる。「もしもーし、聞こえてますか尾本鈴さん」、呼びかけられるフルネームに、「え、」と遅れて反応を示した。

「・・・・・・・・・ほんとに？」

「ん？」

「・・・ほんとに、男の、人、なの」

「うん。生物学上、Y染色体を持つちゃんとした男よ。黙ってたのは、あんなことがあった手前、私を女だと思ってくれてた方が鈴ちゃんも安心するかなと思ったからよ。ごめんね」

「・・・・・だ、だけど！ハルって名前だって」

いかにも女性らしい名前ではないか。鈴は両目で訴えた。

「ああ、私の本名はね、粟飯原春季（あいはらはるき）っていうの。春の季節って書いて春季ね。漢字が女みたいだから、初対面の人は余計に誤解するみたいで」

けらけらと明るく笑うハルは続ける。

「まあ、こうなった経緯は色々あるんだけどさ。男なのは本当よ。騙すようなことして悪かったと思ってるわ。最後まで隠しておくつもりだったんだけど・・・このクソみたいに口の軽い男のせいで・・・ったく」

「るせー黙れ変態野郎。あらぬ誤解を受けるよりゃマシだ」

「・・・・・・・・・」

鈴は、顎が外れるかと思った。大きく見開いた目でも、そこに映るハルの姿は美しい女性のそれそのもので。

「す、鈴ちゃん・・・？あ、やっぱりショックだったかしら。ご、ごめんね？大丈夫・・・？」

ほら、その気遣う声さえ女性のものではないか。確かに、低くはあるけれど。

“――――信じられない”

どうして今まで気付かなかった。鈴はぽかんと開いた口が塞がら

ない。だって、まさか女の人ではないなんて。思うわけがないじゃないか。どこかさばさばしているし、体を抱き上げられた時は力持ちだと驚いたけれど、とはいえハルが男性かもしれないなどという推測とは到底結びつかなかった。当然だ。ハルの外見、声、口調、どれを取っても皆女性のそれなのだから。

性質の悪い冗談だと思った。しかしハルも浩信も鈴をからかっているようには見えない。ああこれは事実なのだと、思い知らされる。

「び・・・びっくりしすぎて・・・実感がわかない」

けれど。

「私が男だって、分かった?」

彼女――いや彼と呼ぶべきか――が、念を押すように訊いてくる。鈴はぎこちなくも、こくりと一つ頷いた。

男。おとこ。オトコ。ハルの顔を見つめながら、凡そ雄々しさとは懸け離れたその美貌と、“男”という文字を、脳内で照らし合わせる。全く噛み合わない二つに鈍い頭痛が生まれた。男って、どんな生き物だったっけ。隣で運転している浩信のような人を、男というのではなかったか。少なくとも今自分に微笑んでいるような外見の人を、表す言葉ではなかったはずだ、鈴の中では。

浩信がハルを“変態野郎”と時折呼んでいたのは、そういう意味合いだったのだろうか。変態だなんて、とんでもない。こんなに綺麗なのに、と心の内で否定する。

「でも、ハルちゃんどこから見ても、女の人だよ」

「・・・気持ちはよく分かる。こいつは街を歩くだけで詐欺師だからな。だが騙されんな、乳はない上に立派な玉付きだ」

「な！」

「コラ浩信！！露骨すぎんのよ！女の子の前でんなこと言うな！」

## ＊花火と雨の夏祭り（１４）

真っ赤になった鈴の前で、またもハルが浩信につかみかかる。ぎゃあぎゃあと攻防を展開する両者に、運転は大丈夫なのかと不安に駆られた。ハルが言うことには、確か浩信は警察関係者だったはずである。“いいのだろうか、こんなので”。鈴がそう呆気にとられていることを悟り、浩信ははっとして姿勢を正した。

「ま、まあアレだ。こいつが男だからって、大したこたねーからな。一晩泊まったつっても、見事に何もなかっただろ」

「は、はぁ」

「なーに言ってんの、当たり前だわ。酷い目に遭ったばかりの、こんな幼気で可愛い子に私が何かするわけないでしょーが」

「ふんっ」と鼻を鳴らして憮然とした態度のハルに苦笑いするしかない。自分よりも遥かに綺麗だ美人だと思っていた女性が、実は男性だったなんて。では、女である自分は一体なんなのだろう、と虚しくなる。おまけに、そんなハルに可愛いと連呼されてしまうことの、皮肉さたるや、一入（ひとしお）である。

浩信が言う通り、一晩を同じ部屋で過ごしても、見事に何もなかった。なかったけれど、それは単に、自分にそういう魅力が欠片もなかったからなのではないか、とも思えた。まあ、一寸前に公園で拾ってきたばかりの十五の子供など、普通、相手からすればお荷物以外の何ものでもないだろうが。

しかしハルは鈴を思って、今まで男であることを隠していたと言うのだから、やはり感謝の念は禁じえぬ。優しく、そして親切な人柄は、ハルが女であろうと男であろうと不変なのだ。そういう意味では、浩信の言った“ハルが男でも大したことない”という言葉は、道理であった。

横切る市街地の大通りには、昨日の余韻がちらほらと覗いていた。点火されていない釣り灯篭や、連なる提灯は未だそのまま。解体途中のやぐらや、達筆で祭り名が書かれた横断幕も見えた。けれども、法被や浴衣を身に纏った者、捻り鉢巻で屋台から活気の良い呼び込みをかける者は、もういない。酔っ払い大騒ぎする者も、踊る者も。どんと大きく咲いて儚く散っていったあの尺玉花火のように、あっという間に終わってしまった。まるで雨が全てを洗い流していったみたいだ、と鈴は思う。ぽつぽつと目に留まる祭りの名残が、昨日の様々なことを思い起こさせて尚更、寂しいと感じた。

公園で落とした齧りかけの林檎飴は、結局どうなっただろう。昨夜はそれどころではなかったので、今になって思い出す。“買うんじゃなかった”なんて、思うものではなかった。口に甘く広がる飴と、その下のしゃくしゃくとした触感が遠い記憶のように懐かしい。橙色の夜の明かりに照らされてきらめく、赤い甘味が、不思議と恋しくなったのだ。

「――おい、着いたぞ。ここで合ってるか」

キッとブレーキがかかって、住宅地の一軒家の前で停車した。声をかけてきた浩信に、鈴は顔を上げる。

「・・・あ、はい。・・・あの、ほんとに、ありがとうございました」

ロックを解除していつでも降車できるようにした浩信、そしてハルにも向けて。

深々と鈴は頭(こうべ)を垂れた。こんなことではとてもお礼にはならないけれど、誠心誠意、謝辞を伝える。

「全部ぜんぶ、お二人とあの警官の方のおかげです！たくさん迷惑かけて、本当にごめんなさいっ」
「なーに、嫌ぁね、鈴ちゃん突然他人行儀なんだから」
「だ、だって・・・」
「まあ変態はともかく、こちとらコレが仕事でもあるからな。あの現行犯のことも検察庁に送致して起訴・不起訴が決定する。後にお前も事情聴取があると思うが、これからどうしたいか、親御さんとよくよく話し合え」
「は・・・はいっ」
「くぁーっ！またその不躾な言い方！事務的になんでもかんでも済ませて、最後くらい、もうちょっと鈴ちゃんを思い遣れっての」

“最後”というハルの言葉が鈴の胸にちくんと痛みを落とした。ああ、これで最後、これでお別れなのだ。そうか。怒涛のように過ぎ去った一夜にあって、しっかと鈴の中にその存在を根付かせたハルと、これでもう、さよならなのである。
散々迷惑をかけておいて、世話をかけておいて、身勝手なことだと重々承知しているが、“離れがたい”と鈴は思ってしまった。“寂しい”と思ってしまった。それは、夏祭りの賑わいのように時の流れの速さを思い知らせて、鈴に迫る。ややもすると、花火よりも呆気ない終わりのごとく。

帰宅後、両親に本当のことを説明しなければならない、ということも先程までどこか鈴の頭を悩ませていた。公園であんな目に遭った以上は、“これで終わり”などではない。浩信の言葉通り、“これから”なのだ。
でもそれは、鈴だけの話で。ハルは少しも関係なくて。
この車を降りれば、ふっと断ち切られる程度の関わりしかないのだと痛感した。更に言えば、きっとそのことに関してハルは、さして感傷を抱いてもいない。

当然ではなかろうか。いくら親切にされても、鈴とハルの間には明確な意識の差がある。

ハルにとって鈴は、偶然助けた名も知らぬただの子供で。一晩自宅に泊めただけの存在だ。彼女・・・いや彼は、浩信や利良とも違って、警察の人間ですらないのだ。

対して鈴にとってのハルは、絶望の窮地から救ってくれた恩人で。

「・・・ううん、大丈夫っ。私はもう平気だから！」

にこりと、鈴は微笑んだ。この場で自分だけが嫌な態度をとるわけにはいかない。

「短い間だったけど、本当に、本当にありがとう。お世話になりました」

再三お辞儀をして、ワンピースに下駄という不恰好な姿ながら、荷物を持ってドアノブを掴んだ。

「鈴ちゃ・・・」

「ハルちゃん、いっこだけ！あの、“あひゃひゃひゃ”って笑い方は、どうかと思うよ！」

「・・・・・・え！？」

バタンと締めたドアの窓ガラスの向こうで、くっくっくと笑いを堪えている浩信の姿と、鳩が豆鉄砲を食ったような表情のハルの姿があった。

よかった、と安堵した。そこに反射して映っている自分の顔も、ちゃんと笑顔になれていたから。

釈然としない様子のハルを助手席に乗せ、車が発進する。比較的小さな一軒家ばかりが立ち並ぶ住宅地で、颯爽と走る高級車はかなり場違いだった。

角を曲がるそれに向けて、「ばいばい」と鈴はひとつ呟く。握り締める袋に皺が寄った。ミンミンと忙しなく鳴くセミが、うだる暑さと突き抜けた空の青さが、昨日と同じ夏日の始まりを誰にともなく届ける。濃く伸びる自身の影を追って足元へ視線を寄せると、彼の手当てを受けた部分が目に入った。綺麗に、消毒をして、絆創膏を張ってくれた。

痛い。

何故だろうか。

足の傷よりもずっと、ずっと、胸が痛かった。

くしゃり、片手で触れる猫っ毛はやっぱり鬱陶しくて。彼に触れられた時は妙にそわそわしたのが、今は嘘みたいだ。

「はぁ・・・」

言い知れぬ孤独感があった。

今日からも、夏休みはまだまだ続く。

夏は更に長く続く。

なのに、喪失感を覚えて、鈴は束の間立ち尽くしていた。

終わってしまった、と思った。

まるで夢から覚めた時のように、ふわふわと。

「ハルちゃん・・・・・・」

一度だけ、名を呼ぶ。今まで呼べばすぐに返ってきていた返事が、もう返ってくることはない。長年の知り合いでもないというのに、

たったそれだけのことに違和感があった。

そうして、いつまでも過ぎ去ったものを名残り惜しむことなど許されぬかのように、踵を返し、鈴は玄関へと歩いていく。

「・・・・・ただいまぁ」

思っていた。・・・訳もなく本当に思っていた。

これで終わりだと。もう会うこともないだろうと。

けれど後日の自分自身が、この時の鈴に言葉を伝えられるとするなら。

――――終わりなどではない。始まりなのである。それは、まるで泡雪のような儚さを伴って、ふわりと羽根広げる、始まりなのである。

そう、彼女に伝えていたに、違いない。

【鈴の夏／花火と雨の夏祭り】・終

# ＊逢いたい（1）

「――――それで？」
「うん。昨日ちゃんとうちに帰ったよ。車で送ってもらって」
「いやいや。そうじゃなくて、」
「あ、待って。ここ違う。計算間違ってんよ、奈央ちゃん」
「え、ほんと？どこ？」
「ちょっと鈴、あたしの電子辞書早く返してよ。あと一人で菓子食いすぎ」
「えぇー」

更に一夜明けて、夏祭り翌々日。
空は快晴。今日も濃い青を遮る入道雲がゆっくりと風に流されている隣で、真上を目指している太陽はただぎらぎらとした光を注いでいる。まだ午前中だというのに気温は三十度を軽く越えており、町中の道行く人々は皆一様にじっとりと汗をかいていた。日傘を差して歩道を歩く女性の横を、ハンカチ片手のサラリーマンが忙しげに通り過ぎる、というのはどこにでもある風景か。公園の噴水で水遊びに興じる子供たちを、そんな無邪気な年頃はとっくの昔に過ぎてしまった大人たちが、羨ましそうな眼差しで見つめていた。炎天下、とは正にこんな日に相応しい言葉だ。

「だってこれ英語だよ？英語の課題を辞書なしでどうやれと言うの。瑠香ちゃんだってこの間私の買って来たチョコレート横取りしたじゃない」
「そういう割には全然問題解いてないよね、あんた。それにあのチ

ョコは鈴が悪い。食うなとか一言も言ってなかったし。だからその食う手を止めろってば」
「えー。でも美味しいよ、これ」
「ていうか、ここ飲食禁止だからね」
「ね、朱音、これで合ってる？計算」
「鈴ぅーーっ。だからその超絶美人との一晩に一体何があったの！！教えてよ！！」

相も変わらず、ミーンミンミン、と窓の向こうで蝉が鳴いている。かと思えば、近くの道路を通る燃費の悪そうな車が騒音を出していたりと、なかなか耳障りであるのは、気の滅入りそうな蒸し暑さとは無縁の、空調管理の行き届いた屋内。若干肌寒さを覚える者も、或いはいるかもしれない、というくらいには涼しい空間。

ここは町立の図書館である。

暑さを凌ぎに、ではなく、真面目に読書や勉強の為にこの建物に来ている人間が、果たしてどれほどいるのだろう。どのテーブルもそれなりの利用者で埋まっているが、皆が皆図書を活用しているようには見受けられない。むしろ実に疑わしい。司書の目を掻い潜っては喋ったり飲食したり、または居眠りしている者も少なからずいた。

その図書館、比較的監視の目が緩い二階。
やや広いスペースにて、一つのテーブルを占領する集団がある。

「もう！だから何もなかったって言ってるでしょ？あるわけないじゃん！詩織ちゃん期待しすぎ！」
「何もないわけないじゃん！だって男の人だったんでしょ！？やばいよ！鈴が何か大人の階段を上ろうとしてるよ！！」

「え、そうなの？鈴」
「うっそだー。鈴はそんなキャラじゃないし。菓子ばっかり食ってるお子様に限って、そんなことないない」

声量を抑えて喋っていることから察するに、まぁそれなりに図書館という場所の意味を弁えているのか、しかし“飲食厳禁”という張り紙がしてあるテーブルの上では開封されて久しい菓子類の数々。それを囲んで座っているのは五人の少女たちだった。今日彼女たちが集まったのは、夏休みの宿題を一緒にやろう、という理由から。

一昨日の晩、鈴からその旨のメールを受け取った詩織が、それならば善は急げと暇を持て余す親しい友人たちを召集したのが発端である。涼しい所ならどこでもいい、と二つ返事で彼女らは集まった。

「あーもうやだ。なんでこんなに宿題多いんだろ。先生鬼だよね」
「鈴は食うのやめてペン動かせばいいだけだと思う」
「いや、そりゃあんたもだよ、瑠香。まず問題集開くとこからやれ」
「だって朱音ぇー！鈴があたしの菓子を・・・」
「ちょっともうみんな真面目にやんなよー。後で答え写させてって言っても貸してあげないからね」

黙々と数学の課題をこなしている奈央美と朱音の傍らでは、図書館に食べ物を持ち込む辺り、端から勉強する気がないのがばればれな瑠香と、英語の課題と瑠香の辞書を手元に置きながら一昨日あったことを話す鈴、それに興味津々な詩織が席に着いている。

彼女らは全員中学時代からの仲間で、同じ高校に進学した後も共に行動している友人同士だ。だからこその歯に衣着せぬ会話もあるが、基本的にはことある毎にこうして集まって遊んだり勉強したりする、仲の良い五人である。

「鈴！鈴！それでどうするの！？」

身を乗り出して興奮気味に訊ねてくるのは、一昨日の祭りでも鈴と一緒にいた詩織。まさか自分と別れた後にそんなことがあったとは思わなかったのだろう。楽しそうな双眸が鈴のきょとんとしたそれとかち合った。

「どうするって・・・何が？」

「んっもー！だからその人助けてくれたんでしょ！？お世話になったんでしょ！？」

「そう、だけど・・・？」

「だ、か、ら！そこはやっぱ何かお礼とかしないとダメなんじゃないの！？一晩世話になっておきながらハイさよならなんて、ちょっと神経疑うぞ！」

「あんたはただ面白いことを期待してるだけでしょ」と、朱音が口を挟む。それをさらっと無視して、詩織は更に鈴へ詰め寄った。ニヤニヤとした不気味な顔で。

「鈴！十五の夏は今だけなんだぞ！今を逃せばいつチャンスがくるかなんて分からないし！女は度胸だ、当たって砕けろ！」

「だ・・・だから詩織ちゃん、そういう話じゃなくって！別に私、ハルちゃんのことは！」

「へー。ハルっつうのか。名前まで女みたい」

「あぁっ！しまったつい口が滑って・・・！」

「あはは、鈴墓穴だー」

「も、もーー！！みんな煩いよっ！！とにかく、私はそんなんじゃないんだってば！！」

詩織だけでなく朱音や瑠香までからかってきたので、鈴は耐えかねて席を立った。両手をばんっと突いて、この話はもうお仕舞いと

ばかりに声を荒げる。彼女たちに安易に喋ってしまった少し前の自分を呪って。

「ほら！宿題やるよ！もう皆他人事だと思って、面白がってばっかり！だいたい、今日は勉強するために集まったんでしょ？奈央ちゃんと朱音はやってるけど！詩織ちゃんと瑠香ちゃんはさっきから喋りっぱなしじゃん！」

「いや、あんたもだから」

瑠香がすかさず抗議する。

「私は英語やってるもん！問題が分からなくて解けないだけだもん！」

「す、鈴・・・ちょ、」

「なに！何か文句でもあるの奈央ちゃん！」

何かを言いかけた奈央美。それを遮った鈴だが、直後、ごほん、とわざとらしい咳払いが背後から聞こえて、反射的に振り返った。不機嫌そうな顔つきでこちらを睨む女性は、この図書館の司書。まずい、とは思ったし後悔もしたが遅かった。慌てて机に散乱していた菓子類を隠す四人を横に、鈴はとりあえず口にしてみた。

「・・・ス、スイマセン・・・」

「他の利用者様の迷惑になります。出て行ってください」

# ＊逢いたい（2）

司書の女性の退去命令を受けて、仕方なく五人は図書館から出て行った。その間、鈴の大声の所為だと愚痴ったり瑠香が食べ物を持ち込むのが悪いのだと反発したりと各々不満たらたらだったのだが、屋外に出た途端襲ってきた暑苦しさには口論さえも長続きしなかったらしい。一様に生気を吸い取られたような顔で「あー」だの「うー」だのと唸り始める。

「まぁ、とにかくさ・・・」

近くのコンビニに立ち寄って買ったアイスを食べながら、ふと朱音が鈴に向かって話しかけた。

「鈴が思ったよりも大丈夫みたいで、安心したよ。襲われたって聞いた時はマジでびびったけど・・・こうやって今日元気に顔出してるんだからね。最悪の事態ってわけじゃなさそうで良かった」

「朱音・・・」

はにかんだ笑顔でそう言う朱音に、鈴はじんわりと目を潤ませた。への字になった口で泣くのを堪えようとすると、他の三人も口々に気遣って言葉をかけてくる。

「そうだよね。私もそう思うよ！鈴が元気そうで本当に良かった！」

「普通襲われた翌々日に外出する気にはなれないからねー。絶対ショックで寝込むだろ」

「あたしなら対人恐怖症決定だね。やっぱそのハルって人のおかげじゃね？やっぱそれって恋の予感じゃね！？」

溶けかけの棒アイスを鈴の鼻っ面に突き付け、性懲りもなく同じことを繰り返す詩織。泣き顔で苦笑いする鈴はゆるく否定するだけに留めた。

ハルのおかげ、というのは誰よりも鈴自身が身に沁みて感じていることだ。ハルと、浩信というあの男性。彼ら二人が助けてくれなければ、鈴だって詩織の言うとおり対人恐怖症決定だっただろう。もしかしたら命だって危なかったかもしれない。思い出しただけでも背筋を寒気が走るし、心臓がぎゅっと縮み上がるような恐怖を覚える。けれどそんな自分が今こうして、表面上だけだとしても普段どおりに振る舞えているのは、やはり彼らの、ハルの優しさと労りがあったから。

雨の中で抱き締められたときの温もりも、震える手を包んで引っ張ってくれた力強さも、頭を撫でてくれる柔らかい指先も、まるで初対面とは思えない程の安心感を与えてくれた。ハルが女性でないと分かっても、驚きこそあったが嫌悪感などは全くなかった。

不思議な人だったな、と鈴は彼の笑顔を思い出しながら空を見上げる。

「お礼、かぁ・・・」

「お、なに。やる気になったの？」

ぽつりと呟いた鈴の一言に詩織が反応した。

「でもなぁ、逆に迷惑になりそうな気がして」

やや険しい表情になる鈴。ううんと唸りながら躊躇っていると、なんでよ、と今度は瑠香が訊いてきた。

「そもそもお礼って何をすればいいの？」
「さあ？」
軽く首を傾げるのは、さっきから鈴に責付いていた張本人だ。
「ちょっとー！詩織ちゃんが言い出したんだよ」
詩織の投げ遣りな態度に鈴がむっとなる。
「いや詩織の本心は元々別のところにあるから」
「まずは口実よ鈴！何でもいいから接点を持つのよ！」
「だから私はそんな気はないんだってば」
「もーせっかく面白くなりそうなのに！」
「面白がってんのはお前だけだ詩織。あーもう暑い暑い暑いっ」
苛立った声で朱音がそう言ったきり、会話は平行線を辿り発展することはなかった。最初は渋っていた詩織もやがて諦めたのか厭きたのか、行付けのゲームセンターでプリクラを撮ったり曲に合わせて太鼓を叩いたりする頃にはすっかり忘れていたようだった。ファミレスで昼食代わりにパフェを注文した五人は、互いのそれを摘みながら、当初の目的である夏休みの宿題を悪戦苦闘しつつも消化し、大方終えただろうと背伸びをして時刻を見遣れば、既に午後五時を回っていた。
頭脳派の朱音と奈央美を除いた三人にとっては実に酷な時間であったのは、それぞれの疲弊しきった顔を見る限り間違いあるまい。頭痛がするのか眉間に手を当てている瑠香の隣で、鈴は早々に問題集も教科書も筆記用具も仕舞いにかかっていた。もう見るのも嫌だと言わんばかりのうんざりした表情を、片や奈央美はくすくすと可笑しそうに笑っていたが。

そして帰り道。

流石に鈴を一人で帰宅させるのは心配だった友人四人。相談し合って、家が隣同士でもある奈央美と瑠香が、鈴を家まで送ってやることに決めた。詩織と朱音に別れを告げ、日差しは弱まってもまだまだ明るい空の下、三人の少女はゆっくりとした歩調で道を行く。

「まーとにかく、鈴はもうちっと警戒心を持て。大体夜の公園に一人でいるとか、アホなの？」

「しょ、しょうがないじゃん。足が痛くて歩けなくなったんだもん。靴擦れしたんだよ」

「でも鈴、やっぱり危ないよ。万が一ってこともあるし・・・今回は運が良かっただけだと思う。私すごく心配したんだよ？」

「奈央ちゃん・・・」

顔を覗き込まれ、鈴は言葉に詰まった。言い方は乱暴だが瑠香も奈央身と同じように、怒ったような呆れたような、それでも鈴を案じているのだと分かる視線を向けている。

少しだけ沈黙し、「うん」と鈴は頷き反省した。

「うん、ごめん。そうだよね。運が良かった。まさか自分がこんな目に遭うとは思いもよらなかったの。私が甘かったんだ。本当、無事に助かってホッとしてるよ。もう絶対、あんな危ないことはしないから」

噛み締めるように鈴が言う。ぎゅっと口を引き結んで自分の浅はかさを戒める。

よし。瑠香が鈴の頭をぽんと叩き、奈央美がにっこりと微笑んだ。

「ありがとう・・・」

心配してくれることが純粋に嬉しく思う。
鈴は心底、彼女たちの思いやりに感謝した。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

瑠香と奈央美を自宅前で見送り、ようやく一息つく。冷房の効いたリビングのソファーにごろんと身を横たえ、火照った肌を撫でる冷気に心地よく瞼を閉じた。耳を澄ませば、隣家から涼しげに聞こえる風鈴の音。熱くなった体を芯から冷やしてくれるようで、じんわりと沁み入る。横を向き、使い古された合成皮革のソファーが軋むのだけが、少し耳に障った。

しかし今日は課題を頑張ったので、褒めてもらいたい気分である。別に誰かに、というわけではないけれど、苦手な英語も努力したつもりだ。菓子に伸びる手は止まらなかったけれど、更に苦手な数学も努力したつもりだ。結果的に、朱音と奈央美に殆どご教授いただいたけれど、鈴は努力したのである。

だからもう今日はやならい。と、そう決めて、つま先から手先までをぐんと突っ張る。寝起きの猫のように伸びをして、溜まった疲れをほぐした。「あ〜ぁ〜〜」などという年寄りじみただみ声で、ひと時のぐうたらを謳歌するのである。

「・・・なぁんか、のどかだなぁ」

この時間帯、いつも母は買い物に出掛けているので今は留守だ。妹も二人いるのだが、次女は部活で、三女はおおかた友達の家でテレビゲームでもして遊んでいるのだろうと勝手に想像する。つまり

は鈴以外不在なので、静けさがただ家を支配していた。
のどかだなぁ、と思う。平穏、平和とでも言い換えられようか。
一人きりの部屋でゆったりと寛ぎながらそのように思えるというのは、一昨日の出来事を考えるとまるで嘘のようだ。願ってもないことである。「自分なら対人恐怖症になる」、と詩織が言っていたものだが、実際はこうして外出もできているし、穏やかに心落ち着けているのだ。ずいぶん、自分は図太い性格だったらしい。めそめそと引き摺って落ち込むことなく、明るく逞しく前向きである・・・と表現すれば聞こえはよいものの、乙女心としては複雑であった。
勿論、それが全て自身の性格に起因するものではなく、重ね重ねハルたちのケアがあったおかげ、というのが大前提ではあるけれど。

「まあ、いっか」

鈴は勢いよく起き上がると、ぺちん、と両頬を叩いた。よいのである。乙女心的に複雑でも、自分がこのように精神的に大きな傷を負わなかったのは、喜ばしいことなのだから。大変、よいことなのである。
ふんふん、鼻歌を歌い、冷蔵庫のドアを開けて麦茶のポットを取り出した。半透明の容器の中でたぷんと揺れるそれをコップに注ぎ、のどを潤す。すっきりした味わいが個人的に好みで、夏といえば麦茶！の鈴にとっては帰宅後の一杯は欠かせないものだ。
飲み干して、僅かにコップの底に残る数滴。
じっと見つめ、思い出すのは、麦茶よりも酸味があって、暖かい――梅の味であった。

## ＊逢いたい（3）

「ただいまぁー」

玄関で声がする。はっとして顔を向けると、間もなくリビングのドアが開けられ、手提げのエコバッグに購入した品を詰め込んだ母が入ってきた。

「お帰りい、暑かったでしょ」

「そりゃもー、暑いったらないわ。ちょっと歩くだけで汗かいちゃって」

中年小太りの専業主婦はそう零して、首の汗を拭った。そして鈴がコップに麦茶を注いで渡してやると、一気に流し込む。苦笑せざるをえない。

「普段からあんまり出掛けないからだよ。ほら、運動不足でしょ、お母さん」

自らのことは棚に上げ、母の健康についてお節介を言ってみる。この鈴の母、年がら年中意気込んでダイエット宣言をしているにも拘わらず、実に長続きしない。〇〇ダイエット、△△ダイエットと数だけはこなしているのだが。三日坊主ならぬ三日主婦、である――というのは、ひとつの余談だ。

「そう言うあんたは、つい二日前に酷い目に遭ったってのによく平気な顔で出掛けられるわねえ。お母さんこれでも、心配で心配で仕方ないのよ？・・・本当に大丈夫なの？今日は何もなかったのよね？」

鈴の本心を見抜こうとする視線が、正面から向けられる。眉尻を下げた母の顔は、被害の当事者である鈴よりもよっぽど不安げで悲しげで。昨日の、粗方の事実を教えたときの両親の表情と重なった。昨日は、そこに驚きと戸惑いの色も混じっていたけれど、どちらにしろ鈴の胸を罪悪感で染め上げるのだ。

「だぁーいじょうぶだって！今日は瑠香ちゃんと奈央ちゃんに送ってもらったし、なーんにもなかったんだから」

けろりとして言う鈴。肩をすくめ、ポットを冷蔵庫にしまいドアを閉めると、軽くそこに寄り掛かった。母はなおも不安そうな様子を変えない。ふむ、と鈴は困る。心配するなと言う方が無理なのだろうか。友人たち然り、家族然り、思いやりはありがたいのだが、度が過ぎると申し訳なくなってしまうものだ。

“お母さんたちがそこまで気にすることないのに・・・”

ゆるく吐き出した呼気に乗せて、小さな戸惑いを吐露する。

鈴としては、自らを叱責したり、または行動に注意すべきだったり、そういった自戒は十二分に必要だと思っている。でもそのことによって周りを不快な気持ちにさせるのは嫌だった。だから以前となんら変わらぬ自分自身であり続けたかったし、あんな出来事など何でもないことなのだと、必要以上に心配するなと伝えたいのである。

恐怖は過ぎたこと。完全に忘れて綺麗さっぱり、などと強がるつもりもないものの、逆に、今はもう傍にありもしない恐怖にいつまでも怯え続けるつもりもなかった。

尾本鈴は、その程度には強かなのである。

「そう・・・それならいいんだけどね。何かあったらすぐ言うのよ？それから絶対に、」
「“絶対に、人気（ひとけ）のない場所をうろつかないこと”・・・でしょ？分かってる」
「・・・もう」

「しょうがない子ねえ」、と母は続けて言った。呆れた態度で、口元に笑みを広げる。そして、エコバッグから商品を取り出して冷蔵庫にしまう作業を手伝いながら、母と何気ない世間話に花を咲かせた。今日の夕飯のこと、頑張った課題のこと、テレビのニュースのこと、妹の反抗期が難儀であることと・・・・・それから、昨日出した被害届のことも。

両親と共に警察署に赴いて、鈴は被害届を出してきた。その折に事情聴取もあった。だが被害届だけでは刑事告訴・告発までは成り立たないらしく、起訴・不起訴も決定しないのだとか。被害者ら―つまり鈴や、鈴の両親があの暴漢を処罰してほしいと警察に申告しない限り、すなわち告訴しない限りは、訴訟を起こせない、というのである。あまりに難しくて鈴は何度も何度も警察官に説明を求める破目になったのだが、なるほどよく考えれば当然か、と後に理解できた。

今回は未遂に終わったけれど、もしあのまま助けがなかった場合、最悪強姦罪の被害者になっていたかもしれないのである。十五の鈴にとっては聞くに堪えない、恐ろしく不愉快な話ではあれど、我慢して考えてみた。レイプ被害者。自分がもしその烙印を押された人間になれば、今の精神状態の比ではなかろう。まして告訴などして、訴訟を起こして、法廷で、人前で証言をしなければならないなんて。聴取をされなければならないなんて。

“絶対、そんなの耐えられない”

余計な辱めを受けるだけである。俗に言う“泣き寝入り”というのを、鈴は初めて知った。

・・・それに、未遂だとはいえ鈴も悩んでいるのである。告訴だなんて、起訴だなんて。正直ついこの間まで中学生だった自分には縁遠き事柄すぎて、戸惑ってしまったのだ。知らない世界に放り出されて、理解して判断しろと要求されても困るのである。

“両親とよくよく話し合え”と別れ際に浩信が言っていたことの意味がようやく分かった。頼みの父母は、鈴の感情を慮って、「すぐには決めず、ゆっくり考えよう」と時間的猶予を与えてくれた。正直、ありがたかった。この件に関して、鈴には知り、考える時間が必要であったから。

――と、かくなる訳で、小難しいことを念頭に・・・いや、頭の隅の端っこの方に置きつつ、今日から無事、日常生活に戻っているのだ。学校への報告は気が進まなかったけれど、母が代わって知らせていた。担任の教師が驚いて大いに心配していたので、元気な声を電話で聞かせておいた。いやはや、これ程までに人に心配されるという事態は初めての経験である。今が夏休みの只中で、本当によかったと思った。やたらと注目を浴びなくて済む。あまり大騒ぎにはさせたくないし、なってほしくもない。

治りかけの足の傷を消毒し、風呂上りの鈴は大きくベッドに背中を沈めた。夕食を終え、リビングで面白いのかつまらないのかよく分からないテレビ番組を無意味に眺めた後、何だかぼうっとしてきたので、今日はもう入浴して寝てしまおうと決めたのだ。濡れた頭に無造作にタオルを被せ、一昨日ハルがしてくれたように傷の手当てを施した鈴は、動く気にもなれずそのまま天井を見つめる。

「・・・・・・・・・」

今日一日の自分の思考を改めて辿った。そして、嫌になるほど脳裏をちらつくハルの顔が、声が、彼との記憶が、やんわりと苦しめてくるその胸の間を、鈴はじれったくて強く握った。

お茶を見ては家で飲んだ梅茶を思い出し、足の傷を見ては彼が手当してくれたことを思い出し。

ぱらり、ベッドに広がる。細く分かれるこの髪を、一晩で幾たび、あの細く綺麗な指が梳いただろうか。悪戯に摘まれた頬も鼻も、優しく包んでくれた両腕が背中を摩る感触も。「大丈夫？」とかけてくれる柔らかな声色も。「可愛い」と、自分の方がずっと端正なくせに、嫌味ともとれる言葉を、あれほど無邪気に口にしていたことさえも。

寂しい、と思う。奇妙な孤独感を覚える。夏祭り以前と同じ、平穏な日常が戻ってきたのに、なのに物足りなく感じる。それも、とてつもなく。

おかしい。これはおかしい。言い表しがたい感覚に鈴は二度、三度瞬きを繰り返し、そしてはた、と思い当たる。

「・・・・・ない、ない！そうじゃなくて、違うっ」

自分へ向け、咄嗟に否定する。鈴は一人顔を赤くした。

これではまるで、甘酸っぱく想い人へ懸想する、どこかの少女漫画的乙女だ。そんなふうに思ってしまったのである。

そして「うにゃぁっ」と猫のなり損ないのような奇声をあげ、半回転してうつ伏せになった。動揺を抑えるべく、窒息しそうな勢いで顔をぐりぐりと擦りつける。自分で至った考えに激しく羞恥を覚え、“なし！今のなし！取り消し！”と胸中で主張した。

昼間の詩織の焚き付けざまが蘇る。あれには参った。こちらとしては全くそんな気などなかったので、いくら友人とはいえ人の恩人で遊ばないでいただきたかった。“なんか面白そう”と顔に書いてある詩織の口車に乗せられるのは癪である。ゆえに只今思い至ったことに赤面している自分を情けなく思った。果たして口車に乗せられてしまったのだろうか。

「だ、だって、そんなの、ありえないし！ないからね！」

必死に「ない！」と否定する姿は傍から見ると酷く滑稽だっただろうが、本人からしてみれば、燃え広がる火事の炎をばふばふと衣服で叩き消すかのような大変な思いである。

言うまでもない。鈴にとってはもう会うこともないだろうと思って別れた人なのだ。恋愛感情に発展するには、高く大きな山がいくつも聳え立っている。それは確かに、鈴はハルの家を知っているので会いに行くことも不可能ではないし、“助けてもらったお礼”という口実であれ事実であれ、会いに行く理由もある。けれどきっと、ハルはあの別れ際の淡々とした様子からみても、あの“最後”という言葉から考えても、鈴との再会など望んではいない。寂しいと思うのは、鈴が助けられた側だからである。だから、自分と会うことも望んでいない人との恋愛が、発展するわけがないのだ。たとえ会えたとして、そこからどう関係を築いてゆけばよいのかも分からない。歳も離れていれば、そもそも友人ですらない。知り合いにうぶ毛が生えたような、薄っぺらい繋がりも、こうして一日二日と過ぎていくにつれてどんどんなくなりつつある気がした。

したがって、「ない」のである。鈴がハルのことをいつまでも思い出してしまうのは、あのような特殊な状況下での出会いだったからに違いない。ついでに言えばハルの見目がよろしいからに違いない。更に言えば、ハルの人柄がよろしく、そして鈴が大いにそれに救われたからに、違いない。補足するなら、ぺらぺらと五月蝿かっ

た詩織のせいでもある。

鈴はもう一度仰向きになった。髪を乾かさなければ、このまま寝てしまえば風邪を引くだろう。ドライヤーを当てながらさらさらと梳っていたハルの指を思い出しかけ、慌てて思考を振り払う。「ない」というのに、天邪鬼な脳みそである。わしわしとタオルでもみくちゃにした。

「あいたっ」

頭頂部から後頭部にかけて乱暴に拭っていた鈴は、微かに響く鈍痛に声を発する。力を込めていたので、小さくできていた瘤に障ったのだ。どうしてこんなところが痛いのか、記憶を掘り起こした鈴はおまけに墓穴も掘った。

思い出す。ベッドに入ってきたハルの腕が、鈴の目の前をよぎった瞬間を。勢いよく仰け反った先の壁で、したたかに頭を打ち付けたことを。蘇る。真上から見下ろす彼の、優しい手のひらがそっと頭を撫でたことを。感極まって抱きついた鈴に、揺らめく瞳。そうして、そして、長い髪がカーテンのように光を遮る中で、この頬に触れたまま、整ったハルの顔が、そっと近づいた、あの刹那を。

「――――〜〜っだからぁ!!違う!ないんだってばぁーーーっ!!」

ベッドの上で一人、自身と格闘し悶絶する鈴の、蛙を握り潰したかのような切ない絶叫が響いた。

八月も後半に入った、ある日の、晴れ渡った夜のことである。

# ＊逢いたい（4）

それから暫く、鈴はだらけた毎日を送った。友人のうちの二人、朱音と奈央美は塾の夏季講習があって忙しく、遊べない。商店である実家の手伝いを強制させられて、瑠香も遊べない。詩織も詩織で、曰く「田舎の祖父ちゃん家行ってくるから！」とのことなので遊べなくなってしまった。

安穏かつ無味乾燥な日々が続くこと、早七日、要するに一週間。厳しい夏の日差しは翳ることなく、鈴の夏休み生活を指折り減らしてゆく。

勉学に熱心な性分ではないため、白状すると課題は一向に進んでいない。友人たちと合同勉強会――と称するほど高尚な集まりではなかったが――を行った日以来、からっきしである。往々にしてどじを踏むタイプのため、アルバイトで小金を稼ぐ気にもなれない。運動音痴、芸術音痴のため、運動部や文化部に入って部活動に勤しむこともしていない。特別、趣味があるわけでもなし、暇なのだ。

基本的に鈴は家でぐうたらと過ごしていた。これまでやった生産的なことといえば家事手伝い程度である。最初こそ鈴の安全を考慮して外出に難色を示していた母も、のんべんだらりと無為に過ごす鈴の出不精ぶりには呆れたのか、妹を見習えという小言が増えていった。鈴に反して次女である妹――名を杏（あん）という――は、姉の苦手分野を全て得意分野にひっくり返したかのような頭脳明晰・スポーツ万能・才色兼備、尾本家の“華”であるので、常々鈴は肩身の狭い思いをしている。つんけんした性格に輪をかけて、反抗期に突入したこの頃は手がつけられないが、そうした短所を補って余りある才女なのだ。肝心の姉妹関係は可もなく不可もなく、といったところ。出来すぎた妹を持ってしまったことを鈴は充分自覚しているので、目立った不和はない。次女・杏はむしろ姉の鈴に、手がかかる

と文句を垂れながらも何かと世話を焼いていたりする。件の事件で、実は家族の誰よりも姉の心配をしていたのが彼女だ。母と違って、家で怠けた日々を送る鈴に外出禁止令を出し続けているのである。そんな杏が、鈴があっさり友人と遊びに出掛けていったと知った時は、つんけんした性格に輪をかけて酷くなった反抗期に、更にまた輪をかけて、物言わぬ阿修羅王になっていたりもした。

妹に過保護な扱いを受けるというのも複雑な心境である。別に妹の言いつけを守って出不精になっている訳でもない。・・・だからといって母の言葉に倣い、定期テストで学年首位になったり空手の県大会で優勝したりするような妹を見習う、などとはハードルが高すぎであるが。

とにかく鈴は暇だった。せっかくの、高校生活初の夏休み。色んな思い出を作ろうという思いもなくはなかったけれど、交友関係の狭い鈴にとって他に遊べる友達はいなかった。

どじなのは認識している。しかし思い切って小金を稼いでみようか。探せば自分でもできそうなアルバイトはあるかもしれない・・・と現状を打破しようと行動しかけた折である。

小さな事件が、またも鈴に降り掛かった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

「あら、お父さんたら！お弁当忘れてるわ」

発端は母のそんな言葉であった。怠惰な日々も一週間と一日目に

さしかかろうとした日の、午前のこと。掃除機をかけ洗濯物を干し終わった母が、ダイニングテーブルの上に置き忘れられた弁当箱を発見したのである。男性が使用するには可愛げのある風呂敷に包まれた、父の昼食だった。とっくのとうに父は出勤しており、追いかけるには手遅れの時刻。

「鈴！すーずー！ちょっと！お父さんのお弁当、会社に届けてくれないかしら」

「えぇーっ」

面倒なので渋った鈴だが、特に他の用もなかった。次女の杏はこの日も空手道部と兼部している弓道部の地区大会に行って留守。三女は生憎と小学三年生の齢九つなので、父の会社まで届け物をするにはやや心許ない。消去法で鈴だけが残るため、「仕方ないなぁ」と承諾した。

「お母さんが行ってくればいいのに」

「そう？じゃあその間に、食器洗って庭の手入れして、ご近所の柴崎さん宅にこの西瓜をお裾分けしてきてくれる？それから都（みやこ）の宿題を教えてあげて、時間が余ったらオヤブンの餌を・・・」

「わーかった！行く！今すぐ私が行ってくる！じゃあね！」

弁当を鞄に詰め込み、そそくさとサンダルを履いて鈴は玄関を出た。ふう、と溜め息をつき、次いで咽せるような暑さに顔をしかめる。

因みに都とは三女の名で、オヤブンとは尾本家に入り浸る雄の野良猫のことである。飼っているわけではないのだが、いつしか腹が空けば餌をせびりにやって来るようになった。顔つきがどこぞの任侠者の親分のように厳ついので、都がオヤブンと命名したのだ。

ひらり、とシフォンのフレアスカートを揺らし、道を行く。髪の毛を纏めてくればよかったなぁ、と少し後悔しつつ、鈴はアスファルトの道路を父の勤め先目指して歩いていった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

父が勤務している場所は、とある出版社の地方支社である。雑誌や書籍など幅広く発行している会社の女性向けファッション雑誌の編集長をこの春からしており、中々に忙しい役職に就いているのだ。外見は「ファッション誌の編集長？嘘をつけ」と疑うほど地味で野暮ったい。同じ出版社なら郷土特集でも組んでいる地方新聞の方がお似合いである。・・・などと家族で笑い話になった時には、父自身も同意していたが・・・自らの身なりには一々構っていられないようで、娘としては些か不満もありながら、多忙を極める毎日に詮方なしと諦めている。

そんな父も最近は体調管理の理由から、食事はなるべく栄養バランスの整ったものをとろうと配慮しているようだ。鈴がこうして届けに行っている弁当も、父が母に頼んで早朝から作ってもらっているのである。母なりに、栄養を均等に摂れるよう、おかずの種類にも量にも気を配っているのを鈴は知っていた。確か今朝は夏ばて防止のため、豚肉の生姜焼きや夏野菜の炒め物を拵えていた。杏の弁当にも同じく盛り付け、残り物を鈴や都が朝食として頂いたのである。味はまあまあであった。

「ふうー、あっつーい！」

こめかみに滲む汗を指先で払う。緑化運動で植樹された楠の街路樹が、横断歩道で信号待ちをする鈴の頭上まで影を伸ばしていた。まだらに日陰をつくるつやつやとした広葉が、そよ風に揺らいでいる。太く長い幹にはセミが何匹集っているのやら。老い先短しと合唱していた。

交差する車道が赤信号になるのを鈴はじっと待った。あとは目の前の横断歩道を渡って、街路樹が続く石畳の歩道を歩ききり、銀行の角を右に曲がる。曲がった先の右手の駐車場を、突っ切って近道をすれば、父の会社は目前である。

じきに行き交っていた車が停止し、車両用信号機が赤になった。そして縦に並ぶ歩行者用の信号機の、青が点灯する。

視覚障害者用の誘導音を耳に鈴は道路を渡り、右肩にかけていた鞄を持ち直す。携帯の時刻表示を確認すると、まだ十時をやや回ったところである。父が早弁をしない限りは、昼食の時間帯には余裕をもって間に合うだろう。そもそも弁当を忘れたことを父は気づいているのか？とぼんやり考えながら、銀行の角に差し掛かった。

「こらーっ！走らないの！」

不意にビルの谷間に響いたのは、女性の慌てた声。曲がった角の向こうで、二十代半ばから後半ほどの若い女性が、道路の反対側に向かって急いた声をあげていたのだ。不思議に感じてその反対側――鈴にとっては正面になる――に視線を移すと。

「あ、」

思わずぎくりとした。

鈴の行く先で、小学生にもならぬような小さな子供が無邪気に走

っていたのである。短い足で何を夢中になって駆けているのか。驚いて目を見開く。子供の見つめる先には、一匹の猫がいたのだ。

反射的に鈴は首を捻って周囲の状況を見回した。車は来ていないだろうか。前方と後方を確かめた。幸い母と子を隔てる道路は普段からの交通量が少なく、それは今日も変わらぬようだった。銀行や他のビルの陰になって薄暗いそこは、道の幅も比較的狭い。無遠慮な人間はそれでも手荒い運転で通行することもある。“飛び出し注意”の看板や、“徐行”の道路標示があるにも拘わらず、度々、接触事故の見出しが新聞に躍ることもあるのだ。

ともかく、今は車がなくとも、いつ通るかなど分からない。急いで鈴も、子供の母親同様に注意をかけようとした。

「・・・・・・っ!!」

――そうして、戦慄する。

父の会社への近道である銀行の駐車場。鈴が通る筈であったその場所から道路へ、一台のミニバンが頭を出そうとしていたのである。

## ＊逢いたい（5）

建物の影からゆっくりと出てくるフロント部分。子供は猫に夢中なまま。車は一旦停止し安全確認をしたそばから、また動き出す。子供が小さすぎて死角になっているのだ。お互いに存在に気づいていないのだろうとすぐに分かった。

衝突する！

そう思った途端、鈴の足は地面を蹴っていた。

凍り付いて子供の名を呼ぶ母親の叫び声。

視界に車体が入り、子供が顔を上げる。けれど慣性の法則に従う体は、急には止まれなくて。

鈴は必死に腕を伸ばす。よろめいた子供が尻餅をついて、見上げる、突如現れた大きな鉄の塊に、ただ圧倒されているところへ。

伸びた腕が、指先が、届くように。

「いやあぁーーーっ！！」

“お願い、間に合って――――！！”

どんっ！・・・と鈍い衝撃が襲ったのはどこからだったか。

母親の声が、何故か鈴の名をも呼んだような気がしながら、腕に抱えていたのは小さく柔らかな感触だった。

全身で包み込むように抱き締め庇った鈴の胸で、ひくっと喉の引き攣る気配がした。

「・・・・・・・・・」

数拍の間、静寂に支配されたその場で。

「・・・っとに、危ないことばっかりして」

自分ではない別の声が第一声となる。

「・・・っく、う、うわぁぁああんっ」

衝撃に備えて伏せた頭の上からの声が、腕の中からの泣き声に掻き消された。恐る恐る瞼を開いて腕に抱くものを見やれば、腰を抜かして号泣している子供が。ばくんばくんと飛び出そうなほど大きく脈打つ心臓をよそに、鈴はすぐさま子供の怪我を確認した。

「っど、・・・どこか・・・っ、怪我!痛いところ、ない!?」

息も絶え絶えに声を絞り出す。けれど子供は泣くばかりで。どこかが痛くて泣いているのか、それとも驚きと恐怖で泣いているのか見当がつかない。鈴はおろおろと、腕の中で泣き声をあげ続ける子供のあちこちを触った。

「あ、頭とか痛くない?背中とか、腰とか、打たなかった?」

「あぁああん、う、うぐ、ママ、ママぁっ!」

「ど・・・どうしよう、どうしたら」

困り果てて鈴は座り込んでいた。母親も我が子の名前を呼んでこ

ちらに駆け寄っている。とりあえず彼女に引き渡した方がよさそうだと判断し、立ち上がりかけた時である。

「大丈夫、怪我はしてないわ。少し驚いただけよね」

すっと、鈴の足の間にあった子供が抱き上げられた。

目で追って上を向いた鈴が、その瞳に映した姿は。

「・・・・・・え、――――え、え!?」

よしよし、と、かつて鈴も同じくされたように、子供の背中や頭部を優しく撫でている、粟飯原春季――忘れもせぬハルその人であった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

“・・・な、なんで”

言葉を失った。へたり込んだ四肢から力が抜ける。“なんで”、“どうしてここに”と放心状態で瞠目する鈴。これはいったい、どういう状況なのか。

「ああ！よかった・・・！」

母親が傍らまで駆け寄ってきて、ハルの抱く子供に腕を広げた。求められるままに、ハルは僅かに落ち着きかけていた子供をそっと

彼女の腕に託す。よく知った温もりに包まれた瞬間、幼い子の一層甲高い泣き声が通りに響く。我が子の無事を噛み締めるかのように、母親はひしと抱き締めて同じく涙を滲ませた。

「よかった、本当に、よかっ」

「・・・・・“よかった”、じゃありません」

「・・・!!」

安堵の空気が漂うその場に、ハルの冷え冷えとした声が突き刺さった。彼の印象とはかけ離れた一言に、鈴の吃驚はひときわ強まる。女性からもう一度ハルへと視界を戻すと、冷静さに静かな怒りを灯した表情が、母親へと向けられていたのだ。

「こんな小さなお子さんの傍を離れるなんて、それでも母親なんですか。一歩間違えればこの子は車の下敷き、この女の子も大怪我を負っていたかもしれないっていうのに・・・“よかったよかった”で済む話じゃありません。馬鹿の一つ覚えみたいに息子の名前ばかり呼んで。本当ならあなたが真っ先に身を挺して庇うべきでしょう。ご自分の愚かさをしっかりと反省なさってください」

射抜くような厳しく鋭い視線。頬を濡らしながら女性は呆然と立ち尽くしていた。鈴は一言とて発せぬほど驚いて、自身の見知った柔和さなどないハルの横顔を、ただじっと見上げていた。こくり、無意識のうちに唾を嚥下して。

危うく子供を轢いてしまうところだったミニバンの運転手が、気が動転した様子で姿を現す。皆の前で謝罪を繰り返して、必死で頭を下げていた。けれども、どうやら子供や鈴とは接触しなかったよ

うで、どちらも怪我などしていなかった。腰は抜けたままではあれど、鈴は肺の空気を全て吐き出すような大きな溜め息をつく。ハルはああ言うが、鈴も心底“よかった”と安心したのである。ともかく、怪我人が出なくて、よかった。本当によかった。

そして足腰に力を込める鈴。立ち上がろうにも、中々立ち上がれない。ハルがそれに気付き、鈴に片手を差し出した。こちらへ向く彼は既に先程の冷たさもなく、口角を緩やかに上げて微笑みのかたちである。そこにほっと胸を撫で下ろして、おずおずと掴まった。

力強く引き上げられる。美しい女性のなりをしていても、やはり男性なのだと得心せざるをえなかった。鈴の体重などありもしないかのように、立ち上がらせてくれた先で、ぽんぽんと頭を叩かれた。十日前となんら変わらぬ優しげな掌に、鈴も今更ながら自分のしたことの唐突さを実感する。中々スリリングな行動をしたものだ。駆け出した瞬間に放り投げた鞄が、斜め後方に落ちている。その横には、鞄から飛び出した父の弁当箱が無惨に転がっていた。

思わず引き攣る鈴の頬。中身がどうなっているかなど想像に難くない。“お父さん、食べてくれるかなあ・・・”と別の懸念が鈴に湧いた。

しかしまさに不幸中の幸い。際どくも惨事にはならず、結果的に怪我人も出なかったようである。当の母子は、女性がハルの叱責を受けてどうも居心地が悪くなったらしく、こそこそと逃げるようにその場から去っていった。“なんだかなぁ”と後味のすっきりしない鈴だが、それでも誰かが傷つかなかったことに肩の力を抜いた。御の字である。車も去り、鈴とハルだけが残ると、ようやく表通りの喧騒が耳に入ってくる。

# ＊逢いたい（6）

ちらり、ハルの顔を盗み見た鈴は、目が合ったことに動揺した。こちらをじっと見下ろしていたハルが、不満顔でさも“言いたいことがある”と言外に訴えていたからだ。

「・・・な、なに？ハルちゃ」

たじろぎ一歩下がる。するとそれに伴いハルが一歩前へ進み出で、何かの準備のように息を吸い込んだ。そして宙へと視線がさまよう鈴に構わず、腰に片手を当て、口を開いたのである。

「こらっ！」
「はいっ」
「誰が、あんな危ない真似しなさいって言った！？私はねえ、鈴ちゃんに交通事故起こしてほしくて公園で助けたんじゃないのよ？」
「そんっ、」
「黙って！」
「はいっ」
「見かけたと思ったら、前は襲われてて、今度は轢かれかけてるって、どういうこと！？」
「でっ、でででも、咄嗟に体が動いて！ふ、不可抗力、」
「なわけ、ないでしょうがっ」
「はいっ、ごめんなさいっ」

説教を食らった鈴は身を縮こまらせる。見目麗しいだけに迫力あるハルの怒り顔が、実に恐ろしく感じたのである。柳眉を吊り上げた彼は、なおも高いところから鈴を叱りつけた。

「もし車が鈴ちゃんの存在にも気づかなくて、一緒に巻き添えになってたらどうするつもりだったの！そんな小さい体、打ち所が悪ければあっという間にあの世行きなんだからね！助かったからよかったものの！全く！無茶をするのはよしなさいっ」

「ごっ・・・ごめんなさい」

「寿命が縮んじゃったじゃない！」

「こっちがひやひやしたわよ」とハルは最後に付け足して、盛大に嘆息した。腰に当てていた手を額に持っていき、斜めに分けていた前髪を掻き揚げる。勢いに圧された鈴を一瞥する顔の、気疎そうな表情がいかにも言い足りぬ様子を窺わせた。

「・・・偶然、通りかかったのよ。歩いてたら、鈴ちゃんが遠くに見えて・・・声をかけようとしたところに、このざまよ。とっさに庇えたから、怪我には繋がらなかったみたいで安心したわ。あーもう、ほんっと怖かった」

「・・・・・・え？」

そこで鈴は目を見開く。ハルの話を反芻し、あっと口を覆った。

「ハルちゃん、庇ってくれたの！？」

「そうよ？分かってなかったの？」

“心外である”というようなハルの態度に、開いた口が塞がらない。そういえば、自分は怪我を負っていない割には、子供を守ろうと身を挺した瞬間、どんっという衝撃だけは体に感じていた。けれども車にぶつかった硬い感触はなかったので、気のせいかとも思っていた。ハルがいたことなど、子供が自分の腕を離れた後に知ったのだ。

鈴は無我夢中で、あの子供を助けなければという一心で動いていたため、前後の記憶が定かではない。
定かではないが、もう一つ思い当たった。

「・・・なんか、そういえば、どこかで女の人が私の名前を呼んでいたような・・・」

当たる、と覚悟して身構えたとき、鈴は自らの名を誰かに呼ばれた気がしていた。あれは幻聴ではなかったのか。――――そうか、と納得する。よくよく思い出してみれば、そこかしこにハルがいたのだと気付く点が、ある。

「まあ、鈴ちゃんったら。いくらあれから十日経ってたからって、このハルさんの声を忘れるなんていい度胸してるじゃない」

ハルはにたりと笑った。笑ったまま、自分の方へ片腕を伸ばしてきたので、鈴は嫌な予感がした。逃げ足を踏む直前で、予感が現実のものとなる。

「い、いひゃい！いひゃいいひゃい、ハルひゃん！」
「人の肝を冷やさせた罰よー。おとなしくなさい。うりゃうりゃ」

鈴の片頬がぐにぐにと形を変える。懐かしくも嬉しくない痛みである。「痛い」と抗議しても、歯のない老人のように間抜けな声しか出てこないのが困りものだ。特にハルの肝を冷やそうと考えた末の行動ではないのに。言いがかりだと異議を唱えたい。法廷で争っても一向に構わないぞと思う鈴であった。

「んもうっ！かたっぽだけ伸びきったらどうしてくれるの！」

隙を突いて退いた鈴は口を尖らせて怒った。「あひゃひゃ」と彼特有の笑い声が辺りに響く。明朗快活。怒ったと思ったらもう明るく笑っている。感情表現が豊かな人だと、鈴は拗ねながらも感心した。

感心した直後、のことだった。

「・・・鈴ちゃん?」

不自然な沈黙が、鈴から生まれたのである。

声を発さぬ鈴に代わって、大通りからのクラクションが遠く響く。吹きぬく風が温く二人の髪を、鈴のスカートを揺らして、やがてまた静まった。

通りの薄暗さに加えて、空が少しだけ、雲を増やしていた。

「・・・・・・・・・?」

不審そうにハルが覗き込んだ鈴の、まだ幼さの残る顔。

それが、蒸し暑さとは裏腹に、蒼白になっていた。

「・・・・・・て、は?」

「え?何て、鈴ちゃ・・・」

怪訝になり反問したハルへ言葉を被せ、鈴は沈黙を引き裂くように破った。

「そっちの、手はっ!!?」

# ＊逢いたい（7）

和やかな空気が、跡形もなく消える。容易いことだった。全身に冷水を浴びたかのごとく、急激に冴え渡った脳内が、鈴にある大きな疑惑をもたらしたのだ。

だが疑惑とはいえほぼ確信めいたそれに、強く強く動揺を引き起こされた少女は、自身よりも頭一つ分背の高い相手に、迷わず食って掛かった。

「手、出して！！」

「・・・手？」

躊躇いなく差し出される、ハルの左手。それは、今まで子供を抱き、座り込む鈴を立たせ、また彼女の頬を掴んでいた手である。

「違う！」と鈴は半ば喚くように詰め寄る。

「そっちの手・・・右腕よっ・・・早く出して！！」

「・・・・・・・・・、」

そこでようやくハルは鈴の言わんとしていることを察知したようで、一度斜め上方を見上げた。何を思っての表情か、鈴には読み取りかねて不安が募る。右手を出せと言うのに出そうとしないハルに、泣きだしたくなった。

厳しく責めるような言葉に対して、鈴の眉、両目、口、顔の全てが如実に心理状態を表す。不安、恐怖、憂い、焦り、そして自身に向ける激しい叱責。綯い交ぜになった感情が、されど弾け飛ばぬように、ハルへの慮りへと集約されていた。

「さぁてと、そんじゃあ鈴ちゃんも無事だったことだし、そろそろ

帰ろうかなあ」
「ハルちゃんっ！！」

屈託のないハルらしいそれとは異なり、曖昧な笑みを浮かべる彼はそんなことを言う。背を向けようと踵を返すさまに、鈴は“どうして”と思わずにはいられなかった。

――――隠しているのである。

彼は、隠している。最早隠し切れもせぬことを、鈴にこうして発覚されていることを、あくまで知らぬ存ぜぬを貫き通して、言葉で、行動で証明しようとしない。

鈴は自分の鈍さを呪った。ハルの普段どおりの態度、怒りを見せてはいても、そこに何ら苦痛を匂わすことはなかったが故に、まやかされていた自分の鈍さを。そんな自分の鈍感さに乗じて、いや、はては自分が勘付いてさえ、上手く誤魔化そうとするハルの態度が腹立たしい。子供扱いして、はぐらかせばこちらが引っ込むとでも思っているのだろうか。

ハルは、確実に怪我を負っている。鈴はその一つの考えに先程やっとたどり着いていた。

おかしいと感じたのは、ハルの手が頬を掴んで遊んだときである。掴まれたのは片頬で、掴んでいたのは片手であったからだ。「かたっぽだけ伸びきったらどうしてくれるの」と自分で放った言葉に、遅れて違和感を覚えた。それはそうだ、以前同様のことをされたときは、両頬掴まれていたのだから。滑稽な記憶が役に立つものである。妙に力なくぶら下がっているもう片方の腕が、鈴の目に留まった。

あとは流れ作業のように、ハルの随所の行動が脳裏に思い出された。彼を最初に視界に認めた瞬間から今までの間で、右手、右腕が自然に動いていたところなど、鈴は知らない。

子供を抱いていたのも、鈴を引き上げ撫でたのも、同じ左手、左腕。

どうして、なぜ直ぐに確かめなかったのだろう。怪我を負うなら、あの車との接触以外に他ならない。ましてハルは鈴らをとっさに庇ったと言ったのに。

どうして、車と接触がなかったと思ったのだろう。怪我人がいないと思ったのだろう。はっきりと鈍い衝撃を感じ取っていながら、そんなことなどありえないのに！

子供、更に鈴が衝撃を覚えても、かすり傷ひとつとて負っていないのは、すなわち誰かが身代わりになってくれたということだ。そして誰かとは、ハルしかいない。

血の気の引いた全身を携えて、鈴は結論に至った。時間が止まったような錯覚の中、鈴を覗き込むハルは至極平然としていた。まるで鈴の考えていることなど見当もつかないという様子だ。たとえ出血はしていなくとも、おそらく、右腕に動かすことも叶わぬほどの痛みを抱えているのだろうに、おくびにもそれを出さないのである。こんなに自分は真っ青になっているのに、当の本人は平気で怒ったり笑ったりからかったりしていたのだ。

だから思いのほか、荒立った声になってしまった。ハルにしてみれば、怒っているように目に映ったかもしれない。怒りが真ん中に渦巻いているわけではなかった。真実怒っているとすれば自分に対して。ともかく否が応でも右腕の状態を知りたい。心配を通り越して恐怖である。なれどハルはやんわりと話を逸らすだけ。そこだけは腹立たしく思った。

よもや回れ右をして帰ろうとする彼を、鈴が黙って見送るはずもなく。

「待って！！」
「・・・っ、」

もう形振り構っていられない。そっちがとことん隠すつもりなら、こちらも実力行使に移るまでである。

触れれば痛むと承知して、鈴は巧妙に体の影に置いていたハルの右腕を、容赦なく掴んだ。掴んだ途端、相手の息を呑むのが空気に伝播する。やはり痛むのだ、と鈴はどうしようもなく傷ついた顔をして、反射的に力を緩めたが、しかし離しはしない。このまま彼を帰すわけにはいかなかった。

「・・・ほら、怪我してるんでしょう？ハルちゃん、病院行こうよ・・・！」

背を向けるハルに回り込んで、懇願する。くしゃりと歪めた顔で鈴はハルを見上げた。

「血は出てなくても、骨折してるかもしれない！そんな何でもないみたいな、平気なふりなんかしないでよ・・・！お願いだから今から一緒に病院行こ、ね、ハルちゃん！」

しかし、触れた刹那こそ眉を寄せたハルだったが、そうして鈴が頼み込んでも態度は穏やかだった。彼に反してどこも痛くないはずの鈴の、今にも大粒の涙を零しそうな表情とは対照的だ。馬鹿げた話だと思った。お互いの感情表現が逆だなんて。少なくともハルはこの場で苦痛を表に出すことに何の枷もないだろうに、本当に冷静沈着に見えたのだから。

“どうして、そんなに我慢できるの”と鈴が信じられないのも不思議ではなかった。

「大げさねー、鈴ちゃんってば。ほんのちょっと打っただけよ？こんなので病院なんか行った日にはいい笑い者だわ。大丈夫だから、気にしないで」

「・・・っ！気にしないでいられるわけ、ないじゃん！！」

へらり、と軽く笑って首を傾げるハル。掴んでいるのとは逆の手が、鈴の頭をぽん、と優しく叩いて、額から後頭部へと滑らかに頭髪を梳った。不恰好に額に張り付いた髪の一本いっぽんを指先が掬っていく。まるでそれらが、鈴に“心配するな”と伝えてくるようで。余計に言葉にならないもどかしさを抱いた。

気にしないわけにいかない。心配しないわけにいかないではないか。

ハルが怪我を負ったのは、自分のせいなのだ。ハルに怪我を負わせたのは、自分なのだ。鈴は子供を庇ったつもりだったが、結果、そんな鈴をも庇ったハルが痛みを押し付けられた。庇ったつもりが、庇われていた。自分があそこで子供を助けようと飛び込まなければ、そしてハルが庇おうとしなければ、きっと子供は車の下敷きになっていただろう。だから鈴には、子供を助けなければよかったなんて後悔は一切しないし、あの時の選択肢はたった一つしかなかった。でも、それとこれとは話が違うのだ。鈴が子供を庇ったことの正しさと、ハルが鈴たちを庇って負ってしまった怪我の責任の重さは、全く別の話なのだ。悔いのない行動をしたという誇らしさで、彼の痛みが癒えるわけではない。まして、この罪悪感が薄れるわけもなかった。

「ごめん、ごめんねハルちゃん・・・！痛いよね、本当にごめんなさい・・・！」

耐え切れず、鈴は頬を濡らした。この涙は、十日前よりもみっと

もない涙だと思った。自分に対しての情けなさから流れる涙だ。泣き虫だと思われるのも悔しかった。子供っぽくて、何も出来なくて、ハルに庇護されたり怪我を隠されたりするだけの、彼と対等でない自分を殊更思い知ってしまう。こんなだから、きっと彼は“痛い”とさえ自分の前では口にしないのだろう。怪我を負わされてなお、柔らかく微笑んで頭を撫でてくるのだ。そして正直に言わず、煙に巻くようにはぐらかすのだ。

うじうじと自己嫌悪に陥ることだに、ハルとは全く違う。こんなに違う。鈴はハルみたいに、平静を保ってなどいられない。穏やかに微笑んでなどいられない。

「鈴ちゃん、私が男だってこと、忘れてない？」

「・・・え・・・・・・？」

不意に頭上から声がかかる。鈴はつられるように上を向いた。

「見た目が女っぽいから変に気ぃ遣ってんでしょう。何度も言うけど、私は男よ？鈴ちゃんみたいな可愛くてか弱い女の子と一緒にされちゃあ困るわ。女の子を庇って怪我したんなら、それは男にしてみれば勲章よ。確かに、そうやって私のために取り乱して泣いてくれるのも嬉しいけど、反面、外見以上に女扱いされてるみたいで複雑だわ」

笑みを深め、ハルはそう言った。どこまでも優しさの篭った眼差しが鈴に注がれる。

「・・・・・・・・・ハル、」

じっと見つめた先にある瞳が、佇む自身の姿を映していた。

小さなちいさな、自身の姿だった。

・・・違う。違うのだ。ハルが女でも男でも、鈴の罪悪感の本質はそこにはない。鈴が怪我をした彼に対してこれほど動揺しているのは、ハルがハルだからである。初めて会ったその日に、鈴を窮地から救ってくれた、粟飯原春季という人だから。あの晩、心の拠り所となってくれた恩人だからである。もしも負傷させたのが初対面の赤の他人だったとしても、それはそれは申し訳なく思うだろう。これは間違いないけれど、だけど。鈴は頭(かぶり)を振る。

鈴にとって、ここ数日最も頭の中を占めていたハルでなければ、きっとこんなに心苦しくはなかった。

――なのに、ハルが女か男かということなど鈴は大して問題にしていないと、分かっていて。

彼は、自分は男だから気にするなと、敢えて言ってくれるのである。鈴が、納得して落ち着くように。

適わない、と思った。

暫し呆然とした後、鈴は最後の一粒をころりと頬に伝わせて、俯く。全く、お笑い種だ。諦めるしかない。ハルにとって、自分はこんなにもちっぽけで、浅くて、稚いのだ。どうしたって変わらない事実に、足元がぐらつく。

「そだね・・・へへ、そうかも」

鈴は目線を合わせず、涙を拭った。

「でも、怪我はね、人として心配するのは当然だよ」

だから、と続ける。

「病院だけは、行こう?」

子供の我が儘と思って付き合ってほしい。そう駄々をこねるように縋れば、ハルは最終的にこくりと、頷いてくれた。

## ＊逢いたい（8）

しかしてハルの右腕は見事に骨を折っていたのである。

前腕骨下端部骨折、という漢字を適当に羅列したかのような骨折の名を教えられたが、鈴にはオウム返しに言うことすら難題であったので、“ただの”骨折と捉えることにした。

いや、決して“ただの骨折”なのではないのだけれども、名称ごときに頭を悩ませているわけにはいかないのである。

そう、骨折なのだ。鈴は、やっぱりか、と思ったと同時に、当たってほしくない予想が当たってしまって酷く落ち込んだ。そうなのではと嫌な予感がしていたので驚きはしなかったものの、逆に思い違いであってくれという願いは呆気なく裏切られたのだ。

整形外科の担当医によると、整復した状態で全治四週間とのこと。四週間、である。日数に換算すると二十八日である。要するに一月弱だ。それだけあれば晩夏から初秋へと季節も変わっている。その断じて短くはない期間、ハルは右腕を固定されたままの、不自由な生活を強いられてしまうのだ。

鈴はくらりと軽く眩暈を覚えながら、ただひたすら淡々と医師から説明されたことを話すハルに、耳を傾けていた。

「――――と、言うわけだから。ほんの少し“コレ”つけていれば、そのうち勝手に治ってるってことね」

ハルはそうあっけらかんと言い放って、かちかちに固められた右腕を左手の甲で叩いた。明るく、至って何の悩みも問題もないとでもいうかのように、にこりと微笑む。

だが四週間は“ほんの少し”ではないし、骨折は“勝手に治る”ほど軽い怪我ではない。ハルとて分かっているに違いないのに、楽観的に振舞っているのである。鈴はまたも文句を言いたくなった。

けれどぐっと言葉を呑み、押し黙る。ハルの右腕には、痛々しくも真っ白いギプスが巻かれていた。

病院を出て、向かう先はハルの自宅。自分を送っていくとのたまった彼に、鈴は驚き呆れ、とんでもない、送るのはこちらの方だと言い返した。そして渋るハルに有無を言わさず、強引に彼の家までの道を辿りはじめたのである。

「なーんか、立場逆転、みたいな?強気な鈴ちゃんに甲斐甲斐しく世話されるのもいいかも」
「・・・・・・」

軽口を叩くハルが、半歩先を歩いている鈴を覗き込む。存外嬉しげなその様子に、鈴は微妙な心境だ。

“自分の立場、分かってるのかな”

そう思わずにはいられない。
鈴のせいで骨折させられて、今日から不便な日々が始まるというのに。責めるどころか、にこにこと嬉しそうなのだ。
やはりハルは鈴を思い切り子ども扱いしていた。どうせぴいぴいと直ぐ泣く意気地なしの餓鬼だと思われているのだろう。反論できないだけに、鈴は口を尖らせて、せめてもの誓いを立てるのである。

情けなく泣くのはもうたくさんだ。もうハルの前で、めそめそうじうじと泣いたりしない。
そうして、より強かな女になるのだ、と。

「でもね、私は本当に、鈴ちゃんにまた会えてよかったって思ってるのよ」

「・・・・・・え？」

矢庭にハルがしみじみと語りだしたので、鈴は振り返った。

「せっかくこうして知り合えたのに、あの別れた日以来、もう会えないのかなーって、残念に思ってたから。だって勿体ないでしょう？友達になれたと思ったら、翌日にはさよならなんて」

「・・・え、とっ、友達っ？私、ハルちゃんと友達だったの！？」

意外なことを耳にして仰天する鈴に、ハルは顔をしかめる。思いもよらぬ問いかけを受け、いたく不愉快そうである。

鈴もあっと失言に気付いたが、後の祭り。

「薄情なこと言ってくれるわ、鈴ちゃんたら！私ってこう見えて心は打たれ弱いんだからね！じゃあ何？友達だと思ってたのは私だけってこと！？」

「ごっ、ごごごめ・・・！そうじゃなくて、友達だって思ってくれて勿論嬉しいけどっ」

慌てて否定した鈴に冷や汗が伝う。誤解されるのは本意ではない。ハルに友人だと思ってもらえていたのなら、それは嬉しいに決まっている。鈴自身はそうありたいなと願いながら、きっとハルにとっては知り合い程度なのだろうと諦め半分に思っていたから。

当然のように友達だと言ってくれた彼に、鈴のささくれ立っていた心がふわりと和らいだ。

「嬉しいよ！友達って、思ってもらえて、すごく嬉しい・・・」

鈴は破顔した。子ども扱いされようとも、友と呼べるほど親しく思ってくれたことは純粋に喜びであった。

どうやら彼とは、自分で決め付けていたような薄っぺらい関係ではないようだ。
にまにまと正直に緩む頬が、単純だとは分かっていても、抑えきれない。

「・・・ふふん、可愛いーの。鈴ちゃんてば」

ハルは自由の利く左手で、鈴の頭を撫でた。わしわしとされ絡まった髪の毛も、長い指が梳いてくれる。心地よさげに委ねて、鈴は呟く。

「なんかハルちゃんって・・・」
「ん？」
「お母さんみたい」
「お、おかあさん!?・・・そ、それは、せめてお父さんにしてほしいわ」
「えーでも、そんなに綺麗なんだから、当然お母さんだよ。・・・いや、それともお姉ちゃんかな」
「母に姉かぁ、どうあっても“女”が優先されるのね・・・」
「そりゃあねー」

鈴はハルを振り向いて笑った。この日初めての、ハルに向けた微笑みだったと、本人は自覚などしていなかったけれど。
それを眩しそうに目を細め、ハルが見つめる。

「うん、やっぱり、鈴ちゃんには笑顔が一番似合うわ。笑った顔が一番可愛い」
「・・・な、何を言い出すの突然」

唐突な物言いが、鈴を戸惑わせた。親が子を慈しむような、ある

いは恋人を愛おしむような視線に、にわかに挙動が不審になる。心落ち着かぬ様子を悟られないように、鈴は歩幅を広げ歩む速度を上げた。ハルに背を向け、顔に熱が集まるのを隠す。

「や、だなぁもう！ハルちゃんみたいな美人に、可愛いなんて言われたって、ほんと説得力ないんだから！も、もしかして嫌味？だったら言われなくても自覚してるんだからね？私なんか、顔は平均だし、チビだし、寸胴で胸だってＡカッ――――・・・ってわあぁぁっ！！な、なんでもない！！今のはなんでもないからっ！！」

一人であたふたとする鈴は、照れ隠しで精一杯で全く気が付いていなかった。歩を早めて数歩はハルと離れたと思っていたのが、実は真後ろにまで接近されていたことを。

ふわ、と彼の甘い香りが鼻腔に届いたかと思うと、片手をそっと握られる。不思議に背後を振り返った鈴を、至近距離からハルが見下ろしていた。

「・・・！」

「ね、鈴ちゃん」

「なっ、ななな、んな、なっなに！？」

「あのね、お母さんやお姉ちゃんもいいかもしれないけどね」

円い悪戯っぽい瞳が、鈴をその場に縫いとめる。形のよい、女性にしては薄い口を、続けてハルは開いた。

「例えば、恋人同士でもこうやってくっ付いたり、“可愛い”って口説いたりするんだからね？」

鼓膜を震わせる彼の声は、そこはかとなく甘やかで、鈴が知るよりも少しだけ低かった。

それが耳に鮮烈だったのだ。
鈴はめっきり、声が出なくなってしまった。

## ＊逢いたい（9）

恐ろしく彼の外見に似合う流し目で、ハルがそのようなことを言い放つのが悪いのである。予期せぬ台詞に、鈴は彼の自宅までの道のりを、足が地に着く感覚もないままぼうっと辿っていた。「着いたわよー」と暢気に知らせる真横の男性の男性らしからぬ柔らかな声で、ようやっと我に返ったのだ。

利き腕が使えないにも拘わらず、苦もなく部屋の鍵を開けると、鈴を中へ入るように促すハル。ぎくしゃくとしつつ、鈴は従い、二度目の粟飯原宅への訪問を果たしたのだった。

「鈴ちゃんがこうしてまたうちに来るなんて、感慨深いわねえ。この前のこと思い出すわ」

奥の部屋にて、冷たいドリンクを振舞われた鈴。

暑苦しそうに髪を纏めあげ、オリーブの薄いミリタリーシャツの袖を、ぞんざいに捲くり直すハルが視線の先に佇む。しかし、そこはやはり片手となると難しいようで、彼はむっと眉間に皺を寄せると溜め息を吐き、観念したようにぶらりと腕を下げたのである。

一連の様子を見守っていた鈴は、遠慮がちに申し出た。

「あの、私が手伝おっか？」

きょとん、と間の抜けた表情をした後、ハルが頬を緩ませて頼む。

「じゃあ、お願いできる？」

鈴はハルへ近寄り、差し出された腕の袖を丁寧に折って捲り上げた。ロールアップ用のボタンを留めて露出の増えた彼の腕は、やはり肌にシミ一つなくて。男性的な体毛も見当たらなかった。そういう体質なのだろう、と鈴は思う。けれど確かに、女性のふっくらとした丸みはない。よく観察すれば、引き締まった筋肉がしなやかに彼の腕を形成しているのが分かる。かといって男性らしい腕かどうかと問われると、また異なる。ハルらしい・・・実に中性的である、としか言いようがない腕だ。

“自分はこの腕に抱き上げられたり、抱き締められたりしたのだろうか”。

ふと思ったことに、鈴は体温を上昇させた。思い出すのは記憶だけではなく、感触や温もりさえも伴うから厄介だ。あの時はハルが男性と知らなかったのだから仕方のないことだが、今は違う。どうにも意識してしまう。紅潮した頬を見抜かれぬよう、そっと横の髪で覆い、手元はてきぱきと動かした。

「・・・はい、完成！これでいい？」

「うん、ありがとう。助かったわ」

にこりと微笑みあう二人。鈴の内心は非常に心許なげで、そわそわと居心地の悪さを覚えていたものの、間近の整った顔立ちに早まる動悸をなんとか抑えることに成功していた。

帰路の途中での謎めいた発言のせいだ、と物申したかったのは山々、であるが。

鈴は人知れず吐息をついた。

全く、と悪態をつきたくもなる。ハルの今の平然とした様子を見る限り、おおかたあの言葉に大して意味などないのだ、と実感した。

どうせ自分をからかってのことだろう。頬を摘んで遊ぶことと同じなのである。その延長線上に、ああして意地悪くからかってこちらの反応を楽しんでいるのだ。

そうだ、そうに違いない。鈴はそのように思って片付けようとした。狼狽も露な、幼気な子供の反応で遊ぶ大人のすることである。間違っても真に受けて胸高鳴らせてはならない。あらぬ期待を寄せて、あっさりと掌を返されてはこちらが傷付くのである――と、そこまで考えて。

「・・・・・・」

“・・・いやいや！期待を寄せるって何！胸も高鳴ってないから！ただびっくりしただけだから！”

鈴は靄を払うかのように、心に浮かんだ言葉を打ち消した。危うく雰囲気に流されるところである。自分はハルに対して恋心の“こ”の字も抱いてなどいない。そんな自覚などしていないのだ。言い聞かせ、不幸な片思いへ真っ逆さまに転落しかけた、己（おの）が流され易い気持ちを叱咤した。違うのである。決して、よこしまな、フシダラな気持ちは、絶対に。

「鈴ちゃん？どうかした？」

「へっ？あっ、ううん、違うからね！ほんとに、ただびっくりしただけなんだから！」

「はい？」

「いやいやなんでもないなんでも」と鈴は口を塞ぐ。

ハルはそんな鈴に首を傾げた。慌てたように視線をさ迷わせる鈴が何やらもごもごと言っているのを、じいっと見つめているのだ。

見られれば見られるほど挙動が怪しくなるのは鈴で、斜め上から

の視線にますます動作が強張る。体は正直にも、冷房が効き始めた室内で、じわりと汗を滲ませるのである。

「・・・ふぅん」

と、静寂な空間に落ちる、それ。

「・・・・・・！？」

何やら意味深な相槌が聞こえてきたのは、気のせいだろうか。びくりと肩を揺らして硬直した鈴は、壊れたブリキ人形のように首を動かす。見たくはなかったけれど、見なければ尚更恐ろしいことになりそうな気がして、目線を上にあげた。

鈴がそちらを見上げるのを待ち構えていたかのように、泰然と見据える黒目勝ちの双眸。やや顎を引いて顔を傾けていたハルは、たおやかな美貌に色香を漂わせ、すこぶる満悦そうな含み笑いを覗かせていたのである。

「・・・！！」

それは、心の奥底までをも躊躇いなく洞察しようとする、漆黒の瞳で。

胸の高鳴りを通り越して、もはや寒気すら覚えてしまいそうな佇まいだった。首から上は熱くなるのに、背筋が冷たく凍るのは何故だ。鈴は中途半端に開いた口の端をひくりとさせ、本能的に逃避を図ろうと腰を引いた。

しかし人間とは奇妙なもので。言葉にせずともそうした意図は空気を伝って相手に届くのである。不幸にも鈴はポーカーフェイスなどという高度な技は身につけていなかったため、心の内に考えてい

ることも忠実に顔色へ表れていた。

図ろうとした逃避など行動へ移す前に幕引きである。

ハルの左手は明確な意思を持って鈴の腰を捕らえた。びく、と再度わななく鈴は見開いた眼を逸らせぬまま、蛇に睨まれた蛙のように動けなくなる。逆行して、異様に心拍数は跳ね上がるのだ。

腰に添えられた手が背筋の窪みに指を落ち着け、そしてつと撫で上げた。くすぐったさと、その何倍もの羞恥を感じて鈴は赤面する。鳥肌である。未知の感覚が全身に巡って頭に混乱をきたした。

ハルの整復したてのギプスよりも、今や遥かに真っ白なのは鈴の脳内だ。

「やっぱり、可愛い」

彼はそう言う。鈴の瞳から目を離さず、纏う艶やかさとはかけ離れた無垢な声色で。今まで聞いてきた「可愛い」とは違う、大人から子供に対するそれではない声色で。同じ言葉なのにからかいを込めていること以外は共通点など見当たらない。けれども今まで以上に、本音に近いような気がして、訳が分からなくて。

「・・・私が、怖い？」

「・・・・・・え・・・？」

問われた言葉が、何を指しているのかは不明だった。鈴には喉を震わせて、掠れた声を出すのが限界で。

ハルの微笑みは甘く柔らかく、決して鈴を怖がらせようとしているのではないことは一目瞭然であった。ただ、初めて目の当たりにする底の見えない大人っぽい仕草や表情に、見知ったハルがまるで別人のように感じたのである。後に鈴はそう解釈するのだが、この

時はまだ混乱の只中。

押し黙る鈴。見惚れるほどの笑顔を一段と深め、ハルの腕が体を静かに解放する。呪縛のようだった緩やかな抱擁から自由になった鈴は、そこで難を逃れたかのごとく、ぱっと下を向いた。目まぐるしく交錯する感情という感情を胸に抱え、どう反応すればよいのか途方に暮れる。

「ね？私もちゃんと男でしょ？」

すらりとした背を屈めて、鈴の顔を覗き込むハルは言った。それに何と答えるべきなのか肯定も否定も叶わずに、真一文字に結んだ口に力を込める。心臓の音が彼にも聞こえてしまいそうで、十歩でも百歩でも距離を取りたい思いに駆られながら、だが頑として足は従わないのだ。鈴は自分の意志の弱さを嘆いた。もうハルの前では涙など見せないと誓ったばかりの矢先に、こうして落涙ぎりぎりまで瞳を潤ませているのだから。

そして、とどめであった。

ハルの視点がふと僅かに下方へ移動し、長い睫が下瞼に翳りをつくる。まともな一言さえ口に出来ない鈴が、漫然とその様子を眺めていると、再び交わる目と目。

緊張を走らせる十歳年下の少女を変わらず柔和な微笑で見つめたハルは、彼女の林檎のような頬を、怯えさせぬようにやんわりと包み込んだ。

「――――・・・、」

一瞬とも数分ともつかぬ時間の長さ。

触れられた頬とは反対の左頬に覚えた温もりが、張り詰めた鈴の心の琴線を優しくかき鳴らす。

ちゅ、と小さく音を立てて、ゆっくりと離れていったハルは、たった今鈴のそこにキスを落としたその唇で、告げるのだった。

「ばいばい、鈴ちゃん」

二度目に出会って、最初の別れの言葉だった。何故なのかは分からない。けれども鈴は、彼の「ばいばい」に、たった一度、頷くことしか、できなかったのである。

後悔先に立たず。

そこから高校一年生・尾本鈴の、長くも短い夏休み最後の一週間が始まる。

## ＊逢いたい（１０）

『あっはっはっはっは！！それで大人しく引き下がって、のこのこ帰ってきたの？あっはっはっは！！バーカ！鈴のバーカ！意気地なし！』

ばふっ！

力いっぱい投げつけた。ベッドの上なので問題ない。

肩を上下させ、今しがた八つ当たりした“それ”を見下ろす鈴は鼻息荒く言う。

「うるさいっ！詩織ちゃんこそ、この人でなしいっ！」

『ちょっと今投げたでしょ！ひどくね！？暴力的な女は嫌われるぞ鈴！』

「どっちがひどいの！こんなに私が悩んでるのに、笑うなんて！もう！」

受話器の向こうから、抗議の声が小さく聞こえた。まったく無神経な友人である。人の悩みを茶化して、あまつさえバカと貶すとはなんたることか。意気地なしとはなんたる物言いか。むくれて子機を持ち上げる鈴は、詩織の陽気な揶揄に反論した。

「わ、私だって何が何だか分かんないうちに帰ってたの！今も混乱中なの！もっと親身になってくれたっていいじゃんっ！」

けらけらけら。鈴の言い分など意に介さない笑い声がなおも耳に届く。「詩織ちゃん！」と鬱憤の溜まった鈴の一声を無視し、一頻り気の済むまで笑いつくすと、その余韻を残しながらも詩織は話し

た。

『混乱中つったってさ、たかが“ほっぺにチュウ”くらいで？そんなの挨拶でするような国だってごまんとあるのに』

「ここは日本だよ！挨拶でそんなことはしませんっ」

『おうおう、若いのに古臭いね。・・・で？挨拶じゃないキスを頬にされて、いっぱいいっぱいになって帰って来ちゃったってか。まともに会話もしないで？こりゃ傑作だわ！』

「・・・う、ううう五月蝿いなぁっ！」

鈴は電話の向こうの詩織にしどろもどろとなった。

釈明の余地はないので、それも已む無し。居た堪れずもぞもぞと体を揺らす。

あおーん、という近所の飼い犬の遠吠えが辺りに木霊し、霧散した。

――時刻は午後九時過ぎ、鈴が何も手をつけられない状態のまま丸一日以上経ち、既に翌日の夜である。

場所は住宅地の一角、尾本家の二階。

淡い色合いで統一された鈴の部屋では、鈴と、「田舎の祖父ちゃん家行ってくるから！」と言って地元を離れた詩織との電話が繋がっていた。

言うまでもなく、鈴から発信ボタンを押したのである。

ハルとのことを一番気にかけていた――面白がっていたとも言えるが――詩織を当てに、鈴は諸々の事情を語ってどうにか気を落ち着けようと苦心惨憺（くしんさんたん）していたのだ。

冷やかしを受けることは分かっていたが、一人自室で悶々とするよりは幾らもましだと判断した・・・のが間違いか。

予想の斜め上をいく詩織の爆笑を耳にし、つい通話中の子機をベッドに叩き付けてしまった鈴。自己弁護をするなら、現在、精神的なゆとりというものに欠けているため、日頃に比べ多少振る舞いが手荒になっている、と言えなくもない。

誰に見られることもなく火照った顔は、彼女の余裕のなさを表している。

鈴はぐっと痞える喉で言葉を飲み込み、持ち手を右から左へ移して足を崩した。

「だ・・・だから、いきなりで、びっくりして・・・どういう意味なのか分からなくて・・・」

『本人に直接聞けばいいじゃん』

「それが出来ないから困ってるんだよっ！」

そう言うと、はあー、と聞こえよがしな溜め息が返ってくる。

『・・・ったく、瑠香が言ってたこと思い出すよ』

「へ？」

『“菓子ばっか食ってるお子様”ってこの前言ってたでしょ。ありゃ的を射てたね』

「お子様で悪かったね！これでも必死なの！」

『けっ』と、詩織は悪態をついた。むう、唸る鈴は二の句が継げない。もしも今目の前に彼女がいたなら、ぽかぽかと殴り倒すことも吝(やぶさ)かではなかっただろう。ハルならともかく、同年代の友人にまで子供扱いされるのは嫌なのである。

手持ち無沙汰な片手をそわそわと動かし、目に留まったのは小さなテーブルの上に放られていたスナック菓子。無意識に腕が伸びかけ、はっとしてとどまる。“菓子ばっか食ってる”と言われた傍か

ら食べていては、立つ瀬がないではないか。一人気まずくなった鈴は、風呂上りでシャンプーの香り漂う髪をくしゃりと掴んだ。コシのない柔らかなそれはあっという間にぺたんこであるが、生まれもったものなので如何ともしがたく。

目の回るような一日だったせいか、一晩経っても疲れが長引いていた。甘いものを欲するのも無理ないことと大目に見てもらいたいのである。確かに最近は不摂生でだらだらとした日々が多かったけれど、それが急に転じて昨日のような気忙しい日になると誰が想像しようか。ただ父の会社に弁当を届けに行くつもりが、子供を庇い、寿命が縮んだかと思えばハルに再会し、ケガなく一件落着かと思えば彼が骨折していて、おまけにキスされたのである。・・・頬に、ではあるが。

鈴は改めて振り返った怒涛の日に首を傾げた。なんでこんなことに？と疑問が浮かぶ。特にハルと病院を出て以降のことだ。思いもよらぬハルの言動に、鈴は一貫して動揺しっぱなしであった。こんな筈ではない。鈴の予想では、もっと和やかな再会になる筈だったのだ。いや、そもそもは再会するとも考えていなかった。それを含めれば、昨日だけで一体何度驚かされたことか。心臓がいくつあっても足りない。

ハルの笑顔が蘇る。喋ることも儘ならなかった癖に、記憶だけは鮮明で。彼の表情も、甘い香りも、そして触れられた感触も。全て覚えているのである。

思い出し、赤面する。その繰り返しであった。日付が変わろうとも同じである。考えても考えても分からない。行き着く先の謎はただ一つ。

ハルはどういうつもりで、自分にあんなことをしたのだろう。それだけだった。

したがって見出せない答えを求めて、友人の詩織に電話をかけたのである。

『だから、挨拶じゃないの？』

「ちっ違う・・・と、思う、けど・・・あれ？」

鈴は段々とこんがらがってしまう。困惑する声をまた詩織に笑われたが、そう言われれば直後に「ばいばい、鈴ちゃん」とハルが付け足すように言っていたのだ。ならばあのキスは挨拶だったのだろうか。ここは日本なのだけれど。挨拶でキスやハグをする習慣はないのだけれど。単なる挨拶、だったのだろうか。もしかして。

『ばーか。だから鈴はお子様って言われるんだよ』

納得しかけた鈴に、呆れた声がかかる。

「な、またバカとかお子様とか！なんなの！」

『あたしの言葉ばっかり鵜呑みにしないで、ちゃんと自分で考えなよ。それじゃあ周りにただ振り回されるだけだぞー』

「そっ、そうだけど・・・自分じゃよく分かんなくて」

二度目の、はあー、という溜め息が耳を擽った。

『ちゅーされて、何で逃げたのかね。そこで“好き”の一言でも言っときゃ、後になってそんな悶々とすることもなかったんじゃないの』

詩織の言葉に、目を円くした鈴。ぼっと火がついたように赤らめた顔で言った。

「すっ・・・！好きとか、詩織ちゃんってばまた・・・！違うもん！私はそんなんじゃないんだってば！」

『・・・はー？あんたまだそんなコト言ってんの？どんだけ無自覚なんだ』

僅かに苛立ったような応えが、鈴を慌てさせる。どうして責められねばならない。鈴は思った。今は“そういう”話をしているのではなくて。ただ昨日あったことを彼女に知らせただけなのに。何故に“好き”がどうのこうのと話題が変わるのか。加えて無自覚とは何だ。そう言い返したくとも、上手く出てこない言葉がもどかしく。

尻すぼみに「だって」だの「そんな」だのと口を濁せば、堪りかねんとばかりに怒声が聞こえた。

『ああもうっ！鈴！お前は思春期に目覚めた小学生か！』

「しょっ・・・！？」

子供扱いの次は、小学生扱いであった。そして鈴の絶句をさらりと流し、彼女の友人は言い募る。

『煮え切らないなぁっ！あたしゃね、今あんたが顔真っ赤にしてることくらい、見なくても分かんの！それがハルって人のせいだってことも、お見通しなの！そんであんたが、図星を言い当てられてムキになる性格だってことも、長年つるんでるあたしゃ知ってんの！』

「・・・・・・・・・！！」

ぱくぱくと、鯉の口を体現する鈴である。

『教えてあげる。こないだ図書館でそうやって否定してた時も、あんたの顔はよーく熟れた林檎みたいだったよ。だからあたしも調子に乗って色々しゃしゃり出たのよ。本当に鈴がその人に気がないなら、最初から何も言わないから。あんた、あたしを一体誰の友達だと思ってんの？』

「え、えぇっ、ちょ」

『“あんた”の友達でしょーが。あたしはそのハルって人は会ったことすらないのにさ。誤解しないでよ。いくらあたしでも、面白そうだからって理由だけで、痴漢に遭ったばかりの友達に信用できない男をけしかけたりするわけないでしょ！い、いい加減、自分が自分の気持ちに鈍感なことくらい分かれっ！この色ボケ鈴！』

ぶち！

・・・と聞こえたかと思えば、通話終了を知らせるツー、ツーという音。呆然と口を挟めぬまま座る鈴に詩織は一気に捲くし立てると、最後は照れを覗かせる声の調子で罵って、一方的に電話を切ったのである。

「・・・・・・・・・」

目を瞬かせて、鈴は暫くの間掌の子機を見つめていた。

ぽかん。開いた口が、詩織の不器用な後押しに綻んだのは、それから数分後のことであった。

## ＊逢いたい（１１）

すき【好き】
（名・形動）［文］ナリ
1，心がひかれること。気に入ること。また、そのさま。「―な人」「―な道に進む」⇔嫌い。

ふむ。
頬杖をついて、液晶画面に表示された意味と用法を読んでみる。
“心がひかれる”か否か？・・・答えは是である。“気に入る”か否か？・・・答えは是である。
対義語が“嫌い”ならば、好きか嫌いかで問われれば好きに決まっている。どこに嫌う要素があるだろうか。確かに、好きかと言えば、好きなのである。

「・・・それじゃあ、ハルちゃんは、私の“好きな人”？」

鈴は机に向かい、ぽつりと呟いた。手元にあるのは、某大手家電メーカー製の安物電子辞書。読解途中の英文法問題集。広げられた参考テキスト。転がる消しゴムと、その滓。
唇に軽く銜えていたシャープペンシルを右手に持ち直し、新たに語句を検索する。

こい〔こひ〕【恋】
1，異性に強くひかれ、会いたい、ひとりじめにしたい、一緒になりたいと思う気持ち。恋愛。「―に落ちる」「―に破れる」

「――――・・・・・」

かあ、と耳に熱を感じた。
駄目だ。ふるふると首を振って、頭の中の霞を払う。電源を切って画面を閉じると、その上に倒れ伏せた。横を向き、ぼんやり見据える先には、クリーニング店から戻ってきた浴衣が、ハンガーに掛けっぱなしになっている。母にきちんと畳んで仕舞うように言われていたのを、すっかり忘れていた。
鈴は頬に伝わる電子辞書のひんやりとした冷たさに目を閉じ、息をついた。指先を転がり落ちるシャープペンシルが、水滴を纏ったグラスにぶつかって止まる。中では、清涼飲料水の炭酸が気泡をつくって上り、歪な形に溶けた氷が浮かんでいた。

「・・・好き。詩織ちゃんの言うとおり、ハルちゃんのことは好きだよ。でも、」

でも。
鈴はそこで立ち止まる。

「恋って、よく分からない。こんなに・・・こんなに変な感じなの？」

誰もいない部屋で、自問自答した。答えはどこからも返ってこない。
うつ伏せて堂々巡りの頭を抱える。「うー」と溜まるフラストレーションが低い声で発散されるも、解決の糸口にさえならないのだ。
やはり自分は、詩織が言ったようにバカなのだろうか。それほどに子供なのだろうか。

「だって、恋って、“会いたい”って思うものなんでしょう・・・？」

閉じたばかりの画面に表示されていた文章。“会いたい”、“ひとりじめしたい”・・・“一緒になりたい”。
鈴にはそれが分からないのである。

「おかしいよ。・・・だって、私いま、ハルちゃんに会いたいなんて、思えてない」

眉根を寄せ、不可解さに戸惑う鈴。思えない。ハルに会いたいとは、今、不思議と思えないのである。ひとりじめしたい、一緒になりたいなど、なお更だ。

「もしも・・・」

もしも恋というものが、会いたいと思うことなら。

鈴は視線を下げて物憂げな顔になる。

ハルに会いたいと思っていない自分は、ハルへの恋心など抱いていないのではないのだろうか。

恋慕の“好き”では、ないのだと。
鈴はそこで立ち止まってしまうのだ。

カレンダーの日付は、八月二十六日。残る課題をそろそろ消化すべき頃。しかし机の上に広げた課題とその道具一式は、早々にして鈴の悩み事に取って代わられた。

「やっぱり、分かんないよ」

自力で解こうとしている問題は、未だ一つとして正解を得ないま

ま。

自分の気持ちが、迷路の中を泳いでいる。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

ハルが何を意図して鈴にあんなことをしたのか。最早それは二の次の謎になっていた。仮定として、本当に挨拶だったとか、あるいは悪戯の一種だったと妥当な予想をすることはできるのだ。

それよりも。更に謎であるのは、自分自身の気持ちだった。詩織との電話を経て、鈴はハルへの気持ちをよく考えてみることにしたのだが、分からない。「ちゃんと自分で考えろ」との彼女の言葉に従って、こうして沈思黙考しているのだが、どうしても分からないのである。

恋とは何なのだろう。どういう“好き”が、恋なのだろう。自分は彼に恋しているのだろうか。

鈴は自身に起こっている変化に当惑していた。

初めて彼に会って別れた時の気持ちと、二度目に会って別れた時のそれとでは、異なる部分があったのだ。

「お姉ちゃん。出掛けてるお母さんから、“雨が降ってきたから、洗濯物取り込んどいて”ってさ」

「はぁーい」

杏の託(ことづ)けを受け、鈴はソファーから立ち上がった。ぱたぱたと小走りで雨戸まで駆け寄ると、スリッパを脱いで、アルミの濡れ縁に下りる。

物干し竿に掛けられた衣類をハンガーごとまとめて外し、バランスを崩しつつも、傍のピンチハンガーに手を伸ばした。

「はい、貸して」
「杏っ、助かるー」

部活から帰宅直後、着替えを終え、鈴の後方に待機していた杏が衣類を受け取る。鈴は半分を妹に渡し、部屋の中へと戻った。
小雨にやや湿り気を帯びたそれらを、室内物干し竿に掛け終えると、外の雨音が徐々に強くなっていった。

「あー、マジでつっかれた」
「お疲れー。毎日よくやるよね、部活ばっかり」
「そういうお姉ちゃんは、毎日何もしてないのに、私より“不健康な”顔してる」

背伸びをし、ちらりと振り返る杏。
鈴は虚をつかれたように固まり、瞠目した。

「え・・・そう？全然、体調は悪くないけど・・・ぐうたらしてるせいかな」
「・・・・・・知らない。言ってみただけだし、私の気のせいかも」

「そ、そっか・・・」と曖昧に返事をする鈴を、杏はじろりと見つめた。中学二年ではあれど、鋭い視線は大人顔負けだ。妹にたじろぐ鈴は、くるりと踵を返す。

「じゃ、じゃあ私は二階に行くかな！課題も残ってることだし――」
「お姉ちゃん、頼みがあるんだけど」
「・・・・・・え？」

短く発した妹の、つんけんとした声だった。立ち止まった鈴が再び顔を向けると、険しさが仄か和らいだ杏の眼差しが向けられていた。

「・・・杏？」

鈴は驚いて、名前を呼んだ。「頼みがある」とは、滅多に聞かぬことだったからだ。

「頼みって？」

「私、夏休みは毎日、部活ばっかりで疲れてるんだよね」

「うん・・・？」

「少しは遊びたいの。明日は予定が空いてるから、どっか行きたい」

「私と？」

「一人じゃつまんないし、友達とは学校で散々会ってるから嫌なの。お姉ちゃんとなら、まあ、まだマシだから」

「は、はあ・・・」

杏は、「そういうことだから、どこ行くか考えといて」と会話を切り上げる。鈴の目の前を横切って、二階への階段を上っていった。

「杏はどこか行きたい所ないのーっ？」

姿を奥に消した妹は、その鈴への問いかけには応答しなかった。立ち尽くす鈴は一人、「うぅん・・・？」と困り顔で階段の上を見つめているだけ。

「明日、天気は良かったっけ・・・？」

降水確率八十パーセント、低気圧が上空を通り過ぎている今日は、八月二十七日。残る課題は、明日はとりあえず保留である。

## ＊逢いたい（１２）

一度目と二度目で、心に残る感情は違っていた。
今はあの時とは、正反対だ。

胸に沈んだものを抱え、窓際の席に座る鈴は、レールを走る私鉄に揺られながら思う。

――浩信の車で自宅まで送り届けてもらった、あの朝。
降車する瞬間、鈴は彼らとの、ハルとの別れを惜しむ気持ちでいっぱいになっていた。これでさよならなのだと思うと、寂しくて仕方なかった。共に過ごしたのはたった一晩で、半日にも満たぬ一刹那の出来事だったというのに。可能か不可能かは別として、“離れがたい、もっと一緒にいたい”と思ったのは事実である。そして実際、以後は寂しさからか空虚な日々が続いた。物質的には平穏でも、精神的にどこか満たされない面があった。その穴を埋めるように、ハルのことを思い出しては、無為な生活を送った。会えることはないと諦めながら、会いたいという気持ちが、言葉にせずともあったのである。

対比するのは二度目に会って、ハルの家を出た時だ。逃げるようにあの場を離れた自分に、彼に対する惜別の思いなどあっただろうか。その瞬間から継続する今、現在までに、ハルに会いたいと、会えなくて寂しいという思いを抱いただろうか。・・・鈴は心中で否と答えた。会いたいと、思わなかった。会いたいと、思っていない。一度目に別れた時は確かに感じていた寂しさが、まるで霞に覆われてしまったかのように、今は感じられないのだ。前回なくて今回あるものといえば、怪我を負った彼に対する心配と後ろめたさ。片腕

の動きを制限されている状況を顧みれば、日常生活は大丈夫だろうかという不安は尽きなかった。――でも、それでも。

心配だからという気持ちが、会いたいという気持ちには変化しないのである。

身勝手で、ハルよりも自分の感情を優先させていることに鈴は酷く罪悪感を覚えた。無力な自分が彼にしてやれることなど殆どないかもしれないが、ハルの怪我は自分が負わせたようなものだ。なのに病院に付き添っただけで、翌日から一度とて見舞いに行かずほったらかし、どころか会いたいと思わないなどとは。

この鈴の心境を彼が知ったら、きっと幻滅されてしまうだろう。なんて恩知らずだと、二度も助けたことを後悔するかもしれない。

知られたくなかった。会いに行って、あの優しい眼差しが、侮蔑のそれに変わっていたら・・・そう思うと身が竦んでしまう。

・・・考えすぎなのだろうか。

“・・・・・・ううん、違う。会いたいと思えない本当の理由は、そうじゃない”

鈴は瞼を閉じた。固く結んだ唇に力を込めて、膝上に拳をきゅっと握った。

「・・・お姉ちゃん?具合悪いの?」

正面の席から、抑揚のない声がかかる。耳慣れた声に、家族だからこそ察することのできる気遣いを感じ取り、鈴ははっと顔を上げた。

「あー・・・ううん、なんでもないなんでもない。夕べ、深夜ドラマ見てたからね、ちょっと寝不足で」

はは、と力なく笑う鈴。杏は、「ふーん」と興味が失せたように視線を外し、窓の外を見遣った。

「・・・・・・、」

ふう。小さく嘆息する。妹につられ、流れる景色に目を移すと、すでに見知った町並みは過ぎ去っていた。

要らぬ心配をかけてはいけない。しっかり者の妹から普段聞くことのない頼みごとを、今日は聞いているのだから。鈴はそう言い聞かせ、気持ちを切り替える。

――――窓越しの空は、晴れわたって清々しく澄んでいた。

予報が外れることなく、好天に恵まれたのは幸運である。夏日らしい青い空に白い雲、深緑の木々はまさに外出日和だ。

まあ、とはいえ今日の目的地は屋内なので、雨天だったとしても別段障害になるわけではなかったのだが。せっかくの遠出なのだ、雨が降るより晴れていた方が気分も優れる。

「うーん、いい天気だねえ」

鈴は緩ませた表情でそう言った。向かいの杏が“何を今更”というような顔でこちらを見る。それに構わず「へへっ」と相好を崩すと、長時間座り続けて凝り固まった肩を解し、妹へ話しかけた。

「やあ、杏と出かけるのは本当に久しぶりだね！普段頼られることのないお姉ちゃんとしては、嬉しいなあ」

「そりゃあね、普段は私が姉のようなもんだからね」

「あはは・・・・・うう、おっしゃる通り」

「こっちとしてはもっとしっかりしてほしいけど。特に、最近」
「ご、ごもっとも・・・分かっております」
「本当に分かってんのかね。こないだだってお父さんのお弁当、届ける途中で転んで駄目にして、結局持って帰ってたじゃん。それ聞いて、私つくづくお姉ちゃんのドジっぷりに嫌気が・・・」
「わわ分かってるよー！私も色々あるのっ。なんだかな、皆して人を子ども扱いして・・・」

言いかけると、じろり、と杏が鈴を睨んだ。まずい。妹の苛立ちに気付いて慌てて口をつぐむ鈴である。危ないところだ。こうして遊びに出掛けようという日に、言い出しっぺの妹の機嫌を損ねるのは得策ではなかろう。無意味に怒りをぶつけてくるほど彼女は直情的な性格ではないので、杏が不機嫌になるには毎度それなりの理由がある。たとえ反抗期といえど、今のは自分の反論がよろしくなかったのだ。

「え、えーと・・・ほら！もっとこう、楽しい話をしようよ！」

ご機嫌取りをするつもりではないが、休みの少ない妹が楽しい時間を過ごせるよう配慮するのも姉の役目である。鈴は話題を変更しようと、わざと明るく声を張った。

「今日行く水族館はね、実は私も行きたかったところなんだ。イルカショーとね、ペンギンのパレードが楽しみで・・・時間帯も丁度いいし！遊びに行きたいって言ってくれた杏のおかげだね」

努めて雰囲気が和むように語りかける。にこにこと無邪気な笑顔を向けると、杏も毒気を抜かれたのか溜め息ひとつして返事をしてきた。

「まあね、涼しい場所がよかったし。大して興味もないけど、許容範囲内だから許す」
「ふふ、よかった。杏だってきっと行ってみれば楽しいよ！お土産屋さんもあるし、口コミで人気のレストランカフェもあるんだって。早く着かないかなあ」
「はいはい、精々楽しんで」
「一緒に楽しむの！」

遊びたいと言ったのはそっちではないか。杏の投げやりな態度に鈴はむくれたが、少なくとも気分を害したようではない。ほっと安堵し、鞄の中の携帯電話で時間を確かめた。
電車に揺られること一時間弱である。もうあと数十分すれば、鈴たちが降りるべき駅に到着だった。そしてシャトルバスに乗り込み、目指すは隣県の海浜水族館が見えてくる。

そう、本日の目的地は水族館なのだ。

だが今でこそ乗り気だが、最初から鈴が行き先を水族館に決めたのではない。夏といえば海！と安直に連想して、当初は海へ行かないかと妹の杏に持ちかけたのだ。しかし「どこ行くか考えといて」と人任せにしておきながら、杏は「海なんか暑いし日焼けするし最悪」と姉の提案を却下したので、仕方なく水族館に妥協したのである。暑くもなく、日焼けすることもなく“海”の気分を味わえる、手ごろなレジャースポットというところだ。
なんにしろ、場所はどうあれ、楽しめればよいのである。鈴はかねてより訪れてみたかった隣県のそれを、日帰りの旅先に選んだ。

ハルのことを頭の片隅に思いつつも、今日は純粋に楽しもうと割り切る。夏休みも残すところあと数日なのだ。妹の気まぐれな頼みごとに付き合うのも悪くない。

鈴は窓ガラスを鏡代わりに、指先で前髪を整えた。顔の角度を変え、おかしな点はないかチェックする。“笑顔！”と心中で唱えて、口角を上げた。

「そういう身嗜みは、彼氏とデートする時にすりゃいいのに。お姉ちゃん、色気ない」

「デッ・・・！・・・よ、余計なお世話です！放っといてよ！」

窓の外はトンネルを抜け、田園風景が一変して花畑に。

孔雀草が手前に、奥に向日葵が隙間なく植えられているのを横目に、鈴らを乗せた電車が走ってゆく。

いい一日になりますようにと、願う鈴であった。

## ＊逢いたい（１３）

太平洋の雄大な大海原に臨むその水族館は建設されたばかり。加えて夏休みという時期的な要因もあり、開館間もない時刻だというのに、到着した鈴たちは入館者数の多さに圧倒された。まずはイルカショーが開始されるまでの時間を潰そうということで、家族連れやカップルなどがひしめく館内を縫うように歩き、順を追って水槽を巡っていく。淡水魚の泳ぐ小ぶりな水槽から、一見すると不気味な深海魚の水槽、ラッコなどの海獣を展示する水槽などが鈴と杏の目を止めていった。基本的に館内は通路の照明を暗く落としており、展示物が下からライトアップされている状態で、神秘的な光が美しく水の動きに反射していた。小さな子供たちが普段体験しないような空間にはしゃぎ、鈴の足もとをぱたぱたと駆けてゆく。保護者と思しき大人が追いかける先で、べたりと巨大な水槽に張り付いて興奮の声をあげていた。「これ、なあに？」と無垢な笑顔で子供に尋ねられた親が、傍に備え付けてある魚名板を読んで教えてやっているのを、微笑ましく見つめる。そして鮮やかな色の尾ひれを持つ魚が、群れをなす水中を、食い入るように見つめる子供たちの後ろから、鈴も心を奪われ暫く見入った。

「――ほら、そろそろイルカのショーが始まる頃でしょ」

杏の言葉で時計を覗き込む。本当だ、と思ったと同時に、タイミングよく館内放送で同様のアナウンスが流れた。パンフレットのエリア案内を頼りに、それが催される会場のプールまでをやや急ぎ足で辿った。人気のあるイベントだけに、観客席は前列から人で埋め尽くされていたが、もとより「濡れるのは嫌だ」と言う杏の主張があって、水が飛び散る心配のない中段辺りの席を狙っていたのである。場所取りに苦労することはなかった。わくわくと期待感を膨ら

ませる鈴は、ステージで飼育員が説明するマイク越しの声を耳に、イルカの登場を待つ。
明るい調子の音楽が響き、演技がかった飼育員の掛け声と共に、二頭のイルカが水中からしなやかに踊り出で、その姿を現した。

「わぁっ・・・！」

さっそく挨拶代わりに飛び跳ねて水しぶきをあげるそれに、鈴は顔を輝かせ、身を乗り出した。びしょ濡れになった前列からは悲鳴と歓声が交じり合って聞こえる。

「杏！杏！！イルカ！イルカだよほらほらほらっ！可愛いよう！」
「見りゃ分かるから。叩かないでよ」

相変わらず感動の薄い妹を無視し、鈴は思わず持参したカメラのシャッターを切った。イルカは飼育員の合図に呼応して甲高い声で鳴き、水面から半分だけ出していた体を沈め、プールの中央まで泳いでゆくと勢いよく跳ね上がった。
長い背をしならせて、天井につるされたビーチボールを打つ。観客からは大きな拍手喝采が生まれ、フラッシュが光った。

「わぁあぁっ、すごい！見た！？今の！ねえ見た！？あんなにジャンプしたよ！」
「見た、見たから。はいはい凄いよね」
「んもー、杏は冷めてるなあっ。あんなに可愛いのに」

横を向いた鈴が、そう言いながら再びカメラを構える。

「お姉ちゃんのテンションが高すぎるだけでしょ」
「違うよ、もう！この会場の空気を読んでみなよ、明らかに杏のが・

・・・・・ってああっ、撮り損ねた！」
「――・・・・」
「・・・・・・なっ！今、笑ったね！鼻で笑った！どうしてイルカじゃなくて人の失敗見て笑うのよ！」
「はいはい、ごめんってば。ほら、前見てなきゃ、また撮り逃すよ」
「く・・・！こんな妹を持って、お姉ちゃんは嘆かわしいよっ」

前を向き、への字になった口でそう言い返す鈴。隣から暢気に欠伸をする様子が伝わってきて、悔しいやら腹が立つやらである。
不服を唱えようとも全く意に介さない妹に、姉の威厳というものを発揮したいところなのだが如何せん。

「いいけどさぁっ。杏がテンション低いのは今に始まったことじゃないし」

発揮できるような威厳など持ち合わせていないのがまた悔しい。腹が立つのである。

「気に入らないところもあるけど、確かに私より色々、賢いし、器用だし、変に大人だし・・・・・そりゃぁっ、分かってるわよ！どうせ杏に比べて私はさして取り柄なんてないもん」

散る水飛沫に、数段席を隔てた前列の観客が悲鳴をあげる。一度カメラを持つ手を下げ、鈴は宙を見つめた。やや不貞腐れた表情で口を尖らせ、再度カメラを構える。

「駄目なお姉ちゃんなのは私が一番分かってるもん。それに、嘆かわしいとか言ったけど、なんだかんだで杏は自慢の妹だし・・・いつも頑張ってて偉いなって思ってるし。だから普段は絶対しないのに、私に頼みごとするなんて珍しくて、ほんとに、今日は嬉しかっ、

・・・・・うう、嬉しかったんだよう、本当にさ」

掌にじんわりと汗をかきつつ、鈴は指示に合わせてくるくると自転するイルカをズームで撮る。頬を紅潮させ、更に唇を尖らせた。

「・・・ま、まあでも、だから、とりあえずはね！・・・そう！今日の目的は杏の息抜きなんだから、杏が楽しめればそれに越したことはないのよっ。もうね、別にテンション低かろうがお姉ちゃんは構わないし、うんっ。人にはそれぞれの楽しみ方があるもんね！私みたいにはしゃいでなくたって、本当は杏だって楽しんで――・・・・・」

と、おもむろに隣を振り向く。

愛らしくキュウキュウと鳴くイルカが、周囲の視線と賞賛の拍手を一身に浴びている中。

鈴はその笑顔のまま固まった。

「・・・・・・な」

投げられたボールを鼻先でキャッチし、鰭で掴んでステージへと運ぶ水族館のアイドルに　見物客はひときわ歓声を上げた。そしてプールを素早く一周して、どうだと言わんばかりに宙へ跳躍する。

人のざわめき、軽快な音楽、飼育員の明るい声が耳に響いていた。

「・・・・・・・・・」

妹の返事はない。

道理で静かなはずである。

「・・・ね、寝てる・・・」

足と腕を組み、俯いた状態で杏は寝ていた。すう、と深く緩やかな呼吸を繰り返す、平然たるその様は、鈴の声も周りの騒音もまるで届いていないかのよう。

あんぐりと口を開け、鈴は暫し呆気にとられた。何と言ったものか考えを巡らせたが、この五月蝿さでも目を覚まさないのだ。もはや怒りも通り越して、嘆声をもらすのみである。

「・・・姉妹二人して図太いってことは、やっぱり遺伝なのかなあ・・・」

数を五頭に増やしたイルカたちが交互に輪をくぐり、背泳ぎでプールを周回するのをカメラに収めて、鈴はぽつりと呟いてみた。やはり隣からの返事はなかった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

数十分続いたイルカショーも興奮のうちに幕を閉じ、鈴は強引に叩き起こした杏を連れて館内のレストランへ足を運んだ。

正午にはまだなっていなかったが、客足の多さを懸念して、早めの昼食をとろうと決めたのである。

「信じられないっ。いくら退屈でも、あの騒ぎの中で寝るなんて！」

「だって・・・今朝早起きしたからさ、ちょっと仮眠とりたくて。別に退屈だったわけじゃないよ」

「う、嘘だ！もう騙されないもんね！人がせっかく寛大な心で接しようとしてたのに・・・！」
「意味がわかんない」
「うるさいっ！もういいもん、物分かりのいいお姉ちゃん面はしないっ」
「あのね・・・」

ガラス張りになっている店の正面は、さすが海浜水族館の名に相応しく、一面に海と砂浜が広がっていた。外に続くバルコニーにもテーブルとチェアのセットが並べられており、今日のように天候の良い日はパラソルの下で食事をとれる仕様になっている。
鈴らは窓際の明るい席に座ると、メニューの物色もそこそこに、軽い口論をはじめた。しかし風が運んでいるのか、漂う潮の香りが胃袋を刺激して、ぐう、と鳴る腹に鈴は唸る。肩肘をついて尚も眠そうな様子の杏は、鈴の手からメニューを奪った。

「腹が減っては軍は出来ぬ、って言うしね。とりあえず何か食べようよ。口げんかなんか帰ってからでもできるでしょ」
「う・・・分かってるよっ。もちろん割り勘だからね、妹だからって奢らせようとしないでよっ」
「はいはい」

鈴の住む町も似たものだが、この日訪れた場所も海沿いの土地柄的に有名なのは海鮮料理だった。注文したランチメニューの海老ピラフを、鈴は頬袋を膨らませて味わう。

「おいふぃー」
「・・・ハムスターみたいなほっぺ」
「おいひいよ、まさしく頬っぺたが落ちちゃう、だねえ」
「さっきまで怒ってたくせに、単純」

「今日来てよかったあー。杏サマサマ！」

うっとりと弛む目尻をそのままに、サラダやスープを次々と平らげ、セットになっていたデザートに取り掛かる鈴。美しくデコレーションされたケーキに「食べるのもったいないいぃ」とぼやきつつも、最後の一口まで猪突猛進的に胃の腑に収めた。片やマイペースを崩さず、杏はのんびりと一口ひとくちを咀嚼して、美味いと感じているのかいないのか判別のつかない無表情で、姉よりも遅れて「ご馳走様」を言った。満腹感に浸る姉を一瞥し、色鮮やかな熱帯魚の泳ぐ観賞用に設置されている水槽をじっと見つめる。

## ＊逢いたい（１４）

「お姉ちゃんってさあ・・・」
「・・・うん？」

独白するかのような杏の声が、鈴の顔をあげさせた。

「本当に私と姉妹なのかって疑いたくなるほど、馬っ鹿だよねえ」
「・・・ばっ・・・・・・は、はあっ？」

ぎょっとする。いきなり何を言い出すのかと思えば、食後の和やかな雰囲気を一掃して杏は鈴を貶し始めたのである。肘をつく腕を替え、静かに、けれども深く息を吐く杏。正面で口を半開きにしたまま固まる鈴へ、つと真意の見えない視線が注がれる。

「単純だし、短絡思考だし、能がないというかなんというか・・・つまり馬鹿？」
「・・・な・・・あ、杏ってば・・・・・・いきなり何？どういう意味よ？怒ってるの？」
「違うよ、やだな。お姉ちゃんのありのままを言ってるだけ」
「・・・・・・！？」

鈴のぽかんとしていた表情が、たちまち怒りの色に侵食されてゆく。藪から棒に投げかけられた冷静な罵言を、キッと眦を吊り上げて鈴は受け取った。

「け・・・けんかでも売ってるの？さっき、自分で言ったじゃん！けんかなんか帰ってでもできるって！」
「私は怒ってもいないし、けんか売ってるわけでもない。ただ、

最近のお姉ちゃん見てて、ちょっと言いたいことがあるの」
「言いたいことぉ？なにそれ、馬鹿って貶すことが？意味がわかんないよ！そりゃ私は杏に比べたら馬鹿かもしんないけどさあ！ちょっとそれって酷いんじゃないの？」

食事を挟んでせっかく気分よく過ごせているのに、と強めた語気で付け足す。杏の言わんとすることが理解できず、鈴は妹の言葉に気分を害した。――どうしたというのだ。それこそ本当に、怒るでもなくけんかを売るでもなく、屈託のない彼女の態度だ。杏がずけずけとものを言う性分なのは既知の事実だが――分からない。何のつもりなのか。

「杏だって馬鹿だよ！ばかっ。本当に、せっかく楽しい一日にしようと思ってるのに、のっけから冷めてるし、寝るし、その上人に馬鹿とか言い始めるし！私だってねえ、怒ってるんだからね！我慢してるのにっ」
「私が冷めてるのなんか、いつものことでしょ」
「そっそうだけど！・・・いや、でも！寝るのはさすがに腹立つもん！一緒にイルカ見ようよ！」
「だから・・・それは悪かったけど、寝不足の理由があるんだってば」
「はいはい、早起きして眠かったんでしょっ？ていうか、そもそも休みの日に早起きして、一体何してたんだか！」
「・・・・・・・・」

鈴は不満顔でぷい、とそっぽを向いた。口げんかなどしたいわけではない。けれどこちらにも言い分というものがあるのだ。今日出掛けたいと言い出したのは杏の方なのに、悉く場の空気を壊してくれるのだから、いい加減に腹が立つ。これは怒ってもいい筈である。一方的に馬鹿と貶される筋合いはない。口を尖らせ、言いたいこと

を言っても何故か収まらない苛々とした感情を持て余した。今日は虫の居所が悪いのだろうか。

小洒落た軽快なＢＧＭに包まれるレストラン。空になった食器を店員がさげてゆく。二人が座る窓際のテーブルでは、会話が途切れたまま。

顔を横に向けたままの鈴は、視界の端でふと動きがあるのを感じ取った。

「・・・・・・？」

ちらりと動かした瞳が捉えたのは、なにやら鞄の中身をごそごそと漁る妹の姿。

「・・・私、身内の借りは返さないと気が済まないんだよね」

そう言って杏は、あるものを取り出した。

「・・・なによ、それ」

仏頂面は変えず、目の前に置かれたものを見やる鈴である。妹の鞄から出てきたのは、両手のひら大の箱だった。非常に簡素だが一応の包装が施されている、箱だ。

「この箱がどうかしたの？」

「中身は、お姉ちゃんの大好きな甘いもの」

「・・・え、ええっ？なんで？コレで私の機嫌を直そうとでもっ？」

「違う、馬鹿。ちゃんと話を聞いて」

「・・・・・・う、なによう」

追い討ちを掛けるように馬鹿と言われ、鈴はむすっと膨れっ面になる。その恨めしげな眼差しを正面から受け流し、杏は話した。

「早起きの理由は、これをつくってたから」
「ふう、ん？・・・わざわざ今日のために？」
「そ。言うなれば・・・交渉の切り札？」
「・・・え？今から食べるんじゃないの？」
「食べちゃ駄目・・・というか、食べれるかどうかは今からする質問に対しての、お姉ちゃんの返答次第かな」
「はあ・・・なにそれ？質問・・・？――もお杏てば、さっきから本当に意味が分からないんだけどっ」

「そうだね」と杏は眉を上げ相槌を打った。そうして、順を追って説明するから、とむくれた鈴を静かに制する。時計が丁度、正午の時刻を指した頃だった。

「――ときに、この前、お姉ちゃんが男に襲われた日のことなんだけど」
「・・・え？あ、うん・・・」
「あれさあ、友達の家に一晩お世話になったって・・・・・・嘘でしょ？」
「・・・・・・へ・・・えっ！？」

無防備だった鈴の心中を、杏が射抜いた。ぎくりと身を固まらせ、表情ともども凍りついた鈴を、細めた目で見つめる。見つめ、踏み込む。

「お父さんやお母さんは信じてるみたいだけど、私は騙されないから。お姉ちゃん、あの晩に電話してきた人・・・誰なの？」
「・・・な、なん」

「もっと言おうか?次の日の朝に、お姉ちゃんを車で送ってきてた人、誰だったの?」

「・・・・・あっあ、杏、み、見てたの・・・!!」

驚きは、それまで感じていた苛立ちを根こそぎ消し去り、鈴の全身を支配した。

## ＊逢いたい（１５）

「・・・・・なにそれ。じゃあお姉ちゃんは、男に襲われた直後に見ず知らずの別の男にほいほいついて行って、挙句にそいつの家で一晩過ごしたっての？」

勘弁してよ、とぼやいて杏が天を仰いだ。脱力した肩で大きく息を吐き、視線で人を射殺せるほどに眉間の皺が増える。斜めに下げた顔は、たった今鈴から聞き出した事実がまるで理解できないと言っているかのようである。

「ちょ、ちょっと、そんな言い方されるのは不本意なんだけど！それじゃあ私がものすごいはしたない女みたいじゃん！」

「みたい、じゃなくてそうでしょ！だって、詰まる所そういうことでしょ、お姉ちゃんが今言ったのは！」

妹に真実を白状した代わりに受け取った箱の中身は、レモンとヨーグルトを使ったパウンドケーキだった。夏になるとごく稀に作られる、杏の十八番デザートだ。つい先程食事を終えたばかりではあるが、こと鈴にとっては甘いものは別腹中の別腹なので、満腹だから食べられないとかいう問題は、この場合ない。まして訊かれたことに対して正直に話したのだ、このケーキ、味わわずにいられようか。本当ならば面倒ごとを避けるためにも、正直になど話したくはなかったのに、泣く泣く教えてやったのだ。

杏に少しでも勘付かれたとき、そしてそれを問いただされたとき、隠し通すのは鈴には不可能に近い。あの手この手で口を割らせてくるのである。またこうして人参を吊るされた馬のような状態にされてしまっては、なお更。ゆえに鈴は、教えてやったのだ。心泣く泣く。

「お姉ちゃん、聞いてるのっ！？」

いつ食べても美味しいなあ、とヨーグルトとレモンの爽やかさに頬を緩ませていた鈴の手元から、立ち上がった杏がケーキを箱ごと掻っ攫う。

「ああっ」と手を伸ばした鈴に、苛立つ杏の殺気篭った視線が降り注いだ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

束の間、こう着状態が続き、互いに互いを睨み合う。

だが妹の上からの威圧に気おされ、鈴は渋々手を引き、フォークで刺していた一口を口に収めると居住まいを正した。咀嚼、嚥下したのち、こほんと咳払いをする。

「・・・仕方ないでしょ？その人・・・ハルちゃんが男の人だって私は知らなかったんだから。どうしようもなかったのっ」

ぴくりとこめかみが動いたのは、杏である。

「――――私はね、お姉ちゃんのその危機意識のなさに腹が立ってんのよ！たとえその時に男だと気付いてなくても、今は知ってるんでしょ？なのにどうしてそんな平然とできてるのか、ほんとに理解できないんだけど」

「だって、別にハルちゃんは悪い人じゃないもん！私を助けてくれた恩人だよ？」

「・・・お姉ちゃんって、本当ムカつく！馬鹿すぎる。私を怒らせて楽しいわけ？」

「な・・・怒りたいのはどっちよ！杏もさっきは怒ってないって言ってたのに！」
「こんな話聞かされたら誰でも怒る！」

息巻く舌戦が、隣り合う席に座る者たちの視線をちらちらと集めた。気付いた杏は苦々しい表情で一旦座ると、やや冷静さを取り戻した口調で鈴を謗る。

「暢気にもほどがあるよ。お姉ちゃん、自分がどんな目に遭ったかちゃんと分かってるの？“ハルちゃん”？なにそれ。よく一晩世話になっただけの奴にそこまで懐けるよね。男なんだよ？お姉ちゃんを酷い目に合わせた奴と同じね」
「なっ、違うっ！！」
「どーだか。私はよく知らないから、その人のこと。お姉ちゃんが帰ってきた朝も、顔をはっきり見たわけじゃないしね。そこまで騙されるほど、女みたいな男がいるもんかな。・・・それにお姉ちゃんも、随分庇うようなこと言うけど、大してその“ハルちゃん”のことは知らないんじゃない？一晩やそこらで何が分かるっての？」
「・・・・・・・・・っ」

ずきん、と胸の辺りが軋んだ。感情の起伏の薄い杏が、いつになく語気を強めて怒りを露にしている。鈴に反論する暇も与えぬほど、一方的に言いたいことをぶつけて怒っている。鈴は驚いて、呆然として、反論したくとも杏の言い分に圧倒されてしまった。それほどに自分は妹を憤慨させることをしただろうか。彼女の言葉が理解できるようで、理解できない。どうしてこんな口論にまた発展しているのだろう。杏の機嫌はこれ以上ないほどに悪い。

「ちょ、ちょっと落ち着こうよ。なんか杏らしくないよ？なんでそんなに・・・そりゃ私は嫌な目に遭ったけど、ほら、今はこうして

ピンピンしてるんだよ?それもこれも、本当に全部あの人たちのおかげで・・・」

鈴の拙い弁解は、しかし冴えた杏の声によって遮られた。

「さっき・・・身内の借りは返さないと気が済まないって言ったよね。まさか自分の姉がそんな軽率なことしてたとは知らなかったから、本当にお世話になった人なら改めてお礼くらいするべきだって思ってたんだけど・・・やめた。・・・ていうか、その人とどういう風に別れたか知らないけどさ、もう会わないほうがいいよ」

「あ、杏・・・!?」

「お姉ちゃんがお父さんとお母さんに正直に話さなかったのは、それだけは正解だったね。確かに、もう終わったことだし、とりあえずお姉ちゃんは元気だし・・・結果オーライか。私としては納得いかないけど・・・もうこの話はお仕舞いにしよう。自分から聞き出しといて悪いけどさ、金輪際、蒸し返したくないわ」

そう言うと、箱を仕舞い、荷物を持って杏は立ち上がった。鈴を待たず会計を済ませるとすたすたとレストランを出て行こうとする。

「杏!ちょっと、待ってってば・・・!」

慌てて後を追った鈴が隣に立っても、杏は決して目を合わせようとしなかった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

ペンギンのパレードもこの水族館においては人気のショーの一つらしい。列をなし、ぺたぺたと体を揺らして行進するペンギンを大勢の入館客が犇き囲っていた。イルカショーと同様のフラッシュがあちこちで光る。

一目見ようと背を伸ばす老若男女を他所に、このパレードも楽しみにしていた鈴は頗る気落ちして立ち尽くしていた。黒山の人だかりを前にしては、小さなペンギンの行列などどこにも見当たらない。ただ「可愛い」だの「きゃー」だのと歓声があちこちから届き、盛り上がりぶりが伝わってくるのみである。

だが鈴が落胆しているわけは、それではない。ペンギンなど、否、それどころか水族館に居ること自体、すでに関心の遠く彼方へ消えていってしまっている。

どうしてこうなってしまったのだろう。鈴はぼんやりとそんなことを思った。

昼食を終える頃までは、多少の口論はあってもまだ雰囲気は柔らかかった。きっかけは、鈴が杏の問いただしたことに答えてしまってからである。襲われた日に何があったか本当のことを言うと、杏は途端に態度を険しくして鈴を強く詰ってきた。普段でも鈴を貶すことは間々あるが、激しい怒りを隠そうともせずぶつけてくるのは殆どない、あの杏が、周囲の視線にも頓着せぬまま、ああも憤るとは。

目線を下げ、鈴は重苦しい吐息を吐いた。今杏は用を足すためにトイレへ行っており、隣にはいない。そしてレストランを出てから今まで、会話が弾むことなくきているのだ。ペンギンに目を輝かせている場合ではなかった。

「・・・なんで、あんなこと言うのよ」

誰にも聞こえないよう、一人呟く鈴。ハルを、鈴を襲った男と同列に扱うような発言をし、もう会うなと最後に突き付けてきた杏に、酷くショックを受けた。父の弁当を届けに行った日にハルに再び会ったこと、またその後の出来事は言っていない。崩れた弁当を持ち帰り、転んでしまったと、妹を含め家族には伝えているのである。だから彼と二度会ったことは知らないはずの杏に、もう会うなと言われるのは、非常に複雑であった。悲しい。自分はまだしも、ハルを悪く言われることが、とてつもなく悲しく、それを否定するだけの反論が咄嗟に出なかった自分が嫌になる。

あの暴漢とハルの一体どこに同じ部分があるというのか。少なくとも鈴の知るハルは、一晩過ごした時のハルは、誰よりも自分を守ってくれた人だというのに。男が皆同じだとでも言うような杏の理屈は、鈴の理解を超えている。危機意識や警戒心を持てと姉の身を案じているのだろうが、彼女の言うこと全てには納得できない。

「違うもん・・・。あの人は、杏が言うような人じゃ、絶対ないのに」

「・・・じゃあ、どうして言い返してこなかったのよ」

「・・・!!あ、杏、」

振り返ると、そこには鈴を見据える杏の姿があった。

## ＊逢いたい（１６）（前書き）

※今回は少し短いです。

# ＊逢いたい（１６）

さして背丈の変わらぬ妹の鋭い視線が、真っ向から鈴を射抜く。目を逸らすことを許さないようなそれに、知らず鈴はこくりと喉を鳴らしていた。

「も、戻ってたんだ・・・」

「ついさっきね。全く・・・蒸し返したくないって言ったのにな。・・・・・で？なんで？」

「・・・え・・・」

「だから、どうして言い返さなかったの？レストランで、“大してそのハルとかいう人のこと知らないんじゃない？”って、私が訊いたとき」

「・・・そ、それは」

「図星だったんでしょ？半日も一緒に過ごさなかったなら当たり前だけどさ。こんなところで私がいない間に、“違うもん”とか弱々しく否定されても、なんにも説得力ないし」

「・・・・・・っ、杏！！」

辛らつに言葉を返す妹を、きっと眦を吊り上げて睨んだ。込み上げるものが、悲しみから怒りへと変化してゆく。分かったような口を利かれるのが我慢ならなかった。

「・・・お姉ちゃんは、本当に何も分かってない。夏祭りの晩からずっと、私がどれだけ心配してるか。最近はどこか心ここにあらずだし、そのくせ酷い目に遭ったってのに暢気だし平然と外出したりしてるし・・・私がお姉ちゃんを馬鹿だって言いたくなるのも分からないの？今日だって本当はそのことを言うために連れ出したんだ

よ。お母さんたちの目もあるから、態々遠出までして・・・・・・なのに当の本人は、男の家に泊まってたって言うんだから」

「だから・・・・・・！その人は命の恩人で、私を助けてくれ・・・」

「本当に助けるつもりなら普通、警察に行くでしょ？聞けば警官だってその場に居たって言うじゃんっ。なのに自分の家に連れ込んだってことは、どうせそいつだってお姉ちゃんのこと妙な目で見てたんじゃないの？結果的に何もなかっただけで、一歩間違ってたらその男も暴漢と同じようなことしてたかもしれな――・・・っ」

「っ！！」

びりっと掌が痺れるような感覚に包まれた。乾いた音を伴って、衝撃が杏の頬を襲う。大音量の音楽と共にペンギンのパレードが進むなかで、群衆の片隅に一瞬の静寂が生まれた。数瞬ののちに再び喧騒に飲み込まれたが、夏日の嘘せ返るような暑さを置き去りにして、二人を取り巻く空気は冷え切った冬の寒空の下のようだ。

どうして、と思う。何に対する思いなのかは分からない。けれど、本当に、悲しみを超えて許せないことがあるのだと感じた。

肩を大きく上下させ息をする鈴は、たった今妹の頬を打った右手を見つめ、ぽつりと零した。それは、杏の耳だけが拾うことのできる、小さな声だった。

「・・・今ね、彼はこの右手が使えないの。・・・私のせいなんだよ」

「・・・・・・え？」

じんじんと熱く疼く頬を押さえ、怪訝な表情をした杏が聞き返す。

「・・・そうだよ、ちょっと助けて一晩泊めてやっただけの、たかだか顔見知りくらいの関係なのに・・・その私を見かけただけで身を挺して庇ってくれて・・・大怪我を隠しながら、私の心配をして叱ってくれたんだよ・・・？そんな人が、他にいる・・・？」

「お姉ちゃん・・・？」

「泊めてくれた晩も、私が家族に連絡したくなくて警察に行くことを拒んだの・・・。雨に濡れて全身ずぶ濡れの状態で、足も痛くて、どうしたらいいかなんて分からなくて・・・ショックでショックで仕方なくて・・・あの時の私にとって、彼がどれだけ支えになったか杏に分かるの・・・！？」

顔をあげた鈴は、瞼いっぱいに溜めた涙を決して零すまいと、瞬きせず杏を見つめる。

「お姉ちゃ・・・」

「杏・・・私が家族にかけた心配や迷惑は私の責任だよ。ハルちゃんが悪く言われる理由なんかひとつもない。彼を悪く言うのは誰だろうと、たとえ杏だろうと私が許さないから。私を馬鹿にはしても、私を助けてくれた人は絶対、馬鹿にしないで」

「っ、なんで・・・」

言い募ろうとする杏を無言で制して、鈴はぐ、と腕を目元に押し付けた。閉じた瞼から流れる雫を誰に見られることもないようにさっと拭い、再度面を上げる。

「もう帰ろう。そもそも、ここで話すようなことじゃないよ。楽しい日にならなくて残念だけど・・・仕方ないよね」

ぎこちなく微笑む鈴が、杏の目に映った。じりじりとした蒸し暑

さが徐々に意識を支配し、反して二人に流れていた、張り詰めた冷たい空気は溶けていく。鈴たちの周りは早くも人の群れがばらつき始め、野次馬の視線が刺さることもなくなり始めていた。「んー」と背伸びをして体をほぐす鈴からも、既に普段の暢気な態度が見え隠れしている。杏の頬に平手をした時の剣幕はもうない。

「ほら、突っ立ってないで！バスに乗るよっ」

## ＊逢いたい（17）（前書き）

今回も短めです（ノ∀、、）

## ＊逢いたい（17）

帰りの杏は、バスの中でも電車の中でも終始無言だった。真一文字に結ばれた口元はぴくりとも動かず、声を荒げていた時のような分かりやすい感情も纏っていなかった。窓の外をぼうっと眺めるくっきりとした両目が、長い睫に翳ってどこか遠くを見つめているのを、鈴も見つめることしかできなかった。

「・・・・・・・・・」

電車に揺られ揺られ、しんと静まる向かい合った座席。まだ明るい時間帯の、流れゆく景色。行きに目にした花畑の横を、前とは逆に通り過ぎてゆく。

窓の向こうから車内に視界を戻して、鈴はさり気なく正面の様子を伺った。息詰まる空間を隔て、杏は完全に拒絶の態度を示している。

仕方ない。公衆の面前で手を上げてしまった自分とは、今日はもう口も利きたくないだろう。目も合わせたくないだろう。あれだけ険悪な空気を交わしたのだ。自分と比べて遥かに神経質な性格の杏に、さっきの今で和気藹々とした会話など到底不可能である。神経質で、心配性で、姉の自分とは似ても似つかない性格の、彼女には。

仕方ない、と再三言い聞かせるように鈴は内心で呟いた。もう何度寄越したことか覚えていないほど、あからさまな視線を送っているのに、こちらをちらとも見ようとしないのである。こほん、とまたわざとらしく咳払いをしてみても、全く反応なし。

本当に、こんなことになってしまうとは予想外である。仕方ないと諦めをつけてはいても、やはり心ゆくまで楽しい一日にしたかっ

たのに、というのが本音であった。せっかく夏休みの終わりを飾る、妹との遠出だったのだ。残念だ、という一言では片付けられない。これでは出かけない方が良かったのではなかろうか。

口走る杏の頬を打った右手を、鈴は何気なく目に留めた。とうに痺れは消え去っているが、まだその感覚が掌にあるような気がして、五指を曲げたり伸ばしたりしてみる。

“痛かっただろうな・・・”

力加減などなかった。思い切り叩いたのである。杏の言い様が許せなくて、かっとなって気づいた時には腕を振り上げていた。息苦しい怒りを覚えて、人の目も気にせず動いていた。自分でも驚いたほどだ。鈴にしてみれば、妹は普段殴りたくなるような怒りを覚える対象ではない。むしろその逆だったはず。

『どうせそいつだってお姉ちゃんのこと妙な目で見てたんじゃないの？結果的に何もなかっただけで、一歩間違ってたらその男も暴漢と同じようなことしてたかもしれな――――・・・っ』

ぐ、と手を握ると、蘇る言葉を頭を振ってかき消した。最後まで聞きたくなかった。そして言わせたくなかった。いくら自分より出来た妹でも、言っていいことと悪いことがある。責めるべきは自分で、まかり間違ってもハルではないのだ。彼女は、ハルのことを何も知らない。だが知らないからといって、何を言ってもいいわけではない。

だから杏が謝らない限り、こちらも手を上げたことを謝りたくはない。後悔もしていない。

そして無言を決め込むのならそれも受け入れるだけである。

――けれど、けれども。

「・・・杏」

鈴は今日の口論の中で、ひとつ分かったことがあった。

「杏・・・家に帰る前に・・・いっこだけ、言っとくね」

ゆっくりと顔を上げて、前を見据える。

「・・・ハルちゃんのこと、私だってきっとよくは知らない。杏の言うとおり、あれだけは図星だった」

「・・・・・・」

「分かった気になって、ハルちゃんはこういう人って決め付けていたところはあると思う。それは、杏に言われて気付いたの」

真っ直ぐ、杏を見つめて鈴は言う。視線が合うことがなくても、返事がなくても。

「でもね、私はあの人の全部を知っているわけじゃないけど、知っている部分もたくさんあるんだよ。杏よりもずっと」

ほんの少し頬を緩ませて。自分の目を通して見てきたハルの姿が、心の中で浮かんだ。何を思い出しても、杏の罵詈と重なるような記憶は出てこない。それが嬉しく、また誇らしくさえあった。

「杏、心配かけたことは、ごめんね。お姉ちゃんが悪いから、ハルちゃんを悪く言うことだけはしないで。――だって、大事な妹が、

自分の好きな人を悪く言っているのって、すごく悲しい」

そう、鈴が言った瞬間、ようやく、杏は鈴の顔を見た。
驚きに満ちた表情で、妹は姉の言葉を反芻する。

「・・・・・好きな、人・・・？」

「うん・・・ハルちゃんは私の、好きな人」

噛み締めるように、大切に言った。生まれたての赤ん坊を抱き上げるような、そんな慈しみをもって。
初めて口にする言葉だった。
初めて迷いなく言葉に出来た。
言った後に、ふわりと広がるこの感覚はなんだろう。心なしか心臓の音が早く、とくとくと急ぎ足になっているのが伝わる。耳や頬がほんのりと熱をもち、自分ではっきりと言っておきながら照れ臭さに隠れてしまいたい気分だ。

ああ、と思わず感嘆の声が胸を支配した。

「私ね、ようやく目が覚めたよ」

杏の両目が大きく見開かれる。
瞳に映るのは、それはそれは、嬉しそうな少女の笑顔だった。
初めての恋を見つけた瞬間の、少女の笑顔だった。

「私、ハルちゃんに逢いたい・・・！」

【鈴の夏／逢いたい】・終

## ＊悪夢／ハル視点（1）（前書き）

すみません！一度削除したのち、大幅に加筆修正させていただきました。

## ＊悪夢／ハル視点（1）

蛇口から勢いよく流れる水。排水溝に吸い込まれてゆく水。鼻先を、顎を伝い滴り落ちてゆく水。

荒い呼吸を繰り返していると、心臓の音が耳のすぐ隣から響いてくる。鼓膜を通して、三半規管を揺るがす。視神経を揺るがす。

赤黒く変色した血に、鉄と、饐（す）えたような汗の匂い。砂混じりの風を吸い込んで、ざらつく口内。体の芯を抉る轟音。スコープ越しに探す、的、的、的。

「はあ、はあ、はあ・・・っ」

視界が渦を巻く。目を閉じて、頭から水を被った。使えない右腕が煩わしい。

「・・・っ」

――――久しぶりに蘇る、この感覚。

「・・・・・・くそっ」

――――紛れもなく、“悪夢”だ。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

「ざまぁねえな」

扉に背もたれ、失笑しながら浩信はそう言った。

「――五月蝿い。黙れ。帰れ」

「おいおい、無碍にすんなよ。んだよ、機嫌わりぃな。久々に夢でも見たか？」

「参ったなあ」と大袈裟に抑揚をつけて嘆く男に、じろりと視線だけを返す。だがそれをも小蝿をかわすような素振りでいなし、口元に嫌味な笑みを貼り付けたこの人間は、しばしば本当に鬱陶しく思う時がある。

「せっかく見舞いに来てやったってのに、全く、お前の二重人格にゃ感服するよ。俺も成り上がるには、まだまだ飴と鞭の使い分けが必要だな」

軽口を叩き、我が物顔で部屋へ上がりこんでくる浩信に背を向け、シンクの前で溜め息ひとつ。はあ。と鬱憤をも呼気に込めて、蛇口から規則的に落ちる雫を無感動に見やった。たちが悪い、実にたちが悪い。言うまでもなく、この男のことである。こういう時に限ってここに来る、この男のことである。普段は連絡のひとつも寄越さないくせに、こういう、お呼びでない時に限ってのこのこと現れるのだ。更に言えば、こちらが追い返そうとしても、睨みつけても手応えはない。好きな時に来て好きな時に帰る。・・・つまり、この上なくうざったい。

ぽたりと落ちて、散り散りになる水滴。ハルはそこから目を離さず、今度は吐き出した鬱憤を溜め込むように静かに息を吸った。

“――夢を見たかって？”

男の言う“夢”が何を指しているのかは自明のことである。自分がどれだけ苦しめられてきたか、一番傍で見ておきながら、からかいのネタにするのだ。槻尾浩信とは、そういう人間なのである。

とうの昔に分かっていることだけに辟易させられる。どんなに拒絶をしても結局は相手の思い通りになってしまう。いや、自分が最後まで拒みきれないがために、この唯我独尊男に拍車がかかるのだ。それもとうの昔に分かりきっている。分かっていて、変えられない力関係が今日まで続いてきた。

まあ、それ故に自分の友人を務めていられるのだろう、とも、思えなくもないが。

「なに偉そうに座ってんのよ」

まるで自宅にいるような寛ぎぶりで、男は踏ん反り返っていた。

「そりゃお前、俺は客だからな。客はもてなして然り、だろ？こちとら貴重な休日を利用して来てやってんだ。このクソ暑いなかな。分かったらビールでも出してこい」

のたまう浩信が、横柄にも“当然だろう”という表情で促してくる。平生ならばちくりと嫌味の一つも言って従ってやってもよいところだが、あいにくと今日は勝手が違う。

ハルは冷めた面持ちそのままに眉だけ吊り上げ、心中毒づいた。何が、「来てやった」だ。何が「客」だ。ああ鬱陶しい。

「断る。見舞いに来た奴が怪我人を扱き使うんじゃないわよ」

阿呆らしい。と一笑に付して、またハルは背を向けた。胸元の湿ったシャツを、もはや一通りのことには慣れてしまった左手で脱ぎ捨て、ベッドの上に放り投げる。クローゼットから別のものを引っ張り出し、右腕が引っかからぬように注意しつつ袖を通した。濡れて張り付いていた感覚とは異なる、さらりとした肌触りが、僅かにハルの苛立ちを軽くする・・・ものの、直後耳に届くせせら笑いによって台無しとなった。

「怪我人ー？お前が？けっ、機嫌悪いと思っていたんだが、単に寝起きなだけか？」

「・・・どういう意味よ」

「寝言は寝て言えってことだよ。ま、もっとも、いくら寝言でも・・・“ガキに絆された”なんて言われようもんなら、俺はお前と縁を切るけどな」

ばたん、と冷蔵庫のドアが閉められる。

そしてどんっ、と音を立てて、テーブルの上に置かれる缶ビール。冷え冷えとした目つきでハルは浩信にそれを差し出した。次いで自身はベッドの上に腰掛け、同じように冷蔵庫から取り出した缶ビールのプルトップを引く。寝汗をかいた体に、冷たく苦いアルコールが与えられてゆくと、徐々に頭も冴えていくような気がした。喉を潤し、微かに擦れていた声も平時の高さを取り戻す。

「・・・関係ないわ。鈴ちゃんはもうここには来ないもの。ほんのり脅しといたから」

半分ほど一気に飲み干して、ハルは凛とした声で言った。好奇心の篭った眼差しが注がれるのが感じられたが、そちらには顔を向けず喋る。

「だから私のことは女だと思い込んでいた方がよかったのよ。ノブちゃんが余計なこと言わなければね、あの子が私に深入りしようとはしなかったわ」

思い返すのは、赤く熟れた頬。眉尻の下がった困り顔。手に取るように分かる戸惑い、緊張、強張り。こちらを見つめる瞳に隠された、まだ本人さえ自覚していなかったであろう感情の片鱗。

危険、だと思った。様々な意味で。笑顔で接してやりながらも、これは遠ざけなければと思った。

「へっ、人のせいにすんじゃねえよ。一度ならず二度までも助けたのはてめーだろ。自分からあのガキに関わっておいて、都合が悪くなれば責任転嫁か」

「・・・じゃあ訊くけど、目の前に危険が迫っている人がいても見て見ぬ振りをしろってわけ？とても治安維持組織に属する人間が言う科白とは思えないわ」

ふん、と悪態をつく浩信を、斜め上から静かに見下ろす。櫛の通っていない、半乾きの長髪をやや煩わしげに指で梳き、缶に唇を近づけ、またひとくち。

喉仏のあまり目立たない喉が、飲み下す瞬間こくりと動いた。

・・・そうだ、とハルは再度頷く。彼女にとっての自分の存在は恩人であり、友人であり、それ以上にはなりえない。なってはならない。

物質的にも精神的にも、住む世界が違う。笑ってしまうほどだ。負わずともよい大怪我を負わせる前に、掠り傷を負わせて追い払うのが得策なのである。

目元に翳りを帯びたハルを、さも面白そうに浩信が覗く。口角を

上げ、「そうだなあ」と指を指してくる男の舌は今、おそらく人をおちょくるためにしか使っていないのだろう。鈴と二度目に会ったことを浩信に話してしまった自分の落ち度を、ハルは悔いた。

「・・・ま、俺あ、国家と国民の安全を守るために日々を全うする奉仕者だ。その俺が、“脅した”なんて物騒な言葉を聞き逃すわけにはいかねえ。おい、脅迫罪って知ってるか？パクられる前に洗いざらい話せ」

「黙秘権を行使するわ」

間髪入れずノーを突きつけると、浩信はシニカルな微笑を湛える。飄々とした態度を崩さないハルが、いい加減にこの話は切り上げねばと、今度は反対に要求してきた。

「くだらない詮索はやめて、さっさと用件を言ったらどうなの？見舞いに来たなんて嘘、転地が引っ繰り返っても信用しないわよ。何しに来たか、さっさと言ってとっとと帰ってちょーだい」

首を左右に捻りつつ、気だるそうな欠伸をして。左手でしっしっと追い出すジェスチャーをしてみせる。眠気を引きずる脳内を、ビールを最後の一滴まで呷って叩き起こした。

思考を切り替える。

この友人をここから追い出したいならば、得もないお喋りをしている場合ではないのだ。無駄な話を続けるだけ居座られてしまう。

浩信が何の利己目的もないままわざわざ自分を訪ねてくることはありえないと、それを知っているハルには、見舞いなどという見え透いた嘘が実に馬鹿馬鹿しく感じられた。鈴のことを聞き出すために来たというわけでも、先ずない。目的は別にある。直ぐに話さず勿体ぶる様子からして、自分にとってあまり歓迎できない話の内容

なのだろうと見当がつくが。一体何を企んでいるのやら。

くっと人を食ったような笑いを零し、友人に指摘された浩信は降参とばかりに片手をあげた。目を眇めて無表情で受けるハルに、顎を指でさすりながらのたまうのである。

「お前、その態度から察するに、やっぱり夢に見てたんだろ。“ここ”に来るまでのことを・・・どうだ？」

「――――ノブちゃん、あんた・・・」

「おっと、勘違いするなよ。今度はからかってるわけじゃねえ。そうだろうと思ってずばり当ててみただけだ」

要領を得ず、ハルは険しい顔つきになった。どういう意味か。その鋭い眼光で先を促せば、浩信は滔々と語り始めた。

「果たして俺の直感は当たったわけだ。そうだろう？このタイミングで、お前が昔の・・・いや、昔ってほどでもねえが、夢を見るってのはな・・・すなわち事実は小説よりも奇なりってことだ。皮肉なこった」

「・・・回りくどいわね」

「まあ待て、物事には順序ってものがあるだろ。いいか？今日俺がここに来たのは、お前に“依頼”があったからだ。それも、今回の相手は大物だ」

「・・・な」

ハルはそこで、その端正すぎる顔を驚きに歪めた。聞き捨てならない言葉を、聞いた気がした。

“依頼”。そう、目の前の男は言った。

「何ですって？・・・とうとういかれたの？私はもう何があっても依頼は受けないと言ったはずよ。そっちだって了承してたじゃない。」

「渋々、な。お前に強制させるだけの材料がなかっただけだ。あんまりやりすぎると上からの圧力もかかるしな。だから暫くは休ませてやっただろうが。――というわけで、だ。受けてもらうぞ」

手首をしならせ、ぴっと人差し指を突きつけた浩信が、最後は笑みを消して言う。半ば、命令だった。有無を言わさず、動揺の走るハルへ向けて、銃口のように指を向ける。

どくんと心拍が跳ねた。驚きは、やがて嫌悪へと姿を変ずる。

「・・・それは無理な頼みだと分かって言ってみてるだけかしら。じゃなければ本当にいかれてるとしか思えないわ。何の話かと思ってみれば・・・依頼だなんて、冗談じゃない・・・！」

吐き捨てるように低めた声色でハルは返した。苦々しく顰められた眉が夢見悪さどころではない苛立ちを伝える。

冗談じゃない。冗談じゃない。いよいよこの浩信という男がこの部屋にいることが嫌になってきた。何故今更、持ちかけてくるのだ。自分がどれほど“それ”を不快に思っているかも知っているくせに。もう二度とやらない。依頼は受けない。固く決意したのだ。自分は足を洗ったのだ。

「待遇はいいぞ。報酬も相応に払う。いいだろ、友達のよしみじゃねえか」

「っ、誰が・・・っ！！」

努めて冷静に語りかける浩信に、ハルは激高しかける。交わった

相手の視線の中に潜むものに勘付くと、けれどくっと言葉を飲み込まざるを得なくなった。

乗せられた。軽口に反応すると分かっていてわざと、この男は。言葉も態度も、楽しんでいることを隠そうとしていない。なんと小癪な。

奥歯を噛み、浩信を罵るかわりに、ハル自身も相応の眼差しを返す。大きく肩をつかって呼吸した。

・・・待て。落ち着け、こちらも冷静になるのだ。そう言い聞かせ、深く息を吐く。

熱くなるな、理性を失うな。誰が、この男の思い通りに事を運ばせるものか。

「・・・いいえ、とにかく何と言われようと私はやらないわ。誰が、何と、言おうと」

噛んで含ませるかのような物言いをして、ハルは浩信を見据えた。自然、喋るにつれて大きくなる声が部屋に木霊し、吸い込まれる。自分の意思は梃子でも変わらぬとばかりの、迷いのない瞳だった。黒目勝ちのその双眸は、真っ直ぐ浩信へと向けられる。

「今日の用はそれだけ?だったら骨折り損この上ないわね。期待するだけ無駄よ。邪魔だから、もう帰って頂戴」

相手の手にある缶ビールを取り上げ、玄関を指して退出を促した。何を考えているのか黙り込む浩信に、帰れ、と無言で凄み、自分は体を反転させる。

悩むまでもない。当然の答えだ。ハルは憮然として、取り上げた缶に残る中身を捨てた。無意識に、掌に力が篭る。アルミの缶は外圧に耐え切れず悲鳴をあげ、滑らかだった表面に歪な凹凸をつくった。だが怒りは収まらない。かん、と高い音を立ててシンクの上に

置いたそれさえも、浩信の飲んだものだと思うと憎たらしい。酒など差し出さねばよかったと甚だ後悔した。

余計なことを思い出させてくれるな。否が応でも、体と脳に染み付いたものは呆気なく蘇る。まして、よりによって、夢を見た今日この時に。

何の因果だろうか。断ち切ってしまいたい記憶も、感覚も、忘れた頃に襲い来る。否、忘れたわけでは、決してないけれど。油断してしまうのだ。忘れられそうなほどの平穏な日常を過ごしていると、見計らい足をすくってくるのだ。そうして抜け出せないところまで、引き摺り下ろされる。

身の毛もよだつ不快感。腸（はらわた）の真ん中、骨の髄の髄まで、背徳に侵食されている気がする。真実、忘れたくとも、身の内にあるものをどう忘れ、消し去るというのだろうか。

「・・・お前にひとつ、悪い報せがある」

ハルが苦痛に顔を歪めていると、背後からふいにそんな声が上がった。

## ＊悪夢／ハル視点（2）

思考に沈みかけていたハルは、はっと我に返り後ろを向いた。そこには先程と変わらない姿勢のまま座り込む邪魔な友人の姿。帰れと言ったのに動こうという素振りすら見られない状態に、またこめかみがひくつく。青筋を立たせ、怒りの雰囲気を纏ったままハルは問うた。

「聞こえなかったのかしら。か、え、れ、と。言ったはずなんだけど」

まだ居座る気か。うんざりしながら、再度退出を催促するハルに、浩信は従わず。ごそごそと内ポケットから取り出したタバコに火を点ける。ライターを仕舞うと、胡坐をかいた上に肘を付き、間を取って一度目を吸った。

「・・・！！ノブちゃん、あんたねえ！なに勝手に人んちで煙ふかしてんのよ！クサイのよ、やめなさい！」

きいっと牙を剥き、癇を立てるハルが缶ビール同様取り上げようとすると、それをさっとかわし、何事もなかったかのように二度目を吸う浩信。

そんな友人の態度を快く思うわけもなく、ハルはなお一層目を吊り上げた。逆撫でされた神経は、易々とは静まらないのだ。

「お前だって前は吸ってただろ」

「五月蝿い！私はもうやめたのよ！さっさと捨てなさいよ、このガキ大将がっ」

「お褒めに預かりまして。高い税金払ってやってんだ、どこで吸おうと俺の勝手だろ」
「どういう理屈よそりゃ！」

つい今しがたまで納まりかけていた怒りが、今度は別の方向で角を出す。深刻な会話から一変して、両者は口論を始めた。先程は冷静になれと言い聞かせていたが、それはそれ、これはこれ。転じて空気が明るくなると、容赦なくハルは声を荒げた。

「ていうか、さっさと帰りなさいよ！何が悲しくて男と二人きりで部屋にいなきゃいけないのっ」
「まあな、だったら出張コンパニオンでも呼ぶか。代金は経費で落として」
「アホか！要らんわ！」
「なんだ、デリヘルの方がいいってか。なら・・・」

どかっ、と浩信の横にある本棚が音を立てて揺れる。次いでどさどさと背表紙から倒れてゆく書籍の数々が、足元に積み上げられた。最後の一冊がぱたりと本の海に沈むと、おお・・・などと呟いて僅かに驚きに変化する、浩信の表情。足元から視線を移して見上げると、不穏な空気を孕むハルが立っていた。蹴り上げた本棚から緩やかに長い足を引いて、仁王立ちになる。
ハルは見下ろし、静かに言った。

「私が今、右手を使えないからって油断してると、痛い目見るわよ」

みしり。踵の落ちた部分の棚が、繊維方向に沿って大きく割れている。もう使い物にはならなかろう。

「・・・そうだった。お前は手より足が出るタイプだったな」

浩信はいそいそと携帯灰皿を出すと、銜えていたタバコを始末した。ち、と小さく舌打ちをしつつ、これでいいんだろうとこれ見よがしに肩を竦める。やれやれ、そう言いたげな澄ました顔つきである。ハルは癪に障り、もう一度、今度は本人目掛けて食らわしてやろうと足を上げた。

「あー・・・待てまて。悪い。謝るから、病院送りにはしてくれるな」

白旗を振り、浩信が降伏する。ふんっ、口ほどにもない。ハルは足を仕舞い、ベッド脇のヘアゴムを取った。口に銜え、左手で首筋に張り付く髪を纏める。そして大雑把に後頭部で結ぶと、できあがったポニーテールを揺らしてくるりと振り返る。

「・・・で？」
「あ？」

“――ふざけるのも大概にしておかなければ。”

そう自分を戒め、切り替えた。

肩の力は抜けど、背筋を伸ばして。肺に酸素をすうっと送り込む。壁に背もたれながら、部屋を一周見回した。壊したばかりの本棚が目に留まり、つい苦笑してしまったけれど、それも仕方ないだろう。全ては身から出た錆だ。自分を除いて、誰の責任でもない。罪を重ねるつもりはなくとも、罰から逃れてきた事実は変わらないのだ。

“・・・潮時なのかしらね”

心の中、そっと独白し、前を向く。

ハルはある種の覚悟を持って、核心を突いた。

「私に悪い報せって、なに？ノブちゃん、本当は今日、“そのこと”を言いに来たんじゃない？」

問いかける瞳に、不思議と恐怖はなく。ともすれば浩信がこの時見たのは、自分の笑顔だったかもしれない。

きっとそう、恐怖ではない。むしろ安息だったのだ。

期待も希望もない自分の未来が、過去の断罪に費やされるのだと、とうとうその日が近付いてきたのだと思えば。

少しは、ほんの少しくらいは、黒く染まった心も救われるような気がしたから。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

梅雨の時期を過ぎると日照時間が徐々に短くなっていくとはいうものの、八月末の日にあってそれを実感することはまだ、なかなか難しい。ただ真昼から夕方へと時刻が移ってゆくにつれ、太陽は降り注ぐ熱量を減らし、涼しさが顔を覗かせはじめる。桜瀬川（おうせごう）のさわさわとしたせせらぎが、蜩（ひぐらし）の鳴き声と相俟って耳を擽り、じっとり汗ばむ一日を過ごした人々にせめてもの安らぎを与えるのだ。郷愁を誘う夕暮れの空。落日は帰宅してゆく誰の背中をも等しく茜色に染め、夜の帳が下りる瞬間まで地上を照らす。道を行き急ぐ彼らは、決して目の前に、頭上にある美しさを発見できないだろうが、それもまた人それぞれ、各々の人生である。

片膝をつき、本を棚へと収め直したハルはふと、窓の外を眺めて立ち上がった。

「・・・・・・・・・」

ガラス戸を引き、更にはカラカラと網戸を引き、そこから見える景色をぼうっと見つめる。

「・・・綺麗な町」

無意識に零れたのは、ひねりも抑揚もない短い言葉。けれども無感動にぽつりと放った一言に、ハルは可笑しくなって苦笑を漏らした。

綺麗な町。しかし実際は何の変哲もない、普通の、ごく普通の町。都会と呼ぶにはやや田園地帯の多すぎる、少しごみごみした小さな町。のんびりとした刺激のない場所である。有名なものといえば、町を横に貫いている桜瀬川という名の大きな川くらいで。・・・というのも、なんでもその昔、親に反対されながらも将来を誓い合った男女がいて、来世で幸せになろうと身投げをしたのが、この川なのだとか。ちょうど満開の桜の木が身投げをした川の瀬にあったことから、男女の逢瀬とかけて、桜瀬川と名付けられたのだと聞いたことがある。

あまり縁起のよい由来ではなかろうに、巷では何が転じたのやら縁結びの名所になっているらしく、足繁く通ってくる町外の者もいるようだ。自殺の名所として有名になる、というのなら分からなくもないが・・・人の色恋とは奇妙なものだと思う。神頼みなどして、願いが叶うのだろうか。

ハルは愚問だな、とまた苦笑い、窓から望む川を一瞥した。個人的にはまあ、どうでもよい話だ。

川を繋ぐ橋、橋から延びる道路、娯楽施設や商業ビルの集まった中心地、学校、病院、やや外れにある住宅地、細い路地が入り組んだ裏町、田圃や畑、そしてまた道、畦道、空き地、白い煙を吐き出す工場や、鬱蒼と木々の茂る山間（やまあい）。

電線に烏が何羽もとまって、黒いシルエットを浮かび上がらせていた。むわっと圧迫するような熱気は息苦しく、空調の効いていない、まして窓を開け放った部屋では為す術なしだ。烏と、蝉と、蛙が合唱している。近くの道路を走る車の騒音。時折子供の高い声。猫の、犬の。

見渡すと雑然とした印象はやはり拭えない。けれどやはり、美しいとハルは思った。自分が立っているのは、古ぼけたアパートの一室で、高さは二階。窓を開けると斜め横から夏椿が枝葉を伸ばして視界を遮っており、見晴らしが最高というわけでもないのに。

## ＊悪夢／ハル視点（3）

「毒されたかしら・・・」

この住処に。窓枠に浅く腰掛け、独白を繰り返す。生温い風を首筋で受けつつ、視線はどこまでも遠く、遠くを見つめていた。

「・・・どうせこの町とも、近いうちにさよならなのにね」

ふう、と息を吐く。

こうして眺めていると、何だか実感が沸いてこないのだ。例えば、死刑宣告を受けた受刑者も、自分と同じように感じたりするのだろうか。詮無いことを考え、額から両目にかけてを、左手で覆った。

「・・・・・・」

今日は、疲れた。

いや、“今日まで”と言うべきか。

唐突に訪れたことではあったが、最初から、いずれこの時は訪れると分かっていたのだ。もう、いつ来るとも知れぬその日を恐れて、逃げ続ける必要などない。

既に覚悟はできている。ただ明日からは、罪もない者を傷付けることもなく、誰に関わることもなく、この町の片隅に跡を残すこともなく、ただ、そう。ただ生きてゆけば。残された時間を淡々と生きてゆけばいい。

自分の真実を知るのは、今ここには浩信しかいない。そしてあの男が、二度も自分の手助けをすることはなかろう。ここは日本で、

浩信にも己の立場というものがある。
今更決意を翻すつもりもなし、友人の人生を狂わせるわけにもゆくまい。

もう本当に、誰にも、傷を付けたくはないのだ。誰かが、自分に関わった罪のない誰かが、痛みを背負う姿など見たくない。誰も傷付けたくなどない。

ハルは覆っていた手を離し、宙にかざした。西日射す手の甲が眩しいほどに赤く、けれどその赤が、暗い記憶と繋がってしまう。

この手で、どれだけ正しいことができただろう。今まで、どれだけ後悔のない行いをやってこれただろう。
自分が繰り返してきた後悔に見合うだけの、意味のある道を歩めてきただろうか。誰に問い掛けても答えのない、途方もない疑問が頭をよぎる。

体に傷を負えば痛む。心に傷を負えば苦しむ。そのどちらの苦痛も知っていて、他に強いてきた。
だからせめて、今は、目の前で誰も苦痛を背負わぬように。自分が盾となってやれるように。

『・・・っも、誰も、来ないと思ってた・・・ありがとう、ございますっ』
『こんな迷惑かけて・・・私、厚かましい、ですよ、ね』
『ありがとう！ほんとにほんとに、ありがとうっ』

「・・・・・・」

反対にかざした右手、その真っ白なギプスから、記憶に新しい幼

い声が脳裏に浮かんだ。
鈴ちゃん、とハルは人知れず名を呼ぶ。呼んだ傍から、次々に思い出す、あの少女。

『ごめん、ごめんねハルちゃん・・・！痛いよね、本当にごめんなさい・・・！』
『嬉しいよ！友達って、思ってもらえて、すごく嬉しい・・・』

確かに一度目も二度目も、酷い目に遭うところだった彼女をできうる限りで助けられたのだろう。ショックと恐怖で怯えたあの様を目の前にすれば、何でもしてやらなければという思いに駆られたから。だから自分を偽ったり世話を焼いたり、なるべく少女が安心できるような接し方を心がけたつもりだ。
あの夏祭りの夜に負った心の傷は、一晩の労わりや優しさで完全に癒えるほど容易くない。多少面倒を見てやったから後は勝手にしろと放り出したくはなかった。必要以上に関わって恩着せがましくなる気はなかったが、鈴が望めば、助けとして差し伸べる手はあったのだ。
流石に、二度目に鈴を助けた時は彼女の無鉄砲さに据えかね、会うなり往来で叱り付けてしまったけれど。
素直で優しい子だと思った。欠点に幼さを垣間見ることはあったものの、無邪気で人を疑うことを知らないような少女だった。親心が芽生えてしまいそうな、庇護欲を掻き立てられる、そんな少女。
思っていること、考えていることがそのまま顔に出ていたな、とハルは数日前を振り返って笑う。
喜怒哀楽の表現が顕著で、子供扱いされるのを妙に嫌がっていた。こちらからすれば十五歳の少女など子供以外のなにものでもないのだが、なるほど本人にとっては対等に扱われないことは不服なのだろう。

何気なく言った友達という言葉に、たいそう喜んでいた鈴。遠慮がちに頬を染め、笑顔を湛える彼女を見て、自分も嬉しさを覚えた。
そう。嬉しかったのだ。
それは、自分も嬉しかったけれど。

でも、と思う。

自分は、あんなふうに笑顔を、謝罪を感謝を、与えられるべき人間ではない。そう、昏い灯りの点った心が訴えてくる。
どうしたって、あの少女の無垢な笑顔に見合う人間では、ないのに。

「はあ・・・参った」

窓枠から離れ、ハルはずるずると壁にもたれながら腰を下ろした。斜め下を向き、前髪の隙間から床を見やる。

今の自分を見たら、鈴は一体どう思うだろう。まるで人が変わったように情けなくなったこの姿を見たら。
今が本来の自分で、少女の前で多くのことを偽っていたのだと知ったら、どんな顔をするだろう。
きっともう会うこともない。そう、自分から仕向けたくせに。

「遠ざけておいて、本当に良かったわ」

二度目に家を訪れた時の、鈴の赤らんだ顔が瞼の裏に浮かんだ。危険信号だった。これ以上は踏み込ませてはいけない、と引いた線を、越えてきそうな予感がした。
そして一番ずるい方法で、歩み寄る鈴を止めたのだ。
自分を完全に信じきっていた彼女に、わざと男の顔を見せて。

何の自覚もしていない鈴にしてみれば、まさしく女そのものだった自分が突如見知らぬ男に変貌したのだから、さぞ混乱したに違いない。

いくら性別は男だと知っていても、この姿と態度であれば中々思い込むことは難しかったろう。

だからそこを利用した。彼女は、数日前に暴漢に襲われたばかり。一度味わった恐怖は、決して一朝一夕で忘れられるものではない。

ほんの少し、彼女の知らない一面を匂わせるだけで、動揺させることができたのである。案の定、鈴は困惑して口も利けなくなっていた。最早、自分に対する親近感など失せたに相違ない。懲りたはずだ。・・・気の毒だという思いはあったが、それ以上に、放っておけなかったのだ。

友人として表面上の関わりを持つならまだしも、個人的に深入りさせるようなことは決してあってはならない。

鈴は災難だったと思う。暴漢に遭って、助かったと思えば今度は自分に振り回されて。

――――正直、自分自身も、どうしたらよかったのか、どうしたらよいのかなんて分かっちゃいないのに。

「矛盾してるわよね・・・」

くすり、ハルは嗤う。傷付けたくない。けれど傷付けてしまう。変えられない自分に遣る瀬無さばかりが募ってゆく。

もう一度外を見ると、夕方の太陽は地平線の彼方へ沈みかけていた。徐々に闇を伸ばして暗くなりゆく東の空には、おぼろげな月も顔を出している。残暑は未だ厳しくもあれど、季節も夏から秋へと色あいを変えつつあるようだ。

この町に秋が来たら、出て行くか。

区切りをつけよう。ハルは緩く口角を上げて空の果てを眺める。

潮時なのだと、改めて感じた。

ここにい続ければ、周囲に余計な災いを振りまきかねない。

近くには浩信がいる。大恩がある。迷惑は掛けられない。

## ＊悪夢／ハル視点（４）

「・・・・・・よしっ」

そうと決まれば行動に移すのみ。ハルは張り切ったように短く声を発し、すっと立ち上がった。

「疲れたなんて言ってられないわ」

クローゼットを開ける。ハンガーに掛けていた衣類を片っ端から取り、どさどさとベッドの上に重ねていった。そして使い古されたボストンバッグを引っ張り出し、手荒く押し込んでゆく。草臥れた革の表面が、薄暗い部屋に差し込む僅かな外の明るさを反射して、光沢を放った。

不要な衣類を詰めると、次は本棚の前に立つ。端から背表紙を指でなぞっていき、いくつかの書籍を手早く抜き去った。それらを衣類の上からバッグに放り投げ、開きっぱなしだった窓を閉め、今度はベッド脇の引き出しから手帳のようなものと、鍵、革のカバーに包まれたやや細長いものを取り出した。一旦腰掛け、ハルはそのカバーの中身を確かめる。クローゼットからまた新たに、最初のものよりも大きなバッグを出してくると、ファスナーを開けてざっと中を覗き数をかぞえ、確認を終えた後に、前述の三つを仕舞いこんだ。

「・・・・・・」

ふと考え、じっと散らばる荷物を睨むように見つめるハル。すらり、寝具の上で組んでいた足を解き、向かうは台所である。

安普請ゆえに粗末なつくりの、加えて老朽化の進んだシンク周辺、の、収納扉を開く。先ずは上。ぎいと極めて耳障りな鳴き声をあげ

るそれの奥へ、ハルは手を伸ばした。クローゼットの中と同様に、けれど比較するとふた周りほど小ぶりな、大き目のポーチが現れる。同じく入っているものを確かめ、隣の扉へと移った。上が済むと長身をしゃがめて、手際よく下の扉も。手探りで左奥の、収納の天井辺りをまさぐった。がり、と引っかかる音が響き、「よっ」と涼やかな声で腕を引いた。べりり。粘着テープが剥がれる。剥がれたそこから落ちてきたものを手に収め、さて仕舞いは右奥。

シンク周りを回収したハルはベッドに戻り、一通りの具合を詳細に点検し終えた。久しく触れていなかったとは凡そ思えぬ馴染む感覚に、若干複雑な感情が渦巻く。だがまあ、これからのことを考えれば馴染まぬより馴染む方がよい。使い勝手よく複数に分け、細々したものを押し詰め、片方のバッグのファスナーを閉める。我が子にするようなひと撫でを上から送り、後はもう片方のバッグである。

思い立ったが吉日ではないが、躊躇いが生まれる前に荷造りはしておかなければならない。それに甘んじて罰を受けるとはいえ、どこの馬の骨とも知れぬ者に断罪の権限をくれてやるつもりもないのだ。今ここでは、まだ、――これらが必要である。

つと親指を沿わせ、眼光炯炯たる表情は前髪に翳る。外光以外は照明のない一室で、暫く縁のなかった鋭利な静寂がハルを包んだ。

帰する所自分は、どこまでいっても修羅でしかない。

じじ、と鍍金の剥げかけたスライダーを引っ張り、二つ目のバッグも口を閉じようとしかける。

しかし、ハルの左手は動きをぴたりと止めた。

ピンポーン。玄関から届くドアチャイム音。顔を上げ、ハルはそちらに首を伸ばした。宵の口に棚引くしじまで、やけに大きく響いた、たった一度の呼び出し音。空気に溶けゆくように再びしんと静

まる部屋の中、しかしハルは立ち上がり玄関へ向かおうとはしない。

「・・・・・・・・・」

――誰だ？

真っ先に意識に上ったのは、そんな疑問だった。浩信はとうの昔に帰ったので今更戻るはずもない。連絡もせず直接ここを訪ねてくる者も、まずいない。些か不審を覚えて険しくなる眉間。眇められた瞼の奥、ぬばたまの瞳がじっとドアを射抜く。そしてさっと視線のみで斜め後方を見やり、窓の外の薄暗さを、次いで壁に掛けてある時計の時刻を目視した。刻限は十九時を回ろうという頃だ。こんな時間に、一体誰が。

ハルは今一度玄関を睨み据え、そ、と後ろ手にバッグの中身のひとつ――拳銃を手にした。ドアの向こうを注視しつつ、弾を装填したマガジンを確認し、素早くスライドを引いて安全装置を外す。銃を持つ左手首の下に右手首を添え、足音を立てず腰を上げた。奥の部屋を出で、台所を横切り進む。

昼間に浩信が言っていた言葉を思い出す。事実は小説よりも奇なり。夢を見たこと。依頼を持ちかけられたこと。それを断ったこと。極めつけは、“悪い報せ”。

まさかとは思うものの、今日に限って重なりすぎた事柄を偶然の一言では片付けられないような気がしたのである。

「どうやって居場所を掴んだか知らないけど、舐められたもんだわ」

声を低めたハルは、ドアを隔て向かいに立っているであろう人物に冷たく言い放った。

返ってくる物音はない。声も、ない。

「正面きって挨拶か？ご丁寧に玄関からとは・・・畏れ入るよ」

柔和な口調が削がれる。銃を構える姿勢は崩さず、ちくりと針刺すような緊張感を漂わせるハル。相手の出方を予測して、引き金にかける指先に神経を行き届かせた。反応のなさを奇妙に感じながらも、隙を見せぬよう、外の気配に集中する。

「・・・・・おい、こっちはもう構えて待ってやってんだ。黙ってないで、かかってくるなり返事するなり、し」

「あの！！」

だが声を遮られたその瞬間の驚きには、流石に集中も緊張感も勝てなかった。・・・と、いうか何というか。思いの外若く・・・いや若すぎる返事に、虚を突かれた。しかもやけに上擦った高い女の声で。こちら以上に極度に緊張した様子が伝わってきたのである。敵意で顰められていた眉は、あれよという間に間抜けなそれになる。

女？それも子供。

・・・“あちら”はよほど人材不足なのか。それとも何か奇計でも図っているのか。この手のこととなると疑り深いハルは、不覚にも目の前にいる者の正体を咄嗟に判別できなかった。直後に続けて投げかけられた言葉によって、ようやくそれが何者なのかを知る。

「こっこんな時間にごめんなさい・・・え、えっと、尾本鈴です。・・・・・・・・・ハル、ちゃん？」

すぐさま構えていた銃を下ろした。

よもやそんなことは。俄かには信じられずドアの覗き穴から外を見る。そうして名乗ったとおりの人物がぽつんと所在なげに立っていることを見留め、二重にも三重にも驚かされたハルは慌てて鍵を開けた。内側に開かれたドアの隙間からその小さく頼りない姿が現

れ、もうどのように反応したらよいのか分からなくなる。ぽかん。先程の張り詰めた空気は見事に消え去ってしまった。

この少女が、消し去ってしまった。

「す・・・す、ずちゃん・・・」

はてさて、これも悪夢なのだろうか。申し訳ないが、せめてどうか夢であってくれ。ハルはそう乞わずにはいられなかった。

【鈴の夏／悪夢（ハル視点）】・終

# ＊恋の行方（1）

水族館から一路帰宅の途につき、鈴が始めにしたこととといえば、ハンガーにかけっぱなしだった浴衣を畳んで仕舞ったことだった。クリーニングから戻ってきた、その名も“忘却の金魚”である。紺の地に朝顔、紅白の金魚を泳がせた何とも風雅な一枚なのだが、帯と巾着がセットになった百貨店のセール品だ。しっとりと肌に張り付くほど夜雨を吸ったあの晩とは打って変わり、壁に掛けられて久しいそれはぱりっと薄い糊の利いた新品同様の仕上がりで。これなら来年以降も続けて着まわしができそうだと、皺を寄せぬよう畳みながら鈴は思った。

浴衣を箪笥に仕舞い、さてと、と腰に手を当てて気合を入れる鈴が次に行動に移したことは、新学期を目前に立ちはだかる大仕事であった。何を隠そう、夏休みの課題だ。本日は八月二十八日。華々しいサマーバケーションも残すところ三日なので、残念なことに、非常に残念なことに、まだ課題を終わらせていない鈴はあと三日でそれを完遂させねばならない。そうでなくば、九月一日の課題を提出する折に教師の鉄槌を食らうことになってしまう。そうして新学期早々、下校するクラスメイトたちを尻目に、一人ぽつねんと居残りをする破目に陥るのだ。ああそんな自分の姿が容易に浮かんでしまうだけに、危険値は高い。黄色信号なのである。妹とは違い鈴はお頭（つむ）が弱いので、ひとつひとつの課題をこなしてゆく時間も人並みより長く。夏季休業をカウントダウンするカレンダーをうむむと睨めつけ、後三日か、と険しい顔つきで勘定するのだ。三日。一日二十四時間なので三日ということは七十二時間。七十二時間全てを勉強に費やすのは色々な意味で無理であるから、結局のこと一体自分にはあと何時間残されているのだろうか。睡眠・食事・風呂にそれ

からそれから・・・ととりあえず勉強以外の必要事項で時間を削ってゆく鈴。けれども途中で計算が上手くいかなくなり、やはり分からないままに終わってしまった。

　兎も角も、どんなに頑張ったところで七十二時間以上にはならないのだ。鈴は未消化の課題を指折り数え、間に合うかなと大いに不安に駆られつつも机に向かった。何はさて置き、問題集を開きシャープペンシルを握るところからである。今日もまだ日が暮れたわけではない。予定よりも早く帰ったため、まだ外は充分に明るいのだった。妹・杏との喧嘩で帰宅後の時間が多く確保できたことに皮肉を感じる鈴だったが、しかし差し当たって乗り越えるべきは手元の強敵。さながら出陣を迎える武士のごとく、鈴は姿勢を正して座った。

　自分がやらなければならないことを、きちんと済ませておかなければ。帰りの電車の中でハルへの想いを気付くに至った鈴は、彼に会いたいという衝動をけれど抑えて家に到着した。本当はすぐにでも会いたかったし、片腕の不自由という不便を強いている彼の状態も心配だった。だがハルに言いたいこともはっきり纏まっていない今、感情のままに突っ走って家に押しかけては、また前回と同じように口が利けなくなりそうで怖かった。杏とのこともあり、恋心を自覚したばかりの今の自分には、落ち着く時間が必要だと思ったのだ。子ども扱いされたり子供っぽいと周囲から揶揄されたりする自分が、そんな現状を打破するには冷静さが欠けている。ハルに会いたい。けれど会った後はどうしたいのか。何をどう伝えるのか。足りない脳みそでしっかり考えなければ。鈴はそう思った。

　急いては事を仕損じる。幸いにもまだ今は夏休みなのだし、考える時間もゆっくりあるだろう。――そのように余裕をかましていたのが束の間、何か忘れているような気が、と小首を傾げた鈴ははたと気がつく。

そうだそうだった、確かに幸いにもまだ今は夏休みだけれど、今日は二十八日で。終わっていない課題があるのに、三日後には学校が始まるのだったと顔を蒼白にした。ここ数日ハルのことばかりが頭にあって、更に今日の杏との口論もあって、どこか意識の外に転がってしまっていた学生の本分とやらである。それが急に現実味を帯びて鈴の前に差し迫ってきた。ハルに対するもやもやとした気持ちが晴れて形となった途端に思い出すのであるから、自分の単細胞ぶりもまったく頷ける。だけれど自己嫌悪の沼に嵌っている猶予などない。それもこれも全て日々を無為に過ごしてきた近頃の自分の責任なのだ。鈴にとって手強き相手なのは間違いないが、幼稚な己からの脱却を図るべく、これも試練の一つとして受けて立とうとやや大袈裟に意気込んだ。恋の病で悩む前に、自分の義務を果たすのである。

「んと、なになに・・・」

鈴はペンの頭を顎に当て、取り掛かった問題集の文章を読み進める。むむむ、この問題は、何やら過去にやった覚えがある。あるけれど、思い出せない。どんな解き方であっただろうか。数式の羅列とグラフを交互に見比べ、一問目で早くも手詰まりとなった鈴は教科書を取り出してぱらぱらとページを捲った。絶対に、前学期で教わったはずなのだけども。これでもないこっちでもない、中々見つからないなあと眉を吊り上げ、口をへの字にして只管睨めっこである。

あった、これだと表情を輝かせてその問を解いたのは、二十分後だったか三十分後だったか。

前途多難を痛感すれど、負けるもんかと邪魔になる前髪をヘアクリップで留めた鈴であった。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

結果としてその意気込みと努力は功を奏す。

どっこい人というものは本気を出せば得手不得手など関係ないのだなと、半ば自画自賛する面持ちで積み上げられた消化済み課題の山々を眺めたのは、その二日後。

やれ鉄槌だのやれ居残りだの戦々恐々と、かつ黙々と問題集やらプリントやらに取り組んでいたところ、ふと状況を顧みてみれば手付かずになっている課題は、残すところ一つだけになっていた。あまりに集中しすぎていたせいか、はたまた鈴がちゃんと残りの課題の量を把握していなかったせいかは定かではない――後者の可能性が高くはある――が、その最後の一つをこなせば新学期に待ち受ける恐怖はないのだと鈴は驚き喜んだ。なんだ、自分もやればできるではないか。さも落ちこぼれのような心境で孤独に地道に机に向かっていたことを振り返ると、胸に痞えていた鬱屈とした気分がすとんと腹の真ん中に落ち着いたようだった。初秋へ誘うかのような少し鮮やかさを失った空。雨に煙っていた昨日の余韻を匂わせる、湿気に満ちた屋外を脇目に、鈴は一息つこうと席を立った。

二階の部屋を出で、短い廊下をスリッパでぱたぱたと歩く。階段をとんとんと心持ち軽い足取りで下りてゆくと、一階のリビングでは部活帰りの杏と、ゲームに夢中になっている都がいた。

「あ、鈴姉だ。宿題やるって張り切ってお母さんに気味悪がられた鈴姉だ」

「うるさいなあ、気味悪くていいもん」

「宿題終わったの？」

「あと一つ」
「へー、頑張るんだね・・・・・・あっ、ああ！また倒せなかったあっ！もうこのラスボス最悪！」

どおん、と何かが爆発するような音がテレビから聞こえ、三女の都が怒声とも悲鳴ともつかぬ声をあげて嘆く。鈴姉が急に下りてくるから気が散ったじゃん、と理不尽な非難を妹にされながら、鈴は杏の隣のソファーに座った。

「あっと・・・杏、お帰り」
「・・・・・・ただいま」

形式的な挨拶を交わし、鈴はちらりと次女を見やる。反してぷいとそっぽを向く杏は、そ知らぬ顔でスポーツドリンク片手に水分補給をしていた。

「お母さんは？」
「知らない」
「そう、もう夕方だし、買い物かな？」
「・・・・・・」

か、会話が続かない。流れる気まずさに鈴はあわあわと言葉を探す。言葉、言葉、杏の機嫌を治す、杏と仲直りする言葉を・・・言葉をなにか。

そわそわする鈴を知ってか知らずか、対して杏は携帯電話を弄ったりぼうっとテレビ画面を眺めたりしている。加えてその背中からは“話しかけてくるな”という拒絶が感じられたので、空しく鈴の口は閉ざされてしまった。

はあ、と溜め息が零れる。

二日前、つまり水族館へ行って喧嘩をして帰って以降、鈴は杏とまともな会話をしていないのである。帰りの電車の中ではそれも仕方なしと無理に話しかけることはしなかったものの、一日過ぎ二日過ぎても状態は一変せず。こちらとて謝る気はない、けれどずうっとこの調子なのも姉としていただけない。誰も好き好んでいがみ合っているわけではないのだ。意地を張るのも嫌なので、そうして鈴は何もなかったふうを装って話しかけた。

だがこうして顔を合わせても、いかんせん相手は和気藹々と話を弾ませる気など毛頭ないらしく、実に素っ気無い返事ばかり。勉強の合間を縫って幾度か試してみても同じなので、意気消沈である。

まだ怒っているのかなあ、と視線を合わせない杏を視界の端で捉えつつ、鈴はテーブルの上にあったチョコレートをひとつ口に放った。そういえば結局、杏がつくったパウンドケーキも食べかけで取り上げられてしまってたなあ。なんだか遠い日のことのように鈴はぼんやり思い出した。冷蔵庫で冷やされていたのか、冷たい甘みが口に広がる。

がりがり、と耳に小さく届く音があった。無駄に大きなテレビの音量に紛れて、ともすれば聞き逃しかけたそれを辿ってみれば、濡れ縁に続く窓の隅っこに留まる視線。きょと、と不思議に思った鈴の瞳が、雨戸の向こうからにゅっと現れたものを映した。

「あ」

声をあげ、立ち上がりととと、っと窓まで近付く鈴。鍵を開け、からからと窓も雨戸も少しだけ開いた。

そして目線を合わせるようにしゃがみこむ。

「オヤブン」

なあご。と低めの声で甘えてくる黒ぶちの雄猫。濡れ縁の上に座り、道端の水溜りでも踏んだのか、しっとり濡れたその前足を鈴の片膝にかけてきた。久しぶりだね、と指先で喉元を撫でやれば、顔を擦り付け細い目を更に細める。

今はテレビゲームに熱中している都が名付けた、少し顔の厳めしい野良猫である。野良だけに毛並みは艶もへったくれもないが、斑なぶちと長い尻尾が凛々しい男前なのだ。今日も腹を空かせてきたのだろうか。強面とは違い、撫でてなでてとばかりに喉を鳴らすさまはとても可愛らしい。よしよし思う存分撫でてあげよう。鈴は頬を緩ませ、やがて腰を上げた。

「えっと・・・待っててね。今ご飯出してあげるから」

そう言って、再び室内の奥へ戻りかけた鈴だったが、またしても目に留まるものがあって動きを止める。

窓の向こう、庭と塀の向こう側に、人影が。それも見知った顔があった。

その人物、槻尾浩信は、尾本家の正面の道路でひとり、タバコに火をつけていた。

# ＊恋の行方（2）

「あの・・・！」
「よう」

玄関から慌しく出てきた鈴に、浩信は事務的な声音で返してきた。どうしたんですか、と突然訪れた男に戸惑うまま問い寄ろうとしたところ、つと吸いかけのタバコを道路に捨て、革靴の爪先で潰そうとする浩信を見咎め、鈴は口を噤んで別の言葉を発した。

「ちょ・・・タバコなんか捨てないでくださいっ。しかも、よりによって人の家の前で」
「・・・あん？」

あまりに自然な動作で、なおかつ堂々たる態度であったので、開口一番が文句になってしまったのは止むを得ない。口を尖らせしばし憮然とする鈴が無言の抗議を伝えると、数秒の間の後、浩信は屈んでタバコを持ち上げた。砂の付着するそれを懐から出した携帯灰皿に収める姿は、まさに渋々といった様子である。

――なんと、灰皿を携帯しておきながらポイ捨てするつもりであったのか。鈴はむう、と不満顔をより色濃くし、じとという眼差しを送った。

「それで、何の用なんですか」
「ご挨拶だな。俺はどこに行っても煙たがられるのか。ったく、今日はどいつもこいつも」
「・・・はい？」

大仰に肩を竦め、目の前の長身の男は言う。意図しているものが分からず鈴が首を捻ると、相手はあまり品があるとは言えない、からかいを含んだ笑みで上から見下ろしてきた。

「いいのか？俺にそんな態度とって。俺はお前を貞操の危機から救ってやった恩人なんだぜ。感謝の心はどこへいった？」

う、と喉で唸り弱腰になるのは鈴である。ずるい、そんな言い方。恩を笠に着て脅すなんて。今のはタバコをポイ捨てしようとしたそっちが悪いんじゃないか。被害に遭った本人を目の前にして貞操の危機だの明け透けな物言いをする浩信に、今度は鈴が渋々といった様子で返答する。

「違いますっ。感謝していないわけないじゃないですか。本当に言葉じゃ言い表せないほど、その・・・槻尾さんと、ハルちゃんには感謝しています」

本当です、と付け足し、鈴は真摯に男を見上げた。それはそうだとも。当然である。浩信の言葉は事実で、この男は恩人以外の何者でもないのだ。気を取り直し、渋面から力を抜く。

「で、改めてどうしたんですか？もしかしてあの事件で何か用でも」

「いや、そっちはまだ片が付いてない」

「片？」

「今日はな、まあついでに寄ってみたというか、お節介というものを焼きに来てやった」

ふふん。言うや否や、鼻で笑う浩信は状態を屈め、間近で鈴をにやつきながら覗き込んだ。ぎょっと仰け反る鈴を、物知り顔で見つめる。

「え、ちょ、ちょちょっと！な、なんなんですか？」

半歩下がり鈴はびくびくと怯えるように両手を前に出した。なんだなんだ、どうしたというのだ。矢庭に肝が冷え、胸元を押さえると。

「なあ嬢ちゃん。見かけは元気な振りしてるが、あんた男が怖いんだろ」

「っ、え」

「顔が青くなってるぜ」

ほらな。塀に手を突き、ずいと近寄る浩信は覆いかぶさった鈴の頬から耳元をさらり、艶かしく触れる。一瞬体を大きく震わせて硬直した鈴に、喉の奥で笑った。そして見開かれた眼が僅か恐怖の色を宿すのを認めると、表情をふっと緩ませて退く。息を詰めたように反応のない鈴の頭を、ぽすっとひと撫でして。

「大丈夫だ、別にとって食おうなんざ思っちゃいねえよ」

「・・・・・・あ」

「まあ俺は、あの変態野郎とは違って見た目も完全に男だからな」

「・・・・・・・」

鈴は真っ白になった頭でただ浩信を見つめた。どくどくと嫌な心臓の音が全身に血液を送る。手足の先が体温を失ったように冷たい。なに、とたった今言われたこと、されたことを理解できないまま呆然としていれば、今度は幾分か優しげな目元をして浩信がこちらを見た。

「これは俺の勘なんだが、あんたハルにも今と似たようなことされ

ただろ」
「・・・え・・・な、なんで」
「で、怖くなって逃げた」
「！」

言い当てられ、如実に表れた驚きの顔色を浩信は可笑しそうに笑った。蘇る光景に紅潮してゆく頬を押さえ、片や鈴は狼狽する。

“・・・なに。なんなの？なんで？”

疑問符ばかりが浮かぶ、思考の停止した脳内。どうして勘でそんなことが分かるのか。どうしてこんなことをするのか。浩信はどういうつもりで、どうして。

男が一頻り笑い終えるまで、鈴はぱくぱくと口を開閉させて立ち尽くした。言うべき言葉が見つからない。

「ほうほう、ガキのくせして、色気づくのはいっちょまえか」

赤くなる鈴の顔が浩信の目に留まる。今度は一体なにをされるのか、思わず身構えた鈴に腕が伸びる。額がぴんっと撥ねられた。撥ねられたのである。

「・・・な、なにす」
「俺とは反応が違う。あいつに惚れたな」
「・・・！え、あ、う」
「ませガキ」
「・・・・・・！」

にたにたと湛えられる笑みに、そこで鈴はようやくひとつ思い知る。からわれたのだ。自分の反応を面白そうに眺める、この男に。

「あ、あなたには関係ないですっ！」
「へえ、そうか？」
「そうです！も、人で遊ぶなら帰ってください！」

閉口していた反動なのか、近くに駐車してある車を指差し、鈴は唾を飛ばす勢いでそう言った。顔が熱い。ハルに対する感情を言い当てられ、余計に火照ってしまう両の頬。何故いちいち図星を突かれねばならないのだ。しかも、この男はガキと言った。二度も！

「わ、私あなたを誤解していました！そんなに意地悪な人だったなんて」

前回会った時は、もっと優しかったはずだ。確かにひどく無愛想ではあったけれど、今のように鈴をからかって笑ったりはしなかった。労わりの言葉をかけてもくれた。気を遣って服も与えてくれたし、自宅まで送り届けてくれたというのに。今日の浩信はどこか意地が悪い。鈴は非難を込めて見上げる。

「親切もただじゃねえんだぜ。この前は職務を全うしたまでだ、仕事だよ」
「な・・・じゃあ全部仕事だから仕方なくやったって言うんですか」
「仕方なく、ってのは違う。俺は仕事に余計な感情を持ち込まん。警察がとるべき態度で接しただけだ」
「・・・そのわりに無愛想だったけど」
「ふん」

あの晩面倒くせえ、やら、仕方ねえやらと不満を零していたのはどこの誰だ。どの口がそんなことを言う、と鈴が呆れていると、腕を組み、整った顔で浩信はこちらを見つめ返す。じゃあ逆に訊いて

やろう。そう切り替えし、問い掛けてきた。

「あの変体野郎だって同じだと思わないか。最初に会った時と二度目に会った時、嬢ちゃんの前で違う顔を見せただろう。見た目に騙されて信用しきっていたあんたに、あいつはどんな顔して迫った？」

「・・・・・そ、」

「ガキにゃ分からんかも知れないがな、人を見かけで信用するのは愚かなことなんだぜ。その裏で想像もつかないような本性を隠してやがることもあるからな」

「は、ハルちゃんはあなたみたいに意地悪じゃありません！」

反論する鈴を、底の見えぬ双眸が見据える。容赦ない視線にたじろぎながら、しかし鈴は目を逸らすことなく言い切った。

「ああ、確かに意地は悪くねえがな。・・・だが、あいつも別の顔を持ってるんだ。それも俺なんぞ比べようもないほどかけ離れた別の顔をだ。嬢ちゃんが手に負える野郎じゃあねえ」

「？どういう意味ですか」

「そのまんまの意味だ」

ついと意味深なかんばせである。鈴の探るような眼差しに、半眼で浩信は顔ごと逸らす。謎かけをしている気分だ。はっきり言えばよいのに、隠されたことを仄めかす言葉だけ。鈴は不可解げに首をかしげた。

かけ離れた、別の顔？手に負えないとはどういうことなのだろう。

「よく分からない、けど・・・でも私は、また会いたいって思ってるから」

「ハルが、あんたの思うような男じゃないって分かってもか？少し迫って脅されたくらいでびくついて逃げるようなお子様に、一体何

ができる」
「・・・っだから！次は逃げずに、自分の気持ちをちゃんと言います！それに・・・迷惑ばかりかけてるから、今度は私が恩返ししたいの」

後半は目を伏せて、心に点った罪悪感を抱えて鈴は話した。続けて吐露する。それに。

「それに、私はハルちゃんを、他の人から聞かされたことで判断したくないんです。自分の目に映った彼の姿を信用したいし、誰がどう言おうと、私にとってはそれが全部だから・・・彼がどんな人かは、誰の言葉でもなく自分で決めます」

大きく肺に残暑の空気を吸い込んで、顎を上げて言葉にした。背筋がぴんとなる。どうだと言わんばかりの宣言である。だから私はあなたの指図は受けません、と強気の瞳が真っ直ぐ浩信のそれと対峙した。

「・・・ぶ、くく・・・」
「な・・・なん笑うんですかっ」

なれど、悲しいかな、鈴の真面目っぷりは伝わらないようで。鈴の言葉をどう受け取ったのか、浩信は暫時意外そうな表情をしてから、笑いを堪えきれない様子で口元を覆った。よくよく人を小ばかにした態度を繰り返す人だと鈴は憤慨する。こちらの思いをまるで理解していないらしい。やっぱりこの人は、ただからかうために来たんだ。そうに違いない。どうしてハルはこんな人と友達になっているのだ、と疑問を抱かずにはいられない。

「いや、悪いわるい。別にあんたを馬鹿にしたわけじゃねえよ」

「うそだ！もう、もういいですっ」

どうせ何を言ったって笑われるだけだと諦めて、膨れっ面で鈴はふいっと横を向く。ぽんぽんとあやすように頭に乗せられた手が疎ましい。ハルとは違う、感情の篭っていないひたすらに幼子を宥めすかすような意図の掌だ。

「あいつにまた会いたいって言ったな」
「それがどうかしたんですか」
「なら、早くした方がいいぞ」

え、と聞き返した鈴が背けた顔を男にまた戻して。なんのこと？と問う。その後に聞かされた言葉が、完全に無防備だった鈴の心も体も、すうっと氷のごとく居竦ませた。地面へと縫い付けられた足に感覚が返ってきた時には――・・・もう目の前に人影はなくて。周囲に高級車も停まっていなかった。

数分間なのか、或いはそれ以上か。鈴はただ立ち尽くしていた。風のさざめきに庭の草木が擦れる音が、しんと蔓延る静けさの中でやけに大きく響いていた。見とれるほど美しい夕方の彩雲を背に、長くなる影をぼうっと網膜に焼き付ける。日が暮れる。帰ってこない姉を心配したのか、お姉ちゃん？と玄関から出てきた杏が鈴に呼びかけた。

「あ・・・うん」

ゆるりと振り向いた鈴の目に、先程の力強さは薄れてしまっていて。頭を占めるたったひとつのことが何度も何度も耳元で再生されているようだった。

――「あいつは近いうちに町を出る。出て行けば二度とここに

は帰ってこないだろう」

「・・・っ」

いなくなってしまう。ハルが、この町から、出て行ってしまう。告げる瞳が嘘を言っているようには見えなかったから。真実なのだと思う。受け止めるにはショックと痛みを伴う言葉を、聞いてしまった。知って、しまった。

ハルが、いなくなってしまう。

## ＊恋の行方（3）

――“行かなきゃ”

もしかして、いやもしかしなくともそれは今日なのではないか。停止していた思考が再び緩やかな歩みを始め、そう考えたとたん、背筋を駆け抜ける悪寒にも似た感覚が鈴を動かしていた。一度家に戻り、けれど自室を出て転がるように階段を下りると、何も持たぬまま鈴は家を飛び出した。杏の制止の声が後方でしていたようだが、あいにく耳に意味をなして届かず。――びゅうびゅうと湿った風の鳴る音が鼓膜を叩きつけるにまかせ、鈴は踵の履き潰した靴で駆け出していた。

「はあ、はあっ、う・・・」

住宅地の整備された、だが入り組んだ道の角を曲がり、右へ左へ、また右へ。妹と同じ制服を着た帰宅途中と思しき学生の横を通り過ぎる。落日が刻々と紅の色を深めてゆく空の下で、鈴は早くも息切れをさせ始めて、いながらも。それでも胸に去来するはとてつもない不安だった。

ハルがいなくなってしまう。浩信は言った。まるで話のついでに思いついたとでもいうかのような、ちょっとした忠告だった。二度と帰っては来ないだろう、とそう素っ気無く添えた一言は、明日の天気を占うみたいに。そのくせこちらに疑心を抱かせぬほどの、嘘の欠片も見当たらない、笑みの抜け落ちた顔で、浩信は言ったのである。――ハルが近いうちに、この町を出てゆく。

なんて間抜けなことをしたのだろう。言われるがままただ話を聞いて、近いうちにとはいつのことなのか訊き出さなかった、自分の

鈍間ぶりを憎く思いながら鈴はひた走った。もしかしたら案外遠い日のことなのかも知れないし、と楽観視したい気持ちが、しかし打ち消されるのである。ハルにまた会いたいと言う鈴に、早くした方がいいぞとまた促したのも浩信なのだ。つまり早く会いに行かなければ、あるいはハルに会える機会など逸してしまうかもしれないのだと。彼は言外に言い含めたに違いない。・・・そうなのだ。ということは、ハルがこの町を出てゆくのはきっと、そう遠くない日、文字通り近いうちなのである。

一度想像してしまえば芋蔓式に嫌な光景が脳裏に沸き起こった。ハルがいなくなってしまう。呪詛のように延々と巡るひとつの事実・・・いや、近い未来が、もし明日にでも現実となってしまったら。鈴は考えたくなくて頭をぶんぶんと振った。振った傍から、でもその可能性は消えなくて。ああ違う。もしかしたら、本当は今日にでも、彼はどこかへ行ってしまうとも限らないのだ。近いうちとは、すなわち今晩であれ“近いうち”なのだから。

だから鈴は駆け出していた。こうしている今にもハルがあのアパートを去って、影も形もなくなっているのではと募る不安を抑え込んで。連絡先の一つも知らない鈴が、ハルの居場所を確かめるには、彼の住処とする部屋を訪れるしかない。あのアパートまで行って、ドアを叩く以外に術はない。どうかどうか、まだそこにいて。これきり会えないまま、本当の本当にさよならなんて、絶対嫌だ。だってもう、自分は恋心を自覚してしまった。

住宅地を離れ、街頭がぽつぽつと点在する旧道の脇を走る。ハルの家までは車で十分強とかかってしまうので、いくら駆け足とはいえ、人の歩みでは倍を上回る時間がかかるだろう。鈴はきりりと痛んできた脇腹に手を添え、前回浩信の車で通った道ではなく、違うそれを選んだ。一秒とて惜しく思えば、大通りを行って遠回りなど

している場合ではない。新道に比べれば暗く人通りの少ないそこを、わき目も振らず走る。開いているのかいないのか分からないような商店が立ち並ぶ、旧道を。

「・・・も、私のばか・・・！」

弾む呼吸を抑え、鈴は自身を叱責した。課題に勤しんであと一つだとか喜んでいる場合ではなかった。まだ時間はあると高を括って、ハルに言いたいことをゆっくり考えている場合ではなかった。知らなかったから。ハルがもうすぐいなくなってしまうなんて、知らなかったから。――そうだ、鈴は知らない。いつ町を出てゆくのか。そもそもどうして出てゆくのか。ハルが何をして、何を考えているかなんて、ひとつも。

鈴が知っていることといえば、ごく僅かで。こうして大事なことも他人から知らされてやっと気付く。やっぱり自分は無知なのだ。浩信が言うように、鈴が知らない彼など、きっとごまんとあるのだと。痛感する。

ハルの家から逃げるように帰った日、鈴は彼がまるで知らない人のように感じられて驚いた。驚き、ふと怖くなって。何も言えぬまま背を向けてしまった。また同じ状況に陥ってしまうのではと考えると、その日以降会いたいとは思えなくなってしまった。違うのに、ハルはあの暴漢とは、違う人なのに。覚えてしまった男性に対する恐怖が、否応無しに暴漢とハルの姿を重ねてしまったのである。なんてひどい事を、自分を助けてくれた人にしたのだろう。

自分の知らない顔を持っていたとして、それが何だというのか。一日二日しか会っていない人間の人となりを勝手に決めて思い込んで、違う態度をとられれば拒絶するなんて。そんな大馬鹿者だったなんて！

・・・そうじゃない。そんなんじゃ子供と言われて当然だ。

知らないなら、知ればいい。知ってゆけばいい。鈴に差し伸べてくれた手の温もりは決して、幻でも夢でもない。優しい声も笑顔も指先も。鈴の心を掬い上げてくれた、鈴の知っているハルは全て、信頼できるものだった。だから何にも怖くない。驚くことはあるかもしれないけれど、自分の目で知ったハルは少しも、本当は少しも怖くなんかないのだと。

大きく呼吸する口がからからに渇いて、鈴はこくりと生唾を飲み込んだ。怖くない。怖くないと繰り返す。

真実、心から恐怖していたのなら、ハルが鈴に触れた時、あれほどに顔が熱くなっただろうか。心臓が早鐘を打っただろうか。こちらを見つめる視線は、まるで悪意などない澄んだものだった。見つめられて、触れられても、夏祭りの夜のような嫌悪感は不快感は、ほら、一切なかったではないか。

改めて、あのひとを好きになったのだと感じる。気付いたのは、杏との喧嘩のさなかだったけれど。そうだ自分は、詩織が言っていたように、あの時にはもう、きっと。

キキイッというブレーキ音が真横から轟いた。間髪いれず、細道に飛び出した鈴へ車の運転手から怒声が飛ぶ。

「馬鹿野郎！どこ見てんだ！」

「・・・・・っご、ごめんなさい！」

息切れをしながら、掠れた声で鈴は謝った。通り過ぎてゆく車を見送り、左右を確認してまた走り出す。暫くすると、あの公園が、見えてきた。

お願いだから、まだいてほしい。角を曲がり、祈る気持ちで鈴はアパートの方角に首を伸ばした。植えられた木々が遮って見えなかったその部屋の窓を、見て。

電気がついていないことは、分かった。

「・・・、」

止まりかけた歩みを、気力で動かす。まだ、出て行ったと決まったわけじゃない。いなくなったと決まったわけじゃない。単に仕事とか、どこかへ出掛けていて、帰ってきていないだけなのかもしれないから。

全力疾走したことと同時に、襲いくる不安によって動悸が激しくなる。どくん、どくんと一歩進むたびに大きくなる心音。アパートの前に辿り着き、鉄骨の階段をかん、と上った。汗ばむ手に手摺りの錆が剥れ付く。

階段を上りきり、三部屋並ぶ二階、その一番手前の部屋。

治まらない荒い呼吸を、胸に手を当てて鎮めて、鈴はドアの目の前に立った。喉を鳴らして唾を飲み込み、震える指先でドアチャイムのボタンを押す。静謐とした夕闇のなか、ピンポーンという音がやけに明るく響いた。

「・・・・・・」

返事がない。物音もない。それは確かに、窓から明かりが漏れていなかったのだから、留守なのだろうと分かるけれど。

次第に溶暗してゆく鈴の心は、嫌な予感が的中したのだと確信する。

遅かった。手遅れだった。ハルはもう、いなくなってしまったのだ。

脱力した膝が崩れかけ、がくがくと小刻みに揺れる。顔を俯かせ、

ぎゅうっと胸元を両手で押さえた。信じたくない。受け入れたくない。こんなの嘘だ。そう反発する思いで、息が詰まる。走って乱れた髪がはらりと垂れ、唇を噛む鈴の、失望に満ちた表情を隠した。

なんで、どうして。やっと自分で気付いたのに。どうしてどうして、どうして。

か細い吐息が漏れ、嗚咽とともに大粒の涙が零れ落ちる――――かという時だった。

「・・・・・・え?」

ドアの向こうから、声がした・・・ような気がした。ような気がした、というのは、鈴が衝撃に狼狽えていたあまり、最早そちらに耳を欹(そばだ)てていなかったからである。

まさかショックすぎて幻聴でも聞くようになってしまったのでは・・・と自分の耳を疑いかけたところ、再び。

「正面きって挨拶か?ご丁寧に玄関からとは・・・畏れ入るよ」

「・・・!!」

声が、聞こえたのである。幻聴ではない。これは幻聴ではない!何だか低くて冷たくて聞き慣れぬ口調だけれども、これはハルの声である!

鈴は一瞬前まで歪めていた顔を、さもくしゃくしゃに丸めた紙を引き伸ばす要領で、大きく驚きの色に染め替えた。目も口も、ともしたら鼻までも、一様にまるい形となる。

ハルが、このドアの向こうにいる。まだそこにいるのだ。うそ、と震える唇が動いた。

「・・・・・おい、こっちはもう構えて待ってやってんだ。黙っ

てないで、かかってくるなり返事するなり、し」
「あの！！」

逸る胸の鼓動が、今までとは異なって急速に熱を持ちはじめる。いないと思っても信じられなかったけれど、目の前にいると分かっても信じられなくて。早く姿を見たくて。どこにも行っていないのだと安心したくて鈴は相手の声を遮った。

すると、ドアの奥で何やら動揺したふうな空気が伝わってくる。あれと不思議に思うも、鈴にとってはそれどころではないので、返事を待たず、続けて名乗った。

「こっこんな時間にごめんなさい・・・え、えっと、尾本鈴です。・・・・・・・・・ハル、ちゃん？」

上擦った声が室内に投げかけられる。直後近寄る気配と鍵を開ける音がして、ドアノブが回された。緊張で固まる体に叱咤して、動かした首が上を向いた。ドアが開く。姿を見留める前に甘い香りが鈴を包み、ふあ、と何だかまた胸が苦しくなって息を呑んだ。そうして見つめる先にいたのは、ドアを開いて迎えてくれたのは、とても驚いた顔をした、けれど紛うことなき、ハルの姿。視界が、潤む。

「す・・・す、ずちゃん・・・」

さっきと違う柔らかい声。でありながら呆然とした、あちらもまるで信じられないものでも見ているかのような声だ。

当然だろう。こんな時間に押しかけてしまったのだから。非常識なのは重々承知の上だ。でも、それでも今すぐここに来て確かめたかった。ハルがいなくなってなどいないということを。非常識だろうがなんだろうが、それだけは。

肩の、足の力が抜ける。ぺたん、座り込んで鈴はほうっと息を吐

いた。よかった、本当によかった。

## ＊恋の行方（４）

沈黙がやや場を支配する。西日はいよいよ地平線を過ぎて落ちてゆき、薄い闇色に辺りは塗り替えられていっていた。

音を交えない空間の先で佇むその人は、はじめ驚き一色だった纏う空気を、やがて濃い困惑のそれへと変化させていった。はっとして鈴は顔を上げる。安心に俯いている場合ではない。真っ直ぐ見上げて交差した視線。相手もこちらから目を逸らすことなく、いや逸らせられなかったのだろうか、まさしく釘付けといった態で正面に立ち尽くしているのだ。あ、と喉の奥から乾き掠れた単音が頼りなく放たれる。何かを言おうとする鈴にハルは顔色を更に不思議そうなものへと変え、耳を傾けるように、やや首をかしげた。

「ご・・・ごめ、なさい・・・。　わたし、」
「なに？」
「え・・・えっと、その」

言い淀む自分の口が、言うべき言葉が浮かばない頭が、ひどくもどかしい。上げた顔を再び下げ、鈴は視線をさ迷わせる。舌が縺れる。不安が取り払われたことで弛緩していた体も、今度は緊張で強張ってきた。ハルは鈴の言葉を待っている。当然である。ここで無口になってしまってはいけない。前回の二の舞は是が非でも避けたい。言うのだ、鈴。まず失礼を詫びて、訪問した事情を説明して、訳を訊いて。そうだ言うのだ。

「わたし・・・・・・私！ハルちゃんが好きなの！」
「・・・・・・へ？」

ああしまった！叫ぶように言ってしまってから鈴は口を覆った。

さて、どこをどう間違ったのか、思い余ってぶつけた最初の言葉は、自分の最も秘匿したい場所にある想いだった。さあっと一瞬だけ血の気の引いた表情になると、あとは茹で上がりすぎた蛸のような色が顔と首と、ついでに胸元までをも支配した。

「え!?い、いや!!ちちち、ちが!違う!そうじゃなくて!」

口走った自分自身に愕然としつつ、慌てて発言を否定する。両手と首をぶんぶんと振り、いや、とか、違う、とかを兎に角繰り返す鈴。伝えるべきことの順序を全て無視した己の舌に、なぜ!と心中で嘆いた。混乱を来した脳内では渦潮のごとく感情が回りめぐっている。時間を巻き戻したい。凄まじく巻き戻したい。

「わたわた、わたしはただっ!ただ確かめたくて!そっそうなの!あの人が、つ、槻尾さんが言うから!言うから、だから慌ててっ」

「・・・・・ノブちゃん?」

「っそう!だからね!違うの!」

先刻浩信に「自分の気持ちはちゃんと言う!」と声高らかに意思表明してしまった手前、こんなふうに告白直後に否定するのは、まったく格好の悪く情けないことではあるが、鈴にはその辺りまで考えが及ぶ余裕も、まして初っ端から愛の告白を堂々とする心の準備も、残念ながらなかった。

槻尾、という名前に注意が向いたのだろう。鈴のしどろもどろな喋りをどこかぽかんと耳に入れていたハルは、そこで口を挟んできた。

「鈴ちゃん、ノブちゃんと会ったの?」

「う、うん。それで、ハルちゃんが・・・っ、その、どこかに行っちゃうって、聞いて・・・!」

「・・・あの御喋り野郎」
「え？」
「なんでもないわ、こっちの話。・・・鈴ちゃん、ちょっと中に入りましょう。ここで話すのもなんだし」

言うや、ハルは何やら片手に持っていたものを玄関のシューズボックスの上にごとりと置き、鈴の元までやって来る。座りっぱなしだった鈴の片腕がぐいと引っ張り上げられ、立たされた。ありがとう、と礼を述べる暇もなく、その腕は少し強引さを感じる力で玄関の中へと引かれ、ドアが閉められる。

そっと開放されて、踵の潰れた靴を脱ぐ折、シューズボックスに手をかけて体重を支えると、ふとそこに不自然に鎮座するものに指先が触れた。部屋の明かりはなく、そして屋外の光もまた心許ない時間帯で、直ぐにはそれが何か判別できず、疑問符が浮かぶ。けれども鈴の前方でハルが照明のスイッチを押し、ぱっと天井から蛍光灯の光が降り注いだとき、思わず自分の目を疑ってしまったのである。

「・・・え、これ・・・」

銃だった。鈴でも見たことはある。聞いたこともある。一丁の拳銃だった。硬質な感触が指先から伝わる、どこか無機質なそれは、銃だ。

「・・・え、え・・・？」

どうしてこんなものがこんなところに。鈴が眉を寄せてしぱしぱと瞬きをしていると、脇からすっと伸びてきた腕が、短く重々しい音を立ててそれを視界から奪った。

「初めて見た？」

遊ぶかのようにくるくると回して銃を手のひらに収めるハルが、鈴にそう問いかけた。え？と未だ呑み込めていない銃の存在に、鈴は呆ける。

「ハルちゃん、そんなの持ってたの・・・？おもちゃ・・・だよね？」

まさかとは思うものの、念を押すべく訊いてみる。だがそんな鈴の予測とは反して、ハルは優しいというよりは、感情や意思を隠すためのような柔らかな笑顔で、言葉を返してきた。

「んーん、本物」

「・・・・・え？あ、じゃあ、ハルちゃんやっぱり警察の人だったの？だから銃を・・・」

「残念、はずれよ。鈴ちゃん」

「・・・・・・？」

つい先程の失態も狼狽もすっかり忘れ、鈴は目の前のハルと、彼が手にする小型の武器にますます謎を深める。何が何だかわからない、と顔に出ていたのだ。ハルは小さく噴出し、くつくつと腰を屈めて笑いはじめた。

「ハルちゃん・・・？」

「あは、ごめんね鈴ちゃん。でもね、ちょっとタイミングが悪かったわね。まさか、また会うなんて思ってもなかったから」

「――――・・・」

“また、会うとは思ってもいなかった。”薄い、形の整った唇が

鈴に向かって告げる。両の鼓膜を通り、彼が言うところの意味を理解すると、鈴は瞼を大きく持ち上げた。つまり、それは。それは。

「私とはもう会うつもりはなかったってこと・・・？」

酷く小さい声で、核心を突くように問う。動揺と静かな衝撃に足元がふらついて、膝が震えた。頼むから否定してほしい。そんな願いとは裏腹に、ハルは困ったように眉尻を下げて笑うと、ごめんね、とまた謝罪をした。

「な、なんで・・・？この前は、また会えて嬉しいって！友達って言ってくれたよね・・・！？・・・あ、わ・・・私があんなふうに何も言わず帰っちゃったから？それともっ、め、迷惑ばかりかけちゃってるから？そっ、そうだよね、泊めてもらったり、こんな大怪我させたり・・・！私本当に酷いことして・・・っ、ごっ、ごめんなさ」

考えてみれば思い当たることが多すぎて、鈴は今更ながらに罪悪感に打ちのめされる。ハルに会いたくないと思わしめる理由など、いくらでもあるではないか。そうだ、何が恋だ。何が好きだ。面倒ごとしかもたらさないこんな人間と、一体誰が会いたいと思うのだ。ああ、と鈴はまたもや自分の鈍さ、愚かさを呪った。自惚れていた。ハルの優しさに甘えて、まったく、なんて嫌な思いをさせてしまったのだろう。

涙が滲む。ごめんなさい。消え入る声で再度詫びた。居た堪れず、顔を見られたくなくて下を向く。恥ずかしい。ハルに嫌われたのだ。今謝ったところで遅いのに、一体自分は何をしているのか。そう思うと、もはや己のする事なす事裏目に出ている気がした。

すん、と小さく鼻をすする音を立て、涙を拭おうと手を目尻に持

っていった。今、彼のためにできることなど、ここから出て行くほかないに違いない。なにせ、もう会うつもりはなかったと言われたのだから。さっさと帰ってしまった方がいいのだ。邪魔に思われるくらいなら、言いたいことも訊きたいことも全て仕舞いこんで、もう本当に、二度と会うことなく、今度こそさよならを言うべきで。

「来ちゃって、ごめん、ね。・・・も、もう帰るから」

泣き笑い顔で鈴は半身になる。頭を悩ませたこの数日も、必死に走ってここまできたことも、意味のないことだったのだなと思い知りつつ。踵を返し、脱いだばかりの靴に足先を通した。潰れた踵を直そうとして、しかし震える指に悪戦苦闘して結局諦めると、背後のハルに気取られぬようひっそりと息を吐き、ドアノブに手を伸ばした。

だけどもそれは、ノブを掴む前に別の体温が重なって。

「――――え、」

鈴の動きが遮られる。

「こおら。誰が帰れって言ったかしら？お馬鹿さんね」

## ＊恋の行方（5）

暑いはずなのに、決して寒くも涼しくもないのに、触れた体温が何故か心地良く感じられた。背中から覆いかぶさるハルは片手を鈴の手に重ね、片手を鈴の胴、腰の辺りに回して退出を制止する。甘い香りが一層鼻腔に届き、鈴は心臓を、それはもう体を突き破って飛び出すのではないかというほど跳ねさせた。

「・・・っは、ははハルちゃ、なに!?うあ・・・ええっ!?」
「はいはい、良い子だから、もうちょっと落ち着いて。私は帰れなんて一度も言ってないわよー」

肩からひょい、と顔を出すハル。至近距離に驚いた鈴は咄嗟に離れようともがいた。しかし胴に回された腕は存外力強くてびくともしない。意味をなさない声だけが狼狽える鈴の唇から零れ落ちた。あわあわと状況についていけぬまま、真っ赤に染まった頬がハルの目に曝される。

「ふふん」
「・・・・・・な、なに!?」

愉快げに細められた双眸に、間近で見つめられてしまう。ドアに押し付けられた片掌は、上から柔らかく彼の手に包まれて、あまつさえ指を絡められ。ひいいい、と鈴は羞恥におののいた。背後から抱き締められて思い返されるのは、初めて出会ったあの夜の公園の光景であるが、今なら思う。どうしてあの時は平気で身を預けていられたのだろうかと。こんな、こんなにキレイなヒトに。

「駄目ね。ちょっと拒んで追い返そうと思ったけど、鈴ちゃんの泣き顔見ちゃったらどうにもねえ・・・ほとほと弱っちゃうのよ」
「・・・あ・・・い・・・いいの！ごっごめんねやっぱり邪魔だよね、そうだよね！すすすぐ帰る！帰るから」
「だあ、め！帰さない。ここに居なさい」
「・・・っ」

ハルの言葉にショックを受けるも、慌てて彼の腕の中から抜け出して出て行こうとする鈴。だが力の込められた束縛がそれを許すことはなく、反動で背中に体重をかけてしまった。より密着する破目になって、かあっと顔が火照る。追い討ちをかけるように耳元で響くのは、男性にしては高い、またそこはかとなく甘い、そして誰よりも鈴の心の奥に届く声だ。帰さない、とハルは駄目押しで耳を擽る。全く以って理解不能であるのは鈴で、目を白黒させるのみ。おかしいな。会うつもりはなかっただとか、追い返そうと思っただとか、そんな言葉でこちらを拒んでいるくせに。それなのに、彼は同じ唇で、同じ声で、帰さないと。ここに居なさいと自分を引き止めている。矛盾している。お頭（つむ）の足りない鈴にも分かる。矛盾しているではないか。

「矛盾してるわよね。訳が分からない！って顔してるわ」

まさしく言い当てられ、真横にある端正な横顔が苦笑の形をとるのを、鈴はどぎまぎと見遣った。尤も直視はできないので正しくは、視界の端に収めた、と表現すべきかもしれない。困ったふうにハルは笑うが、更に更に、さらにこの状況に困っているのは自分なのだと力説したい気分である。

「ごめんなさい。でも、あんなつらそうな顔されると帰せないわ。さっきまでは、本当にもう関わらないでおこうと思っていたんだけ

ど。鈴ちゃんがあんまり可愛いから、私も絆されちゃうのかしら」

どう反応したらよいのだろう。困って困り果てて、ただ赤い顔で瞳を潤ませていると、重ねられていた手の甲から頭に移動してきたハルの手が、そっと鈴の頭を包んだ。額を前髪ごと撫で、あわせてふにゃりと絡む細い髪を長い指で遊ぶ。手首から腕にかけて固められたギプスが鈴に当たらないように、当たって痛めないように、掌はそっと添えられる。気遣いに気付いて、どうしてか息苦しさを覚えた。頬の火照りが僅か引き、代わりに静けさが心に訪れる。

額に触れる掌は、鈴に熱ではなく、温もりをもたらすためのものだ。鈴はそうして、前回も前々回も、いつだって彼の優しさをもらってきたのだ。

甘えるのは駄目だと思った。

「・・・いい。・・・ハルちゃん。私、もう迷惑かけたく、ないから。だからちゃんと、お別れする。無理させてまで、一緒に居たいとは思わないよ。ハルちゃんの邪魔には、なりたくない」

鈴は目一杯、そんなことを言ってみる。ハルの言葉の随所にある、自分と距離を置こうとする意思が、胸を貫く。たった今聞いた台詞でも、もう関わらないでおこうと思ったと、そう言われた。それほどまでに自分は、彼に疎まれていたのだ。敬遠されていたのだ。知らなかった。でも言われてみれば当たり前のことで。自分の行いのせいで、それ以外に何が原因であろうか。彼にかけた迷惑を考えれば、この結果は言うまでもなく因果応報で。

なのに、なのにハルは優しいから。鈴が悲しめば、つらい顔をすればこうして引き止めてくれて。労わってくれているのだ。彼の思いやりは、今鈴を抱き締めている腕、頭を撫でている指先にも感じられる。

しかしだからと言って、このハルの優しさは、甘えていい優しさなのだろうか。――いいや、違う。今甘えるのは・・・・・・夏祭りの夜とは違って、今甘えることはきっと駄目なのだ。離れがたい温もりに背中を預けながら、鈴はぎゅっと目を閉じて、ふるふると頭(かぶり)を振る。

「槻尾さんが言ってた。人を見かけで信用するのは愚かなことだって。私はハルちゃんの親切に頼りっぱなしで、優しさに甘えっぱなしで、ハルちゃんが本当は私を鬱陶しく思っているとか、考えずにいたの。考えなしで、気付かなくて・・・・・・ごめん！だからいいの！迷惑かけた分、恩返ししたいとか思ってたけど、やっぱり私、会いに来ちゃいけなかっ・・・」

「ああもう、この馬鹿っ！」

ぎゅう、と今までになく強い力が鈴を捕えた。遮る声は、どこかもどかしさや苛立ちを含んでいて、柔和な印象を纏う彼らしくない、焦れたものだった。そんな声色で馬鹿と罵られたものなので、息を詰めて瞠目する鈴は最初、いよいよ今までの自分に対する鬱憤や雑言が飛んでくるのかと身を硬直させた。が、どうもそうではないらしい。

はあああ、とそれはそれは深い溜め息が聞こえる。次いでぽんぽん、と頭を軽く叩かれ、暫しの沈黙。――の、後。かっちりと固定された頭の横、こめかみに、ちゅう、と音を立てて柔らかなものが当てられた。

「！？」

前回頬に感じた感触は忘れようにも忘れられない。従って場所が変わろうと、それが何であるかなど訊かずとも理解できた。できたからこそ、信じられなかった。一度で終わらず、ちゅ、ちゅっとま

るで啄木鳥が木の幹に嘴を立てるように続く――否、それは誇張表現だが――啄ばみに、信号機の如く鈴の顔色は容易く赤に染まる。キス。ハルが、キスを。

高々こめかみに吸い付かれたくらいで、とまた詩織の子供扱いする笑い声が脳裏に浮かべど、頬にするそれとは違って、いくらなんでもこれは挨拶でもなんでもないだろうと鈴にも分かるので。混乱である。

「うひゃああっ」

「ううん、可愛いけど、色気ないわね鈴ちゃん」

色気があろうとなかろうと、そんなことはどうでもいい。ただいま驚愕の極致に立っているのだ。青も赤も通り越して白くなりかけている顔色で、鈴はじたばたと動き出した。なんで！どうして！ハルの、ハルで、唇を、こめかみが！ああ言葉にならない。

鈴の身動きを察しても、それでも腕を緩めないハルは若干複雑そうな表情になる。

「ちょっとちょっと、ついさっき私に告白しといて、その嫌そうな反応はどういうことかしら？」

「いっ、いいい嫌じゃな、び！びっくりして」

「それにしたってもっと頬染めるとか、恥らうとかあるじゃない」

「恥らってるよ、死ぬほどっ！なっ・・・なんでこんな、こんなこと」

鈴がこめかみを押さえて涙目で見上げると、ハルはくるりと鈴の体を回転させ、向かい合わせにする。そうして両腕の中に閉じ込めて穏やかな微笑を宿すと、腰を屈め額をこつんとくっ付けた。再び目と鼻の先になる整った顔に、鈴はびくりと身を竦める。

「私のことが、好き？」

彼は問う。分かりきったことを。

「う・・・うん」

鈴はおずおずと頷いて、不可解さと不安に揺れる瞳で見つめ返した。目の前には、嬉しそうな表情。ありがとう、と呟いて、ハルはまた、今度は鈴の額に唇を寄せた。避けた前髪を元に戻し、乱れを指で梳いて直す。

「恩返ししたい、って言ってくれたわよね」

「あ・・・えっと、うん」

「それじゃあ、一つだけ聞いてもらおうかしら。物凄く、我が儘なこと」

「なに・・・？」

伏せられた瞼と、影をつくる長い睫に見惚れながら、鈴は訊ねた。瞬間、どこか悲しそうな、寂しそうな翳りを相手に垣間見て、胸がざわつく。ハルがこんな顔をする理由は、一体何なのだろう。知らない。鈴は何も知らない。ひたすら、その澄んだ声が“我が儘なこと”を教えてくれるのを待った。

ほんの少し、諦めの色を感じ取る。上げられた口角も、鈴が見知った笑顔のものではない。切なくなって、どうかしたの？と問いかけようとしたところ、彼の瞼は持ち上げられる。鈴が彼にしてあげられる、恩返し。ハルは言った。

「私、明日この町から出て行こうと思うの。今、決めた」

「・・・え・・・？」

「でもどうか勘違いしないで。鈴ちゃんは何にも関係ないの。私が

あなたと関わるまいと思ったのは、私自身に理由があるだけ。鈴ちゃんは何にも悪くない。迷惑だとか邪魔だとか、そんなふうには思ったことないわ。それは、本当に本当よ。誤解しないでね」

「・・・・・ハルちゃ、」

「それから正直言うとね、この前ほっぺにしたキスは、他意があったわ。愛情じゃなかった。ごめんなさい。・・・・・私のこと、嫌いになったかしら？」

ぶんぶんぶん。取れてしまうのではないかというほど、鈴は首を振った。愛情などでされたキスだとは、もとより思ってもいなかった。理由は知らないが、とはいえ嫌いになるわけがない。

「よかった・・・って言うのは、ちょっと卑怯かしら。だけど、でもね。今したキスは純粋に、鈴ちゃんにしたいと思ったからしたの。恐らく恋ではないけれど、私なりの気持ちを伝えたくて。こうするのが一番いいと思ったのよ」

「・・・うん」

「好きって言ってくれて、本当に嬉しいわ。鈴ちゃんみたいないい子、私には勿体ないけれど」

またも鈴は首を振る。そんなことない、勿体ないなんてこちらの台詞だ。勿体ないと言ってくれるなら、嬉しいと言ってくれるなら。明日出て行くなんて言わないで。言わないで、ずっと傍に居て。

「・・・・・・・・・っく、」

「泣かないで、お願い」

ぎゅうっと抱き締められる。背中を、後頭部を撫でるハルの手。縋るように鈴は彼の服を握った。嫌々と、駄々をこねる。女性らしい外見の彼の、しかし柔らかさはない平面的な胸元に額を擦りつけ、

襲う息苦しさに喘いだ。行かないで。お願いだから行かないで。声を張り上げて伝えたい願いは、喉に痞えて一言たりとも届かない。

「ごめんね、鈴ちゃん。ありがとう、こんな私のために、泣くことなんかないのよ」

「・・・っ、う、ひっ」

次から次へと涙が溢れて、頬を伝う。そのいくつかはハルの唇が掬い取って、指が拭い去ってくれたけれど、止まらなくて。顎から胸元に落ちると、それは徐々に染みになってゆく。歪む視界の先では、痛ましい表情がこちらを見つめる。どうして、そんな顔をするの。泣いている自分よりももっとずっと、苦しそうな、痛そうな顔。

「ここを出て、ハルちゃんはどこに行っちゃうの・・・？」

鈴が訊いても、答えは返らない。ごめんねとただ謝られるだけで。行き先を知ることも、まして追いかけることもしてはならないのだと、暗に突きつけられた。望みを失い、鈴は俯く。どうしようもないではないか。これでは、もう、この想いは。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1088w/

鈴の夏

2012年1月4日02時46分発行